

# ボクはボクだ

横井 秀治

## 目次

- 一章 二つの手
- 二章 よろこびの声
- 三章 鏡になる
- 四章 幸せなら手をたたこう
- 五章 青い瞳のおばあさん
- 六章 もう一人のおばあさん
- 七章 地域の仲間たちと
- 八章 三世代一緒の日々
- 九章 夏のチロル
- 十章 雪の黒い森
- 十一章 おばあさんとの別れ
- 十二章 生まれ育った地へ
- 十三章 笑顔の日々
- 十四章 仲間の命
- 十五章 グループホームへ
- 十六章 ボクの自立
- 十七章 ママの願い
- 付章 あるがままの、パパの日本旅

## 一章 二つの手

「なぜ、生まれたのかって？」

それは、すべての生きものと同様に、ボクの命が世の中で必要とされ、意味を持つているからなのだ。たとえば体細胞の二十一番染色体が一本多いダウン症でもね。いや、もしかしたら、だからこそ、まわりの人たちと一緒に生きていく中で、ボクの命は光を放しているのだ。

さらに、付け加えたいのだ。そもそもボクには、なぜという言葉はないのだ。「ボクはボク」と言う、あるがままの姿勢で毎日暮らしているのだから。

この「あるがまま」という言葉、ボクは大好きだ。そこには、自分なりにするという積極的行為があるからなのだ。それを始めて体験したのは、ボクの命が芽生えてから間もない時のことだった。

体が溶けそうになった。このままでいたら、ボクは消えてしまいうに違いない。懸命に踏みとどまったのだ。と、今まで激しく揺れていたボクの体長十五ミリメートルの体が止まって動かなくなってきたのだ。と同時に、優しく撫でる二つの手があった。一つは柔らかい手。もう一つは硬い手。

その二つの手が、会話を交わしていたのだ。

「急にお腹の調子が悪くなったと言ったので、すぐにここの病院へ駆けつけたのがよかったですね」

「そうね。あなたのお母さんがタクシーを呼んでくれて」

「まさか小さな命が、きみのお腹に宿っていたとは思ってもよらなかったよ。流産をしないで本当によかった。ドイツから日本に来て、ここ一週間目まぐるしい日々が続く、きみにとっては緊張した日々だったからな。お腹にも、その影響が出たのだろうか」

「そうかもしれないわ。でも、妊娠していたとは知らなかったわ」

「きみはのんきなところもあるからな。とにかく、母の家近くに病院があったのが幸いしたね」

「まったく、そうね」

「きみにとっては初めての日本の地。何かとドイツの文化や習慣が違うので驚いただろう」

「それはまだわからないわ。でも、夏のこの湿った暑さ、今まで体験したことがなかったわ」

「今のお腹の調子はどう？」

「いいわよ」

「きみに見守れながら、小さな命は懸命に生きようとして頑張ったのだよ」

「そうよね。この新しい命、うれしいわ」

「あと八ヶ月したら、産まれてくるとドクターは話してくれたね。きみは慣れぬ地なので大変だろうが、頑張ってほしい」

「もちろんよ。お腹にいる新しい命と一緒にね」

柔らかい手は、力強い声を出しながらお腹を撫でた。その手の上に、硬い手が重なったのだ。と、ボクの体が一回転した。

翌日、硬い手は病院に行き、柔らかい手に話したのだ。

「昨日病院から戻ると、母から『きみは三十二歳、初めて子供を産むにはすこし高齢なので、羊水検査を受けたらどうか』と勧められたよ。でも、『その必要はない』と答えたよ」  
「わたしも、そう思うわ。このお腹のなかに宿っている命、わたしたちによるこびをもた  
らした命、どんなことがあっても産むわよ」

柔らかい手が、壁を通してボクの体を優しく撫でたのだ。その手に重ねながら、硬い手  
が言ったのだ。

「ドクターがこの病院にあと三日間いてから退院して、いつもの生活に戻れると話してく  
れたね。それと、今日の朝、よい知らせが入ったのだよ。ドイツから職を求めて書き送っ  
た、知的障がいのある子供たちが住む施設から返事がきて、指導員としてすぐに採用して  
もよいとのことだった」

「それは、よかったわね」

「東京からすこし離れたところの浜松の地で、二人、いや三人の暮らしとなるな。とにか  
く、退院してから一週間ほど母の家にいて、それから採用してくれた施設に行くことにし  
たからね」

「わかったわ」

二人の手が再び重なった。

それにしても、柔らかい手は勇気があったのだ。南ドイツのテュービンゲンという街で  
幼稚園の保育士をし、北ドイツの障がい者の大きなコロニーで研修をしていた際に、日本  
からドイツへ治療教育学を勉強しようとの志で来た二十八歳の硬い手と知り合いになり、  
半年後にはテュービンゲンの市庁舎の戸籍係員の前で結婚式を挙げ、そのあとすぐに日本  
へ行ったのだから。よほど柔らかい手は、硬い手と一緒に暮らしたかったに違いない。

柔らかい手のお父さんは牧師。そのお父さんは、硬い手と知り合う二年前に交通事故で  
跳ね飛ばされて即死。その一年後には車椅子に乗っていた姉も亡くなり、お母さんは一人  
暮らし。二人のお兄さんのうちの一人は日本行きに反対。それを押し切って、柔らかい手  
は一大決心をして日本に行ったのだ。何も知らない、未知の国日本へ。

## 一章 よろこびの声

硬い手、それはパパ、柔らかい手はママ。その2人の新婚生活が、気候の温暖な浜松の  
三方原ではじまったのだ。住いは、パパが勤め出した施設近くのプレハブ造りの六畳と四  
畳半、それに小さなキッチンがついた職員寮だった。

パパがこの職場を選んだのは、ママがキリスト教の考えを背景とした施設だったら、ド  
イツの生活様式と違って、いくらか馴染んでくれるだろうと期待したからだった。

ママがそこで暮らし出して最初に困ったことは、トイレだった。座って用を足す洋式で  
はなく、汲み取り式だったからだ。早速、パパは初任給で洋式の簡易便器を購入したのだ  
った。

何しろトランク二つで引っ越して来た。パパとママ。家の中には家具がなかったので、簡  
易のソファ、テーブル、それに食器類を近くのスーパーで買い求め、生活できるように

整えていったのだ。

蒲団は、施設で使用されていたものが支給され、畳の上で寝るようになったママ。パパは、ママが畳の上で寝られるどうか心配したのだったが、何の問題もなく、反対に、蒲団は押入れに納まるので、居間兼寝室のスペースが、広くなるのでよるこんだママだった。

胎盤が形成され、ボクとママの間でへその緒が結ばれ、栄養素や老廃物などのやり取りがはじまり、ボクの体はママの温かいお腹の中で次第に大きくなっていったのだ。

ボクの体調が三十センチメートルぐらいになると、聴覚がより発達し、ママがドイツから持ってきた縦笛の音がよく聞こえるようになった。そうすると、ボクは拍手をする替わりに、足でママのお腹を蹴ったりもするようになったのだ。

ママは女学生の時代、宗教と音楽が抜群により点数を取っていたこともあって、日本の民謡や童謡を二、三回聞くと、もう笛でその曲を奏でることができたのだ。ボクとママのコミュニケーションは、もうその時点ではじまっていた。とにかく、ママのお腹の中は居心地良く、特に、ママがボクによく語りかけてくれたのがうれしかった。

でも、ママは大変だった。初めてのお産、それもまわりには外国人は任んでなく、日本語をまったく話せなかったからだ。そのような中、近くにキリスト教会があったので、ママはそこによく出かけるようになったのだ。教会員の中に英語を話す人が一人いたので、その人を家に招いたり、また招かれたりもするようになったママだった。

また、近くにキリスト教組織団体の『母の家』があつて、そのシユベスター（奉仕女）との交わりは、ママにとって特に心安らぐものとなっていたのだ。

それに社会性を重んじているママだったので、買物などで一人出かけたりすると、すれ違う人と笑顔で必ず、「こんにちワ」と声を交わし、まわりの人たちと溶け込もうと心がけてもいたママだった。

パパは時間があると、ママに日本語を教えていたが、日常会話はドイツ語だったので、ママの日本語は上達していかなかった。

パパの勤務は当直もあり、また早番、遅番などもあったりしての一定した時間でなかったため、ママは戸惑ったりもしていたな。そのようなママを、パパは自分の職場を案内したり、それに休日になると、ママのお腹の中にいるボクと一緒に、近くの自然豊かな地を散歩したりもしていたのだ。

また、施設内で行われた秋の運動会では、ママはパン食い競争にも参加して一等賞をとったこともあったのだ。その時のママの弾んだ心がボクにも伝わり、ボクの体は何度も回転したのだ。

そのようなパパとママの新婚生活が続き、ボクの出産予定日の二週間前のことだった。ボクの体を優しく包んでいた羊水が、急におかしくなってしまったのだ。

ママはトイレに駆け込んだあと、しばらく六畳の居間で、体を横にしながら大きな声を出しはじめたのだ。それを耳にした隣家の人が玄関のドアを開け、ママのところに寄り、その人がパパの職場にすぐに電話をかけたのだ。

五分もしないで、息を切らせながら家に戻ってきたパパに、その隣の人が、  
「破水となっていますよ」

と早口で言うと、パパは、  
「すぐに病院へ行かねば」

と応え、隣の人の車にママを乗せ、近くのクリニックへ走ったのだ。

病院に着くや、ママとボクは分娩室に運ばれたのだ。ママは少しも動揺した様子もなく、平静だったが、パパはソワソワして落ち着きがなかったのだ。そのパパは、看護師に言われて外で待つことになったのだ。ママは、パパと一緒にいて、ボクが産まれる瞬間を見てほしかったのに。それに男性医師も勇気がなかったのか、パパを外で待たせようとしたのだ。ママの残念がった心が、ボクに伝わってきたな。パパはママの気持ちを察して、医師にお願いすればよかったのに。

ママが分娩室に入ってから三時間して、パパはボクの産声をドアの外で聞いたのだ。一九七八年三月一九日二三時四五分だった。パパは、すぐにボクとママのところに来ようとしたのだが、看護師に、

「明日、会ってはどうか」

と勧められ、それに従ってしまったのだ。ここまで頑張ったママの手を握り、声をかければ、ママはよろこんだのに。

翌朝、ボクは、パパと初対面をしたのだ。パパは、ママに抱かれているボクの顔をじっと見て、うれしそうな顔でママに言ったのだ。

「ごころうさん。色が白く、ばっちり二重瞼で整った顔だ。ありがとう」

二人はよろこびに満ちた目で、ボクを交互に抱きながら見つめていたな。

それから五日して、ボクとママは、パパと一緒にタクシーに乗って帰宅したのだ。

ボクの名前は男子か女子かわからなかったのだ、二人とも考えていなかったようだ。数日してから、ママが、

「ミヒヤエルがいいわ」

と言い、パパは、

「日本名は、あそぶ(遊)がいい」

と言ったので、ボクの名前は横井遊ミヒヤエルとなったのだ。

そのボクはママの乳を吸う力がほとんどなかったのだ、ママは自分の乳を哺乳瓶に入れて飲ませようとしたのだ。が、ボクはほんの僅かしか飲まなかったのだ。

ママがパパに言ったのだ。

「お乳をほとんど吸ってくれないわ。一日にどれくらい飲んだかわからないわ。こうやって哺乳瓶に入れて飲ませると、いくらか飲んでくれるのだけれど。ほら、このノートを見て。毎日ミヒヤエルが飲んだ量が記されてあるでしょ」

ママはそう声を出してから、パパにそのノートを手渡したのだ。それを見たパパは、  
「昨日の朝六時は六十cc、お昼は五十cc、夕方の六時は五十cc、二四時は六十cc、合計すると一日に二百二十ccか。産まれたときが未熟児すれすれの二五五〇グラムだったな。それから二週間経っても体重が二六四〇グラムか」

と言ってから、

「でも、これから吸いつくように飲むよ」

と、力強い声を出したのだ。

「そうよね。こうやって乳を搾り出す必要もなくなるでしょうね」

ママはそう言いながら、ボクに哺乳瓶の乳を飲ませようとしたのだ。ボクはあまり飲まなかったのだ。それを見ていたパパが、ママに訊いたのだ。

「なぜ、あそぶが乳を飲まないかを、きみの担当介護師にたずねてみようか」

「それはいいわね。あの介護師さん、とても優しくかったわ。乳を飲ませる工夫が何かあるかもしれないわね」

二日後、病院での仕事を終えた看護師がママのところに来たのだった。

ママが、ボクがあまり乳を飲まず、体重も増えないことを話すと、介護師はボクを抱いて、ママに乳の飲ませ方を教えたのだったが、ボクはいつものように飲む気はしなかったのだ。

看護師は一時間ほどいてから帰ることになり、パパが彼女をバス停まで送って行ったのだった。途中、パパは思っていることをその介護師に話したのだ。

「知的障がいのある子供が住む施設で働いているので、察したりするのですが、もしかしたら、息子はダウン症ではないでしょうか」

「いや、そんなことはありませんよ」

看護師は、そう返事をするだけだった。暗い夜道なので、パパは彼女の表情を読み取ることはできないでいたな。

「仕事柄、彼らのことはわかっていきますので、本当のことを言ってください」

「いえ、そんなことは」

介護師は、言葉を濁して答えたのだった。

パパはもうこれ以上訊くことはできないと思い、家まで来てくれたことにお礼をのべ、ママとボクのところに戻ったきたのだ。でも、パパは看護師と話した内容を、鵜呑みにはしていなかったな。

ママは、ドイツのお母さんと時々電話で話をしていた。パパの給料は低かったので、いつもドイツから電話がかかってきたのだった。ママはボクがあまりミルクを飲まないことを話したためか、ドイツのおばあさんから粉ミルクなどがよく届くようにもなったのだ。

そのボクの体重はほんの少しずつ増えてはいたが、他の子と較べると極端に少なく、生後一ヶ月経っても三〇〇グラムだった。

ママの献身的な見守りにも拘わらず、ボクの首は四ヶ月過ぎても座らなかつた。そこで、パパはボクが産まれた病院ではなくて、他のクリニックで、血液を調べてもらおうとしたのだった。二週間以内に、その結果を知らせてくれることになったのだ。

パパが職場で働いていると、事務職員が来て、

「横井さん、電話ですよ」

と言ったのを聞き、パパはすぐに電話機が置いてあるところに行き、受話器を取ったのだ。

「ミヒヤエル君の血液の結果が出ました」

電話線を通しての声に、パパはハッとして、いくらか恐さを覚えながら、その声に耳を傾け続けていたのだ。

「検査の結果、二十一トリソミーのダウン症と判明しました」

パパはそれを聴くや、そのようなことだろうと想像していたにもかかわらず、気が動転して何かを言おうとしたのだったが、声が出ないでいたな。受話器の向こうで何かをしゃべっている声が、パパの耳に入ってこなかったのだ。

しばらくして、パパは、

「そうでしたか。ありがとうございます」

と言つて、受話器を置いたのだ。その時、パパは、「ありがとうございます」と反射的に口から出た言葉が耳に残り続けていたな。と同時に、パパはボクが産まれた病院では、なぜ教えてくれなかったのだとの思いになっていたのだった。

「外国人の妻だったからなのか。でも、それならいざいれダウン症わかるのに。あとで言おうとしたのだろうか。いや、違うだろう。出産したあとに、すぐに我が子を見ることができず、また極端に乳を吸う力のなかった子だったので、担当の医師はこの子の生命力はないと判断したのではないだろうか。だから言わなかったのだろう。そうとしか考えられない」

パパは目の前の受話器をじっとしばらく見つめたあと、仕事場に戻ったのだ。体から力が抜けたようになった。パパは、やはりそうだったのかと何度も心の中で呟き、家に戻ったら、ママにどのように伝えたらよいのだろうかと考え続けていたのだった。

勤務時間が終わり、帰宅して玄関で靴を脱ぎ出したパパに、ママがいつものように明るい声で、「おかえりなさい」と日本語で言ったのだ。

六畳の居間に入ったパパに、ママが話し出したのだった。

「今日、母から小包が届いたわ。あなたが戻ってから、紐をほどこうとしたのだけれども、待ちきれなくて開けてしまったわ。ほら、母が送ってくれた木のおもちゃがあるでしょう。ミヒヤエルは、まだあのようなおもちゃで遊ばないのに。でも、そのうちに関心を示すでしょうね」

ママはおもちゃを手にとつて、パパに見せたのだ。パパはそれを手に持ちながら、話さなければならぬと自分に言い聞かせ、ママを畳の上に座らせ、

「きみに伝えなければならぬことがある。今日、クリニックから電話があつて」

と、弱々しい声を出したのだった。と、前に座つておもちゃを動かしていたママの手が、ぴたっと止まったのだ。

「検査の結果、あそぶは」

パパは、次にいう言葉が重たくて、なかなか口から出てこないでいたな。やっと声を絞つて、パパはママの目を見ながら言ったのだ。

「あそぶは、ダウン症だとわかった」

ママは一瞬、体をギクツと震わせ、視線を下に落としたのだった。そこには、ドイツから届いたおもちゃなどが包まれた、包装紙がきちんとたたまれてあったのだ。

何ということを書いてしまったのだろうと、パパは思ったのだ。ママをさらに正視しなければならぬのに、パパもその包装紙に目を落とすし続けていたのだった。二人の間に、沈黙が流れ続けていたな。

しばらくすると、ママが立ち上がり、隣の三畳の寝室で寝ているボクのところに来て、ぐっすり眠っているボクの寝顔に自分の顔を重ねたのだ。ボクは眠っていたが、何か震えるような手と顔がボクを包んでいたのを感じたな。目を開けると、パパがママの肩に手をかけながら、二人ともボクをじっと見つめていたのだ。そのあと、ママとパパは居間に戻つたのだった。

ママがローソクを灯し、それを見ながら、

「ミヒヤエルがわたしを母として、そしてあなたを父として選んだのだわ。それを心に留めながら、暮らしていきましょう」



と声を出すと、パパは、「もちろんだ。この子をどうしても育てる」と、力強く言ったのだ。

この日の夜、ボクの住む家はローソクの光がずっと灯っていたな。

### 三章 鏡になる

浜松の冬はドイツと較べると明るく暖かかったのだろう、ママはセーターなしで毎日過ごしていたな。

そのママは、聖隷事業団を創設した人の奥さんから借りた竹作りの乳母車に、ボクを乗せて毎日のように外に出ていたのだ。休日になると、パパもその乳母車を押して一緒に散歩するようにもなっていた。

ママは道行く人と出会うと、親しそうに挨拶を交わし、ボクをいつも笑顔で皆に誇らしそうに見せていたな。日本語を話せず、親戚や友人もなく、ボクを今後どのように育ててよいのかとの見通しも立てることができなかったママだったが、明るい性格のママは、少しずつ体重が増えてきたボクの成長をパパと一緒によろこびながら、浜松の地で暮らしていたのだ。パパとママの絆は、ボクを通してより強くなってもいったな。

でも、パパはボクへの早期治療をすぐには考えていなかったようで、もし考えていれば、ママが知リたかったいくらかの質問を、専門の人に訊くこともでき、ママは安心した気持ちで毎日を過ごしただろうに。障がい分野に勤めていたにも関わらず、パパはそのことをしなかったのだ。また地域の保健婦さんともコンタクトをもたなかった。

クリスマスが近づいてくると、ママは近くの林から高さ一メートルほどの木を採ってきて、居間にそれを置き、自分で作った麦わら星や月などを枝に吊るしはじめ、十二月二十四日を待ち望んでいたな。

ドイツのおばあさんからは、木のおもちゃが多く入っている小包がよく届くようになり、特に、ボクは音のする木のおもちゃが気に入って、それを手に持って一人でよく遊ぶようになったのだ。それを目にしていたパパは、ボクがよるこんで遊ぶような音のする木製のおもちゃを作りはじめたのだ。作ってはボクに与えていたな。

そのようなある日、パパは街の図書館に行き、一冊の本が目にとまり、それを借りて夢中で読み出したのだ。ママは毎晩、寝る前には聖書を必ず読んでいたが、パパもその本と出合ってから、毎晩のように、それを枕元において目を通して寝るようになったのだ。

その本というのは、宗教哲学に関するものだった。学生時代から、鶴見の総持寺に座禅を組に行き、そこで寝泊りもしていたこともあったパパだ。その本の内容が体を通して自分の中に入ってくるように感じられ、その著者の教えている大学へ、職場の休日を利用して行くようになったのだ。

それから数カ月してから、パパは考え抜いた末にママに言ったのだ。

「浜松から茨城県の土浦に引っ越そうと考えているのだけど、どうだろうか？ 木のおもちゃ

作り、それも障がいのある幼児のためのおもちや作りをしたいのだ。それに、時間が許せば、再び大学で勉強したいのだ。土浦は故郷のような地なのだ。また友人もいる。それに近くに筑波大学があって、そこで池田先生という人がダウン症の早期治療セラピー教室を開いている。そこにあそぶを通わせたいのだ」

さらに、パパは土浦が自分にとって、いかに大切な地なのかをママに話し出したのだ。

「障がいを持つ人に初めて出会ったのは、学生最後の年だった。そろそろ就職先を考えはじめていたときだった。友人に誘われて、ある施設に行って知的障がいの子供たちと一緒に一週間過ごしたことがあったのだ。彼らは初めてのわたしに親しく寄ってきては、何かと話しかけてきたね。その振る舞いは明るく、とても純粋に映ったのだよ。とにかく、彼らと一緒にいるだけで楽しかったのだ。それから教週間して再びその施設に行き、園長に、『是非、ここで働かせて下さい』と願いを出して、職員になったのだ」

パパは続けたのだ。

「言葉での会話が乏しい彼らと寝泊りを共にしていると、ますます彼らに魅せられてしまったよ。ぜいたくにも、彼らと同じような心境になりたいと思っただのだ。その心境というのは、自分をありのままに出して、自分を守り、防衛しないということだった。そこに、言葉を越えた真実性があると感じたからね。とにかく、彼らと接していると、彼らが鏡となって自分が映し出され、それもエゴ的な自分を見出し、ハッとするときにしばしばあったよ」

一息入れてから、パパはまた言ったのだ。

「その例の一つとして、手づかみでご飯を食べている子の手をつい軽く叩いてしまったことがあったのだ。そのとき、そしてそれから数日間、自分の手をじっと見つめたよ。その子は素直に食べていたのに、こちらの瞬間的な強い思いで手を打ってしまったことに後悔を覚えたね。もうすこし自分を抑え、彼を尊重しながら接しなければならなかったのに」

ママは、肯きながら聴いていたな。

パパの話は続いたのだ。

「その施設には重たい障がいをもつ子供も多く、彼らは自ら語りかけることがすくなくこともあって、問いかけるこちら側の真摯な心が大切となってくるのだ。それはまさに自然との出遭いのなかで、自然からは言葉としての語りかけはないが、こちらから積極的に話しかけ、問いかけると、それなりの返事を得るのに似ているのだと思っただね」

ママは、耳を傾けて聴いていたな。

「そのような体験をして、こんどはダウン症の息子を持ったよね。それはネガティブなことではなく、彼を通して自分や社会を見つめるチャンスでもあるとの考えとなったね。そこから自分の生きる方向性を見つけようと。それには、慣れ親しんだ土浦の地だと、何かと活動がし易いのだ」

ママはパパの話す内容を聴き終えたあと、パパの目を正視しながら言ったのだ。

「あなたの言うことは理解できたわ。あなたがそう望むなら、いいのではないの」

この地にくらか慣れてきたママだったので、パパの願いを素直に受け入れるのは、そう容易ではなかったに違いない。パパは深く感謝したことだろう。

数カ月したら、ボクたち三人は土浦に引っ越すことになったのだ。

## 第四章 幸せなら手をたたこう

浜松から土浦に引っ越したのは、ボクがちょうど一歳になった時だった。

こんどの住いもブリキ屋根の簡易な平屋の借家で、街の外れに建っていたのだ。ここでも汲み取り式のトイレだったので、パパはすぐにプラスチックの簡単な洋式便器を買い、それを取りつけたのだ。もちろん、ママはよろこんだ。

その家から、ボクは筑波大学で開かれていたダウン症のための療育教室に通うことになり、体の動作訓練などを受けるようになったのだ。ボクはゆっくりと少しずつ発達していった。ママは先生と英語で話をし、また大学付近にドイツ人女性が二人住んでいたのだ、その二人の家にボクを背中におんぶして時々訪れたりもしていたのだ。

パパは障がいのある幼児が遊ぶような木のおもちゃを、友人が働いている土浦市内の障がい児施設内で作るようになり、それらを市内のデパートや地域の子供祭りなどで販売することもはじめたのだ。でも、それだけでは生活費が足りなかったのだ、パパは作ったおもちゃをダンボール箱に詰め、近くの幼稚園や保育園に行つて売り込む活動をするようになったのだ。

パパが初めて幼稚園へ売りに行った時、ママと一緒に、ママは園の外でパパが戻ってくるのを待っていたのだ。気弱いところがあるパパは、ママと一緒に心強く感じたに違いない。

最初の頃は園の門をなかなか潜れなかった。パパだったが、生活費を稼ぐにはこれしかないと思つたのだろう、売り廻っていた。二つ、三つ買ってくれると、パパはうれしそうに顔で家に戻ってくるのだ。

おもちゃを作る傍ら、パパは火曜日の午前中の二時間だけ、筑波大学に行つて、宗教哲学の三枝先生のゼミに聴講するようになったのだ。大学院でのこの授業は、とても学ぶものが多く、それを許してくれたママに感謝しながら、パパは机に向かっていた。

ママは生活がいくら厳しくなっても、何一つ辛いとは口に出さないうで、いつも明るく振舞い、それだけでなく、ママは近くにプリマハムという会社の社員たちにドイツ語を教え、その授業料を生活費にまわしていたのだ。パパはそのことにとっても感謝していた。

そのような日々が続く、ボクは三歳になり、新しい年を迎えることになったのだ。と同時に、ボクたちの生活に、新局面が加わつたのだ。

パパがおもちゃ作りの仕事を終えて家の玄関を開けると、ママが、  
「おかえりなさい」

と、いつもの明るい声を出したのだ。

パパは靴を脱いでから、台所に入ってきたのだ。そして、ボクを背負いながら、ちょうど包丁で人参を切っているママとボクにキスをしてから言ったのだ。

「日本の包丁にも大分慣れてきたね」

「そうね。この大きな包丁、なんでも切り易く、いいわね」

そう声を出したあと、ママは言ったのだ。

「今日二つの電話がかかってきたわ。一つは母からで、もう一つはテレビ局からだったわ」  
「テレビ局？」

「ええ、内容をすこし話してくれたのだけれど、わたしにはよくわからなかったわ。でも、明日の朝、もう一度電話をかけるそうよ」

「こんどは済まなそうな声で、ママは言ったのだ。」

日本語がまだよく話せないママは、受話器では相手の姿も見えず、話も聞き取りにくいとパパによく語り、電話に出るのが好きでないとも言っていたな。ボクが産まれてから、ボクを育てるのに精一杯で、日本語を習う時間はママにはなかったのだ。それでも、まわりの人たちと接するうちに、日常会話はどうかできるようにはなったママだったが、十分ではなかったな。

翌朝、パパがいつものように作業所へ行こうとすると、家の電話ベルが鳴ったのだ。パパが受話器を取ると、NHKのテレビ局からの知らせで、パパが開設しているおもちゃライブラリーを取材したいとの申し込みだった。思いも寄らない話だったので、パパは、

「明日、返事をします」

と、答えてから受話器を置いたのだった。

その晩、ボクが寝てから、パパはママに言ったのだ。

「どうしよう、ぼくはマスコミが好きではないのだ。断ろうか」

「でも、あなたが開いているおもちゃライブラリーは、商売でしているわけではないし、障がいのある幼児を持つ親たちが、自然と集まって、できたのでしょう。それとあなたがいつも言っているように、この活動がこだけだけでなく、日本の至るところにできてくればと願っているでしょ」

「そうだが。しかし、どのように放映されるか」

「では、あなたの希望をそのテレビ局の人に話してみたら？」

「そうだな」

パパはしばらく考えてから、ママに言ったのだ。

「よし、承諾しよう。さらによい活動となるように。しかし、もっと忙しくなるかもしれないぞ」

「わたしで、できることはするわ」

ママは、障がいのある幼児用のおもちゃライブラリー活動にとっても協力的だったのだ。

翌日、NHKから電話がかかってきて、パパは自分の希望をのべたあと、承諾したのだった。そのパパは、頭の中でここに至るまでのおもちゃライブラリーの活動を思い起こしたのだ。

「障がいのある幼児は、市販されている一般の玩具ではなかなか遊ぼうとはしない。でも、音のするおもちゃには関心を示し、遊ぼうとし、あそぶもそうだったな。そこで、音のする木のいろいろなおもちゃを作っては、彼に与えたのだ。」

その作ったおもちゃで、家の三畳間は足の踏むところもないほどとなってしまったな。そのことを知った、近所に住む障がいを持つ幼児の親たちが家に来るようになり、おもちゃを借りていくようになったのだ。

そのようなことをしているうちに、おもちゃを借りに来る親子が次第に増えて、家では十分な対応ができなくなってしまう、土浦市内の古い木造アパートの一室を借りて、毎週

の土・日曜日をおもちやの貸出日として無料で提供することをはじめたのだ。

生活費が足りないのに、アパートの一室の家賃を払い、そのようなことをするには勇気がいったな。でも、共通する悩みを持つ親たちとコンタクトを持っていると、お互い共感するのを覚え、どうしてもおもちやライブラリーを開こうと決心したのだ」

さらに、パパは想起していた。

「開設当初は、妻と二人で訪れてくる障がいのある幼児と親に対応していたのだ。そのことが地域の新聞に載り、訪れてくる親子の数がすこしずつ増え、妻との二人だけでは十分に対応ができなくなってしまったな。さいわいなことに、近くの筑波大学で障害教育を専門に学んでいた大学院生数名が、手伝いに来るようになったのだ。

手作りの木のおもちやを貸し出していたので、数を増やさねばならなかったが、これもまたうれしいことに、近くに住む主婦グループの人たちがおもちや作りに参加してくれたのだ。

学生たちも主婦たちも、皆ボランティアだったのだ。私たちはお互いに助け合いながら、おもちやライブラリーの活動をするようになったのだ。息子だけでなく、他の幼児たちがおもちやであそぶ姿によるこびを見つけ、自分はいあわせを感じたのだ。それに新たに作ったいろいろな種類のおもちやを、妻は必ず褒めてくれたな。その声に押され、他の幼児にも薦めることができたのだ」

パパの土浦おもちやライブラリーが放映されたのは約十分ほどだった。多くの人が観る朝の時間帯だったこともあって、大きな反響があったのだ。まして、国際障害者年でもあり、関東地区にはおもちやライブラリーがほとんどなかったので、放映後、毎日数十件の問い合わせの電話が家にかかってきたのだ。それに応じなければならなかったママは、不自由な日本語、それも電話での対応だったので苦労していたな。

おもちやライブラリーに来る家族は、増え続け、県外からも訪れるようになったのだ。また、マスコミなどの取材も多くあったのだ。パパは、この活動が関東地区、さらには全国にまで広がって、障がいのある幼児を持つ家族に、温かい場となるようにと願いながら、ママそれにこの活動に参加していた人たちと一緒に続けていたのだ。

そのようなある日、この活動に、安田火災保険会社が援助金として五十万円を出したのだ。パパはよろこび、それで市販の木のおもちやを購入して数を増やしたり、手づくりのおもちやのカタログを作成したりもしていたな。

しばらくして、ある有名な人がおもちやライブラリーに訪れてきたのだ。

ボクはママの自転車に乗って、街の繁華街に建つ六畳と四畳半の木造つくりの古いアパートの一角にあるおもちやライブラリーへ向かったのだ。

家から五分ほど着き、ドアを開けて中に入ると、いつもとは違う明るさにびっくりしたな。まだ一人歩きができなかったボクは、パパに抱かれて、真っ白いシャツに紺のズボンをはいた人のところに行ったのだ。と、パパがその人に、

「息子です」

と紹介すると、顔にニキビの痕がいくつも残っているその人が、

「こんにちわ」

と言い、澄んだ目でボクを見てニッコリとしたのだ。ボクが、

「アー、アー」

と声を出すと、その人は優しい笑顔でボクを抱いたのだった。温もりを感じた胸と手だったな。傍でカメラが回っている音がしていたな。そのあとボクは、畳の上に敷かれた絨毯の上で、ボクと同じくらい歳の子どもたちと、いつものようにおもちゃで遊びはじめたのだ。

その人は、おもちゃで遊んでいるボクたちを見ながら、パパに言ったのだ。

「このような情景はいいな」

「ええ、おもちゃを媒介にして、親は子供と遊び、会話もできますので。それにここにあるおもちゃは、子供たちの発達を助長するように作られています。ほとんどが手作りです」

パパはそう言ったあと、その人に説明したのだった。

「障がいを持っている幼児たちは、家からなかなか出られないのです。でも、このようなところで、同じ悩みを持つ親がお互いに会話をしたりするなかで励まされたり、不安なども軽減されたりして、親、とくに、お母さん方が元気になります。連帯意識は大切なことです」

パパはさらに続けたのだ。

「ここに来るには、父親が車で運転して、父親も養育の役割を知っていくのです。障がいのある子供を育てるのは、母親だけでは無理です。母親にもストレスが溜まります。それを和らげるためにも、父親そして地域の人たちの協力が必要です。このおもちゃライブラリーは、そのようなことを考慮に入れながら活動しているのです」

その人は、それを聴いたあと、ボクたちが遊んでいる輪に入ってきたのだ。と、照明が一段と明るくなって、カメラの回る音がより高くなったな。

おもちゃライブラリーに、その人は二時間ほどいてから、帰り際、優しい顔でパパとママ、それにボクを見ながら言ったのだ。

「このような活動が全国に広がって行くといいなあ」  
さらに、

「何か書くものはありますか」  
と、訊いたのだ。

ママが、一枚の紙とペンをその人に渡した。と、その人はその紙に、

どの花にも

草にも

どのおもちゃにも

ひとつのいのち

坂本 九

と筆を運ばせたのだ。

それを讀んだパパは、その人が、どのような花にも草にもおもちゃにも、それぞれの命の輝きを見つけているのを知ったのだった。

パパは感動して、

「ありがとうございます」

と、その人の瞳を見ながら言い、手を強く握ったのだった。  
最後に、その人はニッコリしながら言ったのだ。

「わたしの祖母は茨城に住んでいるのですよ。またこのライブラリーに来るよ」  
それからというもの、ママはその人が歌っていた『幸せなら手をたたこう』をしばしば口ずさむようになったな。

## 五章 青い瞳のおばあさん

ボクが四歳半を過ぎた頃だった。ドイツに住んでいたママのお母さんが、ボクたちの家に訪れてきたのだ。

玄関前でパパの運転する車が止まる音を聞いたママは、格子戸をガラガラと開け、ママより背の高い人と頬と頬を合わせ、数秒間抱き合っただけでいなくなった。そして、居間に入ってきたのだ。

ボクが畳の上で、パパの作った木のおもちやを手にして遊んでいると、パパがボクを抱き上げたのだ。ボクの前には、まだ見たこともない顔があったな。と、ママが言ったのだ。

「ここにいる人が、あなたのおばあさんなのよ」

その人は、ボクの手を取って、

「こんにちは、ミヒヤエル」

と言い、青い瞳でボクを見たのだった。ボクはまだ言葉が出てこないでいたので、「アー、アー」と応えたのだった。

おばあさんはボクをしばらく見つめ、ボクの頬に自分の頬を重ねたのだった。そして、ボクはおばあさんの胸に抱かれたのだ。

「柔らかい体だわね」

と、おばあさんと言ったのだ。と、ちょうどその時、家の外からスピーカーを通して、ママがよく歌っていた『こんにちは赤ちゃん』のメロディーが流れはじめたのだ。

「あの音は何なの？」

おばあさんが、ママに訊いたのだ。

「あれは果物や野菜、それに牛乳などを車に積んで売り歩いている人が来たことを知らせるメロディーなのよ。新鮮な食べ物売られ、わたしも時々買ったりしているわ」

日本の生活に慣れてきたママは、そう説明したのだ。おばあさんはコートも脱がずに、ボクを抱きながら、ママの言うことに耳を傾けていたな。

しばらくすると、おばあさんは居間の簡易ソファに腰かけ、コーヒーを飲みながら、飛行機内で起こったことやママの二人の兄家族のことを話し出したのだ。

一時間もすると、おばあさんは欠伸をするようになったな。それを見たパパが、おばあさんに訊いたのだ。

「疲れていませんか」

「ええ、そうですね」

「時差の違いもあるし、すこし休んだほうがいいですよ。お義母さんはいつも昼寝を欠かさずにしていましたし、機内ではそれもできなかったでしょうから」

「それでは、そうさせてもらおうかしら」

パパは、押し入れから蒲団を取り出して畳の上に敷きはじめたのだ。と、おばあさんが低い声で隣にいたママに囁いたのだ。

「寝るといっても、この部屋で横になるの？」

「ええ、そうよ。そこに四枚の襖があるでしょ。それで仕切るから、向こうが寝室となつて、こちらが居間になるのよ」

ママはさらに続けたのだ。

「食事のときは、この居間がこんどはダイニングルームにもなるのよ。そればかりではなく、ここが教室にもなるのよ。今、近くのプリマム会社の社員六名に、ドイツ語を週に一回教えているわ。彼らがここに来て、ドイツ語会話の時間となるのよ」

おばあさんは、ママの話を書きながら聴いていたな。驚いた様子も見せず、ママの言うことに耳を傾けていたおばあさんだった。

そのおばあさんは、一日目と二日目はママと絶えず話をしていたな。

三日目の夕方から、関東地方が台風の影響風雨圏内に入ったが、土浦に近づくにつれてその勢力は少し弱くなり出したのだった。それでも、強い風と雨で、木枠で作られた家の窓がガタガタと音を音を立てて揺れ出し、横なぐりの雨が窓を沫くようになっていったのだ。

台風がさらに接近してくると、窓の隙間から水と風が部屋に漏れ出してきたので、パパは急いでトタン製の雨戸を閉めたのだったが、それでもどこからか水と風が侵入してくるのだった。しかし、おばあさんは心配そうな表情を見せずに、ママと夜が更けるまで話して続けていたな。

翌日、ボクはベビーカーに乗せられ、ママとおばあさんと一緒に、三ヶ月前から通いはじめた地域の幼稚園に向つたのだ。

その聖母幼稚園はイギリスの牧師が運営していて、ママはその人をお願いしてボクの入園となつたのだった。

ボクはやっとひとり歩きができるようにはなっていたが、排便はまだ一人ではできず、保育士たちを何かと悩ませていたのだ。家の中ではドイツ語、外では日本語に日々だったので、ボクの頭の中は混乱していたな。まして、筑波大学の先生がパパとママに、言ったことがあった。

「ダウン症のなかでも重たいほうで、動きが多いですね」と。

ボクは無断で幼稚園の門から出たこともあったのだ。でも、ボクはママの自転車の前座席に乗って、幼稚園へ行き、皆といるのがたのしかったな。また、ママにとつても、お母さん同士でよく話をしてたのしそつた。ボクの誕生日には、園の仲間とお母さんたちを家に呼んだりもしたのだ。

その幼稚園へ、おばあさんは、ボクを送り迎えしてくれたのだった。おばあさんはいつもニコニコしてうれしそうだったな。ママがパパに言ったことがあった。

「母は、親戚の人からリンゴのおばさんと呼ばれていた」と。

笑うと頬が赤くなるおばあさん。ボクの頬が赤いのは、おばあさん似に違いない。パパがそのおばあさんに、

「どこかへ行きましようか」

と訊くと、



「娘と孫と家にいるのが一番よいから」と、静かに答えるおばあさんだった。

日本を発つ前日、これから寒くなるからと言って、おばあさんはママに自分の二枚のセーターを手渡し、ボクには、一カ月の滞在中に編んだ毛糸の靴下をテーブルの上に置いたのだ。

ボクは一日に何回もおばあさんに抱かれていたな。おばあさんの胸は、いつも温かかったのだ。

## 第六章 もう一人のおばあさん

おばあさんがドイツへ戻って、半年した頃だった。リュウマチとパーキンソン病に患って、自分一人では歩けない状態だった、パパのお母さんが土浦に四週間の予定で遊びに来ることになったのだ。

ボクたちはよるこんでおばあさんを迎え、たのしい時を過ごしていたのだ。そのおばあさんが東京の家に戻る一週間前、パパに言ったのだ。

「よかつたら、あなたたちと一緒に暮らしたいのだけれど」

それを聞いたパパは、すぐに返事をしなかったな。というのも、ボクがいるからで、さらにママに負担がかかると思ったからに違いない。

その夜、パパはママにおばあさん願いを伝えると、ママは躊躇もなく、「いいわよ」と返事をしたのだ。そこで、ボクはおばあさんと一緒に暮らすことになったのだ。おじいさんはすでに二年前亡くなっていなかった。

おばあさんがボクたちの住いに遊びに来る前、ママはパパに訊いたのだ。

「あなたのお母さんは、どんな人なの。知りたいわ」

その時、パパはママに語ったのだ。

「母は多くを語らず、大変苦労した人だったよ。わたしの少年時代は、父が不在だったので、母は私たち子供四人を育てるために、朝から夜遅くまで着物の仕立てをしていたのだ。学校から戻ると、母はいつも四畳半の居間兼仕事場で、長い裁縫台を前に座っていたよ。こちらのただいまの声を聞くと、母はすこし顔を上げて、『おかえり』と優しい声で返事をし、手を休めずに着物を縫い続けていたのだ。私たち子供たちが布団に入ってから、隣の四畳半部屋にはずっと明かりが灯っていたね。」

私たちが起きる頃は、隣で寝ていた母の姿はなかったよ。台所のトントンという音でいつも目が覚めたのだ。子供を育てるのが私の生き甲斐と語った母だったね」

パパはさらに続けたのだ。

「高校受験を前にしたことだったよ。勉強が好きでなかったもので、学校はどこでもよいと思い、受験する高校への願書も出さずにいたのだ。それを知った母が『なぜ、願書を出さないの』と四畳半の居間で一緒に炬燵に入っていたわたしに、いつになく真剣な顔で言ったのだ。しばらく黙っていると、こちらを凝視していた母が、急に炬燵から出て、『バカ、バカ、バカ』と声を荒げて、頭を何度もたたかれたよ。隣にいた妹が、『お母さん、

お母さん』と声を出して止めに入っただの。

母にたたかれたのは、初めてだったよ。いつも私たち子供の言うことに、耳を傾け、怒ったことのない母だったからね。驚きのあまり、何もできずに打たれるままでいるしかなかったね。

その母は、兄の友人である慶応大学の学生に頼んで、わたしの成績がなんとか向上するようにと、中学三年から週に一回の割りで家庭教師をつけてくれたのだ。それによって、並だった数学と英語の成績はたしかに向上したね。家庭教師代を出せない家計の中で、それをしてくれたのだよ。

母にたたかれたことは、それ以後、ずっと忘れたことはなかったね。今も骨身にこたえているよ。裁縫を毎日していたせいで、指が変形してリュウマチに悩まされてしまった母だったよ」

「そうだったの」

ママは、パパの語る話に耳を傾けながら聴いていたな。

おばあさんと暮らすことが決まってから、おばあさんのベッドが置けるようなやや広い住宅に引っ越しすることになったのだ。

おばあさんは、自分一人では歩けなかったので、ママはおばあさんを車椅子に乗せ、ボクが幼稚園にいる午前中は、毎日のように外に散歩に出かけていたのだった。

パパは、近くに住む主婦たちが、

「お宅の奥さんえらいですね。感心するわ」

と言ったのを、何度も耳にしたのだ。また、おばあさんを連れて週に一回ほど通う国立霞ヶ浦病院の婦長さんも、

「親孝行のお嫁さんね」

と褒め、それを耳にするたびに、パパはママに感謝していたな。特に、頭を下げていたのは、夏の暑い日には三日に一回の割で、ママが体重三十六キロになってしまった寝たきりのおばあさんを抱きかかえ、一緒にお風呂に入ったことだ。力のあるママだから、できたのだ。ママはおばあさんを親身になって尽くしていたな。

そのおばあさんから、ママは赤飯の作り方や魚の焼き方を、「おかあさん、おかあさん」と言いながら教わったりもしていたな。

パパは仕事から戻ると、先ずベッドで横になっているおばあさんの部屋に行くのだった。そのあと、ボクとパパが部屋に入り、四人で今日何が起こったかを話したり、テレビと一緒に観たりしての日々が続いたのだ。パパは、ママがいつもニコニコしながらおばあさんと接しているのを見るにつけ、深く感謝していたな。

そのおばあさん、身体が日ごとに衰えてしまったのだ。でも、ボクの笑顔を見ると、おばあさんはニコリするのだった。

ボクが土浦養護学校に入学して、一年が過ぎようとした時だったな。夕食を終えたパパが、居間でお茶を飲みながら新聞を読んでいると、ママが寄ってきて、パパにドイツのおばあさんからの手紙を見せたのだ。

そこには、おばあさんの住んでいる五階建ての家の三階が数カ月したら空くと書かれてあって、遠回しにボクたち三人が、そこに住んではどうかと記されてあったのだ。それを

読み終えた。パパは、ママに訊いたのだ。

「お義母さんは、体が弱ってきたのだろうか」

「そんなことないと思うわ。ただ、その手紙に書いてある通り、三階に住んでいる家族が引越しをするそうなの」

いつもとは違う、ママの低い声だったな。

「この手紙を一週間前に受け取ってから、ミヒヤエルのことを考え続けたわ。このままここで教育を受けさせていてよいのかと。そうすると、肯定的な答えがわたしのなかで見つからないの」

ママはゆっくりと自分にも言い聞かせるように言ったのだ。

それを聴いた。パパは驚いたのだった。というのも、今やつとこの土浦の地で生活ができるようになって、これから本格的におもちやの製作活動に取りかかり、障がいのある人たちと一緒に活動し、いまボクが通うようになった養護学校を卒業するまでには、それなりの作業所を開こうと思っていたからだだった。

パパはママの顔をしばらく見つめてから、

「このことはよく考えてから、お互いよく話し合ってから決めよう」と、言ったのだ。

それから数日間、パパはママのことを考え続けていたな。

「よくよく考えた末、彼女は言い出したのだ。今まで不満を何一つ口に出さず、よくやってきた彼女だ。もう限界なのかも知れない。ダウン症候群のなかでも障がいの重いほうに入るあそぶを異国の地で八年間育て、わたしの病身の母を二年間介護し、経済的困窮をしいたげたのだ。それに、筑波大学近くに住むドイツ人夫人から、「あなたはミヒヤエルを連れて、ドイツに戻ったほうがいいのではないの？」と忠告されたこともあったのだ。その時でも、彼女は「ヒデジと共に暮らしていくわ」と応えてくれたのだ」

そのことを、パパは思い出し、そして思ったのだった。

「おばあさんが住んでいる家の三階が空くということは、何かの縁があつてのことかもしれない。あそぶを中心にして動いている私たち家族だ。彼が活動し易いようにしなければならぬ。ここ土浦での本格的な作業所作りはできなくなるが、ドイツにいても何か福祉的な活動はできるだろう。おもちやライブラリーも軌道に乗つつある。自分がいなくても大丈夫だろう。また浜松で、わたしの願いに反対もしないで素直に受け入れてくれた妻でもあるのだ」

パパはそれからママとしばしば語り合った末、チュービンゲンに移り住むことに決めたのだった。そう決心してから出発までの半年間、パパはドイツでの生活がどのようになつていくかの不安はなく、反対に好奇心の旺盛な。パパは、ドイツでのママとボクとの暮らしを、新たな挑戦と捉え出していたのだった。

## 七章 地域の仲間たちと

おばあさんが住んでいる家は、四百年前に建てられた石造りの五階建ての大きな家だっ

た。二階にはおばあさんが一人で住み、ボクたち三人は三階だ。その他にも、二家族がこの家で暮らしているのだ。

家は、旧市街の中央に建つ市庁舎から歩いて一分もしない高台にあって、裏は古いお城なのだ。家の窓からは、街の真ん中を貫通しているネッカー川、そしてそれに沿って立ち並ぶ大きなプラタナスの木々が望め、飽きない眺めなのだ。

旧市街の通りはすべて石畳。人口八万人以上、学生が約二万人いて、大学の街でもあるのだ。

このテュービンゲンの街で暮らすようになって四日目だったな。ボクは市郊外にある養護学校へ通うようになったのだ。

学校から小さなマイクロバスが家まで来て、ボクを送迎することになっていたが、パパの提案で、家から三分ほど歩いたところにある街一番大きな教会広場前で、ボクはそのバスに乗降するようになったのだ。ボクが将来、街の中を一人で歩いて帰ってくるができるようにと、パパとママが望んだからだった。

ボクのクラスには、ボクと同じ体質を持つ子が二人、それとボクと同様に会話がそうできない子が三人いて、先生は日本の養護学校と違って三人なのだ。

ボクがその養護学校に通い出して半年経った頃、パパがママに語ったのだ。「ミヒヤエルのクラスには、年齢が異なる三名の子供がいるよね。学習能力も差があつてバラバラで、彼らはいつも一緒になつて授業を受けてないね。たとえば、読み書きでも、まだその段階に達していない子は下のクラスに参加したり、それに言語治療士が一对一で発音訓練を指導したり、また、とくにできる子は上のクラスにいたりして、その子に合った授業を受けているね。日本でも一人ひとりの子供の学習能力や、生来の素質に応じた学習ができるように、各子供に適した学習内容がつけられているが、日本では主にそれらは集団のなかの活動によつて教育される面が強いが、こちらではそれぞれの子供の能力に応じて個別的に学習が行われる場合が多いね。授業も幅広い多様性のなかで教育されていると思つたよ。一人ひとりの個を尊重した教育なのだろうな」

パパはさらに続けたのだ。

「養護学校の先生も一般の先生のように、週二十八時間労働だね。土・日以外に週一日休みが取れるので、ゆったりと働いているように見えるね」

ママは肯きながら、パパの言うことを聴いていたな。二人とも、ボクが通っている学校に満足しているようだった。

日本にいた時、パパとママは、ボクを地域の幼稚園へ行かせた経験もあつて、ボクがこちらの養護学校に通い出してから、担当の先生に、地域の小学校へボクを週に一、二回通わせたいと希望を伝えていたのだった。

こちらでは、養護学校と地域の学校の先生二人がお互い話し合つて承諾すれば、それは可能だった。そこで二人の先生が話し合った結果、ボクはクラスの仲間一人と一緒に週二回ほど、午前中の授業に二年間通うことになったのだ。

そのことを、パパとママはともよるこんだな。二人とも実現可能は難しいと思つていたらよかつたから。というのも、ボクが住んでいる州ではインテグレーションはまったく行われていなかったからだだった。でも、ママとパパの熱意が、養護学校と地域小学校の二人の先生に伝わつたのだ。

だ。パパとママがこの地域小学校の父兄会に招かれた時、パパが集まった親たちに語ったのだ。

「障がいがあるなしに拘わらず、子供同士がお互いに遊び学ぶことは現在だけでなく、将来も意義があることですし、それがこの州の学校当局に、今後どのような判断を下していくのかわかりませんが、是非インテグレーションを進めてほしいのです。ただ残念なのは、週二日の午前中だけで、果たして真の交流ができるでしょうか。先生方も中途半端でやりづらいのではないのでしょうか。二年間で終えるのはさびしいことですが、その期間、息子は地域に住む子供たちと知り合いになり、今後いろいろな面でお互い関係を持てることに、親としてはうれしいのです。通りで息子に会ったら、声をかけてください」

パパは大勢の人の前で、ドイツで語るのを苦手としていたが、ボクのことになると勇気が出るのだ。そのあと、ママも同じようなことを言ったのだった。

この地域小学校で、ある時のことだった。ボクは、パパとママが作ったませご飯を、皆と一緒に食べていたのだ。ボクが箸でご飯をすくっていると、まわりの仲間も真似して箸を使おうと試みたが、難しいのか、皆フォークで食べ出したのだ。と、ボクも皆と同じようにフォークを持って食べ出したのだった。ボクも自分から皆に合わせようとして、インテグレーションをしたのだった。

地域小学校に週二回通っていた頃、ママとパパは街の図書館で「布の絵本」展を開いたことがあったのだ。ボクが日本にいた時、パパは布の絵本を作っている横浜の布のグループとコンタクトがあり、そのグループの人たちがボクに三十種類以上の布の絵本を送ってくれたことがあったのだ。その絵本を、ママは街の子供たちにも見せようとし、またママが日本にいた時に集めた二百冊以上の絵本も一緒に展示したのだった。

二ヶ月間展示して、街に住む多くの子供たちとその親たちが見学に訪れていたな。ボクが地域小学校で知り合った子供たちも来てくれて、一緒になって布の絵本で遊んだのだ。この国には、布の絵本はなく、皆驚きの目を向けていたな。絵本に書かれてあった日本語は、ママがドイツ語に訳してあったので、わかり易かった。

このような機会を通して、ボクは学校での時間だけではなく、それ以外でも近所の子供たちと知り合いになっていったのだ。ボクはこのようにして、この街の住民となったのだ。

この布の絵本展はとても好評で、近くの街々や養護学校からも展示の要望があったりして、貸すことにもなったのだ。ボクは日本のお母さんたちが作った、この布の絵本に誇りを感じたのだった。これも、インテグレーションの一つなのだ。

それに、ボクが住んでいる街では、夏休みの期間、六歳から十五歳までの子供たち四百名が、前期と後期の三週間、毎朝八時半から夕方六時半まで、一グループ二十名前後で近くの森の中で泥んこになって遊ぶプログラムがあるのだ。ボクも、もちろんそれに参加していた。

そのようなこともあって、近くに住んでいる彼らと通りで会々と、挨拶をするようにもなったのだ。これが、ボクにはとてもうれしかったな。ボクもここで暮らしているのだから。また、知り合った彼らも、そして親たちもボクの家に来て、一緒に食事をするようにもなったのだった。

このようなことをしていると、今まで週二日通っていた地域小学校の通学が、ボクの担任の先生と小学校のクラス担任の先生が再び話し合い、二年間だけではなく、さらに一年

間延長になったのだ。パパもママも、そしてボクもよろこんだな。このインテグレーションは学校だけでなく、街の行政も動き出したのだ。

街に住むボクたち仲間五十名と、市長及び数名の市議員との話し合いがもたれたのだ。ボクはパパとママに連れられて、マルクト広場前に建つ、十五世紀に造られた大きな市庁舎内の大会議室で催された『市長と知的障がい者との話し合い』に参加したのだ。

いつもは議員たちが座る席に、ボクたちは腰かけ、自分たちの希望をのべはじめたのだ。ボクたち仲間の一人が立ち上がり、前もってノートに書いた文をゆつくりと読み出したのだ。

「街の真ん中に、障がいのある人もない人も常に出会えるようなカフェー店を設けてほしい。街がその店の家賃を、そして残りの費用は私たちが払い、その店を運営したい」

それを聴いた福祉事務所の所長が言ったのだ。

「そのようなカフェー店は隣の街にもあって、多くの出会いの場ともなっているし、テュービンゲンでもそれを実現するようにします」

それに続いて、ボクよりも十歳ぐらい上の女性が、自分のマイクの前でたどたどしいが、はっきりとした声で読み上げたのだ。

「わたしには友人が一人もいません。たまには街へ出て、レストランに行きたい。テレビばかりでは退屈です。両親は年をとってきているので、一緒に街へは行かれません。時々兄とは散歩しますが。そうすると、道行く人は、わたしをじっと見つめます。歩き方がおかしいから。まわりの人におかしな者とみられたりするぐらいなら、わたしは家にいたほうがいいのかも。それでも、自分は街へ出たいのです。そのようなわたしに、誰か付き添ってくれる人がいるとうれしいのです。そのような人が出てくるのを待っているのです。市長は、障がい者も正常な人であると、すべての人に言ってほしいのです」

市長が立ち上がったのだ。

「街にはいろいろな人が住んでいます。もしそうでなかったら、街は退屈になってしまいます。私たちここにいる人は、街に所属しています。私が正常で、皆さんが正常でないと誰が言えますか。私が正常でないと伝えるかもしれないけれど」

こんどは、二十歳前後の若い女性がしゃべったのだ。

「わたしは今、付き合っている彼と結婚したいの。この市庁舎の戸籍室で結婚できますか。もし結婚したら、誰も私たちを離すことはできないわ」

市長が答えたのだ。

「結婚するには、経済的なことも考えねばならないでしょう。経済的なことを考えた上で必要な書類を揃え、戸籍係に提出してみたらどうですか」

次にボクよりも二十歳以上も年上の人が話したのだ。

「ボクは夕方、そして週末にも友人の家に訪れたいが、市内以外の区域では、その時間帯にはバスが走ってないので困る。各路線バスは色分けをしてわかり易くしてほしい。また、時刻表は文字が小さすぎる」

それにたいして、一人の議員が応えたのだった。

「昨年、障がい者センター前にもバス停を設けました。確かに時刻表の文字は小さく、読みづらいですね。もうすこし大きくするように働きかけてみます」

次にある人が言ったのだ。

「ボクが働いている作業所には一般のバスが止まる停留所がないので、作ってほしい。お願いします」

議員と市長は、その要望を手帳に書いていたな。

しばらくすると、ボクが街の中でよく見かける、車イスにのった人が語ったのだ。

「僕は市議会のなかで働きたい。そして、街がつくる規則、とくにバス運行についての協力がしたい。僕はどこに何が欠けているかを知っているから。しかし、僕は字を読むことができない。それでも協力可能ですか。それから市議会のなかで、障がい者を代表している議員はいますか」

一人の議員が答えたのだ。

「議会では多くの書類があつて、字が読めないと議会のなかで働くことは難しいかもしれない。ただ、皆さんが市議員に電話して、皆さんの要望を伝えれば、その人がこの議会のなかで話をするでしょう。障がい者代表している議員はいません」

次に二人が同時に立ち上がり、そのうちの付き添いである人が紙に書いた文を読み上げたのだ。

「街の真ん中に、少数数制のグループホームがあるとうれしい。そうすれば、バスでも電車でも容易に乗れるし、スーパーマーケットやパン屋、郵便局に一人でも行けるし、自立できるのだから。また街の通りも車椅子で容易に動けるように、そして道路標識などははっきりとしたシンボリックなものにしてほしい。それと、障がい者が働く作業所では賃金が一万円位で、労働組合もなく、ストライキの権利もないので、一般労働者と同様に扱われない。そして、公共的な職場を、より多くの障がい者に与えてほしい」

その他にボクたちの仲間は、より経済的な援助を要望したのだった。

二時間の話し合いの最後に、市長がのべたのだ。

「皆さんに何かの問題が生じたら、誰かが皆さんのところへ行き、そして皆さんの願いを聞き入れるまで待っていてはいけません。新聞などの市民の声欄に、皆さんの要望を訴えるようにしてください」

市長も議員もボクたちの言うことに耳を傾け、とても良い対話時間となったのだ。翌日の新聞に、この話し合いの記事が載り、多くの人が読んだに違いない。

ボクのパパとママは、「ボクたちの生活が、できる限り通常の生活条件に近いかたちのなかで行われる」というノーマリゼーションの考えに、とても熱心なのだ。

ボクたちが誇りと自信を持って、地域の中で暮らしているように見守っているのだ。ボクたちも、一人ひとりが、その人に合った中で頑張って生きていかねば。パパとママはボクたち一人ひとり、その人の命が光り輝くような社会であるように願っているのだ。

ボクらは黙ってはいけけないのだ。主張しなければ、地域の中でたのしく暮らすためにも。ボクも皆の発言から、勇気をもらったな。ボクは皆の前で何も言わなかったが、毎日の中で自分自身を出しているのだ。

この街に移り住んで数年すると、ボクは学校のない日は、一人で家から百五十メートル先のパン屋に行き、焼きたてのあたたかいパンを十個買ってくるのだ。でも、こうなるまでは、パパとママが二年近く、ボクの傍について、ボクが一人で行けるように訓練してくれたからだ。

買ってきたパンをママに渡すと、ママは、「ごころうさん」といつも笑顔を浮かべて言

うのだ。そうすると、ボクも笑顔になるのだった。そして、パパとママそれに一緒に住んでいるおばあさんとの朝食になるのだ。おばあさんはいつも言うのだった。

「ミヒヤエルが買ってきたパンは、いつもおいしい」と。

パパとママは、将来はボクが家から歩いて一分もしないマルクト広場で開かれている朝市で、一人で買い物できるように望んでいるが、ボクは先のことはよくわからない。ボクは、今の自分があるがままにして動いているので、未来のことは頭の中にまったくないのだ。

その他にも学校のある日は、四時に家に戻ってくるので、パパと買物に出かけるのだ。パパが、

「今日はマーボー豆腐にするよ」

と言うと、ボクとパパは自然食料店に行き、ボクが豆腐を見つけ、それをレジに持っていくのだ。お金の勘定はできないボクなので、パパが支払い、つり銭をボクがもらい、パパに渡すのだ。

そして、次はいつも行く肉屋で豚挽き肉を買うのだ。ボクはこの店の馴染み客となっているので、おばさんが必ずハム一枚をくれるのだ。これがまた美味しいのだ。

それから、マルクと広場に面した小さなスーパーでいくつか必要なものを買ひ、レジでパパがお金を払っている間、ボクはレジ係の人からいつももらうアメを手にして、外に出るのだ。でも、ボクはアメやチョコレートはあまり好きでないの、パパがそれを口に入れるのだった。パパは甘いものが好きで、歯が痛くなると近くの歯医者のところによく行くが、ボクは年二回の歯の検診でいつも虫歯がなく、褒められるのだ。寝る前に、パパが歯磨きの指導をよくしてくれたからだろう。自分の歯の痛みを、ボクにさせたくないに違いない。

そのあと、マルクト広場でいつもお店を出している八百屋へ行き、パパがネギや果物を買っている間、ボクは近くで奏でているストリートミュージシャンの音にあわせて、体を動かしたりするのだ。まわりの人は、音に合わせて踊るボクの姿を見て、ニッコリとする人も多いな。特に、女の人が微笑んでくれるのだ。ボクは自分を出しているだけなのに。

パパとボクは、時々テュービンゲン駅から出る電車に乗り、隣の駅まで二人で買物に行くことがあるのだ。ボクは障がい者手帳を持っているので、ボクとボクに付き添う人はドイツ国内の乗物なら、どこに行こうと無料なのだ。

車内に車掌が来ると、ボクは自分の手帳を見せるのだ。車掌はもうボクのことを知っているの、検札をしないことも再三あったのだ。その時は、車掌のあとを追って、自分の手帳を見せるのだ。

パパは電車に乗っているのが好きで、黙ってよく外を眺めているな。その時は、ボクも外を見ているが、時々退屈になるので、パパの足を蹴ったりして、

「話しをしてくれ、遊んでくれ」

と、意思表示をするのだ。そうすると、パパはボクに話しかけてくれるのだった。

街の郊外にある大きなスーパーマーケットへ車で、パパとママと一緒に買物をする時もあるのだ。ボクは車の中で流れてくる歌のカセットテープを聞くのが好きで、この時も自然と体が動いたりするな。

マーケット内の、どこに何が置いてあるのかを少し知っているボクなので、パパとマ



マがボクに買いたい品を言うと、一人でそれを見つけて持ってくることもできるようなものになったのだ。でも、時々迷子になって、パパとママを困らせたことも何回かあったな。そのうち、ボクのことはこのスーパー内ではよく知られていくようになり、パパとママは安心して買物ができるようにもなったのだった。

ボクは特有な顔をしているし、パパは髪の毛をうしろで結んでいて、この街でも近くの街でも、「何か変わった父と子」と見られているようだが、パパはそんなことにお構いなく、ボクと一緒に買物をするのだ。パパは、ボクと一緒にいる時が幸せそうで、それはボクも同じなのだ。

## 八章 三世代一緒の日々

ボクたちが日本からここテュービンゲンに移り住んでの最初の二ヶ月間、パパとママはボクの学校や引越の手続きに時間を費やしていたのだった。その後、二人は生計をどのようにしていくかをよく話し合い、その結果、ママが外に仕事に出て、パパは主夫（ハウスマン）となったのだ。

ママの仕事は、テュービンゲン駅構内で助けを必要としている高齢者や障がいのある人たちに手を貸したり、時にはカバンを持ってあげたりすることが勤務なのだ。その他にも、ホームレスの人やお腹を空かしている人に、駅内にあるミツション室でスープやコーヒーなどを出したりするのだ。とにかく、駅構内にいる困った人たちを援助、世話するのがママの務めなのだ。

この駅ミツションは教会組織が運営していて、ママは常に生き生きと働いているのだ。少女の頃、修道院の尼さんに憧れたママだったので、人の助けを自ら進んでやるこの仕事に、よろこびを感じていたに違いない。

パパは家の中で、家事とボクの世話をするようになったのだ。でも、パパは時間を見つけては、ドイツの福祉に関するミニ情報誌を日本の友人や知人たちに、定期的に送る活動をするようになっていったのだ。また、日本から福祉関係の人たちが来ると、こちらの障がい者施設や高齢者ホームを案内するようになったのだ。

パパは、主夫をやり出して最初の頃、それに意義を見出していなかったが、そのうち一緒に住むおばあさんとの三世代家族のあり方を体験していくうちに、ハウスマンの存在に意味を持ち出したのだった。

パパは毎日の料理や洗濯や子育てをしながら、ゴミや食べ物や健康などの問題点を知り、ハウスマンの活動は、人間が生きていくうえで最も基本的でかつ重要なのに気づいたに違いない。そして、それが社会及び地域と結びついているのを発見もしたのである。そのようなことで、パパはハウスマンの活動を一層深めようとしていたのだった。

人を妬んだり、人と競争したり、人と比較したりすることが嫌いなパパだ。家族一人ひとりが穏やかに共に暮らそうとする役目を担うハウスマンの活動に、よろこびを見出していたのだった。

そのようなパパが、定期的に発行している『テュービンゲン便り』が地元の新聞に、「日

本人の目で見た、「ドイツの日常生活」という見出しの記事が載ったことがあったのだ。ボクは字が読めないが、新聞に写ったパの顔は見たな。

横井秀治氏は、日本に住む友人や知人にテュービンゲン便りなるものを発行している。それは、おそらくテュービンゲン市の定期刊行物のなかで最も小さなものだろう。

日本の読者は、A4版で十ページ前後に書かれた、その便りの何に魅せられているのだろうか。それは編集者であり、唯一の著者でもある横井氏がテュービンゲン市に住み、彼の目に留まったこと、それが伝える価値があると思われることを分析しながら書いているからだろう。また彼は手紙の交換などによって、独自の方法で自分の考えをのべ伝えている。

横井氏は東京の大学を卒業して、日本の知的障がいのある人たちが住む施設でしばらく働いていた。しかし、ドイツではその仕事に従事していない。それというのも、夫妻には障がいの重い息子がいて、その子の介護をしているからである。彼はハウスマンとなり、夫人は駅ミツショナーとしてテュービンゲン駅で働いている。

彼は絶えず自己を省みながら、便りを書いている。たとえば、ハウスマンは退屈かとの題の中で、「家のなかの仕事は、家族との社会的関係のなかで行われ、それが家族によって認められ、相手のパートナーからも支援されれば、ハウスマンの仕事は変化もあるし、よろこびもある」と綴っている。事実、横井氏は彼の人間的、感性的な経験を通じて、様々な盛りたくさんのテーマを扱っている。そして、それらが毎日の生活の中で、他の人と結ばれながら暮らしているのを証している。

大きな謙譲的表現で書かれた彼の文は、非凡な率直さ（開放性）と社会的関心とを含んだ内容とも言えるだろう。たとえば、街での息子と一緒の買い物や、その子が迷子になった出来事、そして息子が自立を目指して近くのパン屋へ行く話など。それにホームレスの人との路上での数回にもおよび会話や、難民のスリランカ人への滞在許可の心配など。それらすべてが生活の場を通して、一つの小宇宙を創り出している。それを愛情溢れるタッチで記述しているのである。

便りの記事のいくつかは、テュービンゲン大学のオットー・プッツ氏によって翻訳されて一九八頁の冊子にまとめられた。それというのも、横井氏と一緒に住んでいる義母が、その便りを読むことができるようにと彼が願ったからだ。その義母は、その冊子の中で寛容と精神に目覚めた豊かな生活体験者として登場する。

横井氏は、意識して主観的に捉えてものを書きたいと語る。しかし、同時に彼の文は部分的には入念な調査をした上で書いている。たとえば、ドイツの学校制度と日本の学校制度との比較や、教会の役割と教会からの脱会などを、日本の読者に数字と事実でより真実味をもたらしている。

彼の便りを読む人たちは、社会福祉の仕事に携わっている人たちが多く、ドイツの社会福祉問題に関心をもっている。そのようなこともあって、彼は介護保険についてもいろいろ調べたり、また高齢者ホームで一泊したりして、その体験談も載せている。

横井氏は青年になった息子をできるだけ、普通の生活ができるようにと願い、二人

でしばしば電車などに乗っての買い物や遠足などもしている。髪の毛をうしろで結んだ日本人の父親とその息子は、一般的なカップルには見えないし、テュービンゲン市及びその周辺の街ではよく知られている。

横井氏は年のわりには若い姿勢を保ち、仕事と生活の意味について、彼の活動的で予測もつかない把握力を通じて、多くの人とコンタクトを持っている。

横井氏の社会的な生活は、他から絶えず学ぶことにあるようだ。彼の目立たぬ地味な日常生活から、感嘆に値するような発見をする。そして、そこから小さなよるこびを得て、想像さえもしないようなエネルギーを導き出す。それらは、彼の書いた文章からうかがえる。

彼は、自分の生活態度は恐らく仏教から強い影響を受け、最近ではキリスト教からも多くを教えられていると語った。

この記事が新聞に載ったあと、パパは街の通りで会う人たちから、「あの記事の内容はよかったわ」と言われたとママに伝えていたな。

パパはハウスマンに自信を持ってきたようだった。ボクはそのようなパパがいつも傍にいたので、うれしいのだ。

パパとママの他に、ボクはおばあさんとも暮らしていたのだ。そのおばあさん、ボクにとっては恋人なのだ。

学校から家に戻ると、先ずおばあさんの部屋に行き、ボクのために用意したジャム入りのパンを食べるので。これがとても美味しく、おばあさんとテーブルを囲みながら時を過ごすのだ。

このおばあさん、ボクが小さい頃、ボクに会うためにドイツから日本へ来たことがあったが、当時のことをまったく覚えていないな。でも、ボクはすぐにおばあさんと仲良かったのだ。

おばあさんには、ママの他にもう一人娘がいて、その人はボクの伯母さんにあたり、車椅子で移動をしていたと、ママがパパに話していたことを聞いたことがあった。ママが言うには、「お母さんはよくお姉さんを介護していたわ」と。伯母さんはボクが生まれる三年前に亡くなってしまったのだ。

そのような経験があったからかな、おばあさんはボクをすぐに受け入れてくれて、ボクとゲームをしたり、ボールを投げたりして遊んでくれるのだ。ボクと遊ぶには、かなり忍耐が必要なのだが、おばあさんは決して怒ったりはせずに、常にニコニコしてボクに接してくれるのだ。ボクはおばあさんの顔を見ると、いつもホッとするのだった。

三十七年間、体に支障を持った娘を育て、こんどは孫のボクと暮らしているおばあさん。ボクと同様な人たちと常に暮らすには、我慢と寛容が必要だと思うのだ。ボクはこのおばあさんが大好きなのだ。

ママが仕事場へ、ボクは学校へ、その間、昼食はハウスマンのパパが作るものになっていくのだ。昼食に限らず、夕食も大体パパが作っているが、おばあさんはお皿に盛ったものは必ずきれいに食べ、今まで慣れ親しんできたドイツ料理の味ではなく、パパの醤油味となるが、すべてを食べるおばあさんなのだ。ボクは、今までおばあさんがお皿に残したのを見たことがないのだ。

夕食したあとは、おばあさんはいつもボクたちと一緒にテレビを観たり、ゲームをしたりして過ごすのだ。それも終わり、階下の自分の部屋へ戻る時は、必ずパパに、

「ありがとう、ヒデジ」

と言いつ、ボクにも笑顔で、

「よく眠りなさい。また、明日ね」

と、優しい声で言うのだった。

おばあさんの父、それにボクのおじいさんにあたる人も牧師だった。その職は忙しく、家には常にお手伝いさんがいたようで、おばあさんは料理をしなかったようだ。そのようなことで、ボクはおばあさんの料理をあまり口にしたことがないのだ。

そのおばあさんは、自分の衣類は自分の手で洗い、ボクたちの洗濯物を中庭に干してくれるのだ。そればかりでなく、パパのワイシャツやボクのズボンなども、アイロンをかけてくれるのだった。そのきれいに仕上がった服を着ると、いつも心までもがあたりかくなるのだ。

そのおばあさんに、心配をかけさせてしまうこともあるのだ。それは、ボクが街の中で時々迷子になることだった。警察のお世話になったことも二回あった。衝動的にボクの体は動き、ママやパパから離れてしまうのだ。そして、バスに一人で乗ったこともあった。

ある時、ボクは迷子となって八時間以上もおばあさんやパパやママに心配をかけてしまったことがあったのだ。

警察署にいるボクを、パパとママが迎えにきてくれて、そのあと家に戻ったのだ。

家に帰ったボクは、おばあさんの姿を見るや、大きな声を出して、

「おばあさん、おばあさん」

と、駆け寄ったのだ。と、おばあさんはボクを抱きながら、

「どこにいたの？」

と、優しい声で言ったのだ。ボクはおばあさんの胸に顔をあて続けたのだ。少しすると、おばあさんがママとパパとボクの顔を見て、

「みんな、お腹が空いたでしょう。今日は、わたしが夕食の支度をしましたよ」

と言いつ、キッチンへ行ったのだ。居間のテーブルには、おばあさんが用意したお皿がすでに並んであったな。

ジャガイモスープの鍋を持って、おばあさんが居間に入ってきたのを見た時、ボクは今までのことはすっかり忘れてしまい、笑顔となったのだ。

湯気が昇っているスープとパンを前にしての夕食となったのだ。

ママがスープを飲みながらボクたちに、

「ミヒヤエルが買ってきた今日のパンは、何か特別な味がするわね」

と言いつ、パパが、

「苦かったり、甘かったり、複雑な味だね」

と、応えたのだ。おばあさんはスープを飲んでるボクを見ながら、

「これを食べたなら、明日はまた新たな一日のはじまりとなりますね」

と、言ったのだ。ボクたち三人は、「美味しい、おいしい」と声を出しながらスープを飲んだのだ。おばあさんは、微笑んでいたな。

ボクはおばあさんといつ、いつも心がウキウキしてたのしくなってくるのだ。クリス

マスの時もそうだ。イブの夕食はこの地方の習慣に従って、ボクたち四人はジャガイモのサラダとソーセージで簡単に済ませてから、ボクとパパが飾りつけをした高さ二メートル近くの縦の木に立っている七本のローソクに、火を灯したのだ。

それを見ると、ボクはもう何をするかを知っているの、賛美歌集を本棚から取り出してパパに渡し、皆で歌を唄うのだった。パパは音痴なので、ママの声に併せ、ボクは口を開け、「アーアー」と声を出すのだ。おばあさんの声はママに似てきれいで、その歌声がローソクの炎を揺らすのだ。ボクの横に座っているおばあさんの顔を見ると、いつもよりもほっぺが赤く、いかにもうれしそうな顔なのだ。と、ボクの心はウキウキとなって、たのしくなってくるのだった。

また、ボクのおばあさんは優しいのだ。おばあさんと昼食を摂っていると、開けっ放しにしていた窓から蜂がボクのリンゴジュースのコップに入り、コップから出られずにいたことがあったのだ。ボクがおびえた目でそれを見てみると、おばあさんはその蜂を自分の両手で包み、窓から放したのだ。パパが、

「刺されませんか」

と訊くと、

「今まで刺されたことはありませんよ」

と、おばあさんは笑顔で答えたのだった。優しいボクのおばあさんなのだ。

そのおばあさんの前でボクの育て方で、パパとママが口けんかしたことがあったな。パパもママも思っていることは、口に出して言うほうだから、結構激しくなったのだ。ボクは争いごとを見るのが一番嫌いなのだ。まして、ボクの前でパパとママがけんかするのは最も嫌なのだ。その時、おばあさんがやわらかい言葉を二人にかけて静まり、ボクはホッとしたのだ。なにしろ、ボクは感受性が強いほうなので、パパとママの気持ちを汲んだりすると、頭の中が混乱してしまうのだ。と、不安になって、心が意固地となってしまったのだ。ボクは言葉で表現できないのだ。そのようなボクの傍に、おばあさんがいて、うれしいのだ。

パパとママとボクは、おばあさんと一緒に過ごす日が多いな。でも、そうでない日もあるのだ。それは毎年夏休みとなると、スイスやチロルの山々へ行き、歩く時なのだ。

## 九章 夏のチロル

ママが、コップに入ったリンゴジュースをパパに手渡ししながら、

「テュービンゲンを発つて、もう五時間も走っているわね。あとどのくらいで着くの？」

と訊くと、パパは車のハンドルを握りながら、

「一時間半はかかるだろう」

と答えてから、そのジュースをおいしそうに一気に飲んだ。そのあと、ボクもママからジュースをもらい、それを手にしながら車の窓から山々を眺め続けていた。

少しすると、ママが体を半ひねりしながら、

「あれはウサギのようね。その隣はウシのようね」

と、山の頂上付近に残っている白い雪をボクに指差したのだ。

車が高速道路から出るや、土道に変わり、まわりは緑の草原となっていた。

しばらくすると、ママが、

「赤や白や黄色の花々が見せはじめたわね」

と、声を出した。そのママに、パパが、

「今年は、いつもよりも早い山歩きとなったね。この六月下旬は山が開くときで、一斉に花が咲きはじめるよ」

と言うと、ママが、

「そうね。今年の山登りは、わたしの希望が叶ってうれしいわ。以前から、高山植物の花が咲き乱れる時期に、山に入りたかったから。胸がワクワクしているわ」

と応え、ニッコリと肯いたのだった。

ボクたちの車は、標高九九四メートルの南チロルのザイス村に到着。早速三人で村の観光案内所へ行き、これから九日間宿泊する休暇用貸住宅を探すことになった。

その貸住宅は、村外れの森の入口に建っていた。ママが玄関のベルを押すと、頬が赤くなっておばさんが出てきた。

ママは、そのおばさんから住宅内を見せてもらったあと、

「住居内は広いわね。三つの部屋とキッチン付きで一人千六百元は安いわ。それに、見晴らしのよいバルコニーがついているわね」

と、パパに言った。そこで、ここに滞在することになったのだ。

翌朝、ボクは小鳥たちの鳴く声で、目が覚めたのだ。「ピーピー、キューロキューロ、カッコーカッコー、ヒューヒヒューヒ」といろいろだ。明るい音色に、耳を傾け続けているのだ。

しばらくして、ボクがバルコニーに出ると、パパとママもバルコニーに立っているのが見えた。ママがパパに言ったのだ。

「鳥たちの声がにぎやかね」

「さつきから聞いているのだけど、鳥たちの大合唱だな。森のなかとはいえ、こんなにも鳴き交わしているのを今まで耳にしたことがないよ」

パパはそう応え、前に立ち並ぶ大きな木々を眺めていたな。そして、ボクを見たので、ボクは肯いたのだ。

少しすると、ママが、

「あら、カッコー鳥の呼ぶ声だわ」

と、声を出した。ボクたち三人は、パジャマ姿のまま、小鳥たちの声に耳を傾け続けていたのだった。と、ママが、

「まるで小鳥たちのコンサートだわ」  
言ったのだ。

朝食を済ませてから、パパは昼食用のおにぎりを作りはじめた。ボクがそれを見ていると、パパが小さいおにぎり一つをボクにくれたのだ。その間、ママは朝食の片づけをしていた。

ボクたち三人は山登りの準備を終え、車に乗り、これからヨーロッパの中で一番広いとされている緑の高原地ザイサーアルム（標高一八〇〇メートル）へ向かったのだ。

車の中で、助手席に座っているママがパパに、

「どのような花が咲いているのかしら。天気は良いし、歩くのがたのしみだわ。あなたも花の名前をいくらか覚えたでしょ？」

と訊くと、パパは運転しながら、

「十年以上も毎年アルプスに来て、きみから教わっているので、だいぶ覚えたよ」と、答えたのだった。

薄暗い針葉樹の森の中をゆっくりと走っていると、急に目の前が明るくなり出し、それにつれて、草の匂いが漂いはじめてきたのだ。と、パパが、

「車は、これから先は入れない」と、言ったのだ。

ボクたち三人は車から降りて、小さなリュックサックをそれぞれ背負い、歩き出したのだ。しばらくすると、ママが声を出した。

「今までうつすらと立ち込めていた朝霧が晴れて、青空が見え出してきたわね。山の新鮮な大気が体中に流れ込んで、爽涼な気分だわ」

さらに行くくと、辺り一面は緑の大草原になったのだ。と、ママが、

「なだらかな優美な曲線の道が、数キロ先まで続いているわね。その背後には、高い山々が聳えているわね」

と言うと、パパがママに説明したのだ。

「あれら三千メートルの怪奇な大きな岩峰群には、ドロミテ特有のマグネシウムが含まれているのだ。どの峰々も、天を突くように連なっているだろ」

少しして、ボクの前を歩いていたママが、足元に咲いている色とりどりの花たちを見ながら、

「あ、これはアネモス、トリカブト、キンバイソウ、アザミ……」

と、声を上げ続けていたな。パパは遠くに見える岩峰を眺め続けながら歩いていた。

少しすると、ママが小さな花を指差しながらパパに、

「あなた、見てよ。息を飲むほどの鮮やかな青紫色したエンチアンだわ」

と言うと、パパはその花をじっと魅入っていたな。

ママがまわりの花々を目にしながら、また声を上げたのだ。

「高山植物が競い合うように咲き乱れているわ。あたり一面が花々で膨れ上がっているわね。花に優しく迎えられたような気分になるわ」

柔らかい土道を踏み続けていると、ボクの山靴が沈み込んでいき、体が浮くようになってくるのだった。どこからか、牛のカウベルの音色が風に乗って、耳に入ってくるのだ。ママが言ったのだ。

「見渡すかぎりの大草原だわね。緑と花と岩とが視界を独占していて、まるで絵本のなかに出てくる光景だわ。壮大だわ」

ボクは、道行く人とすれ違うたびに、「モルゲン(おはよう)」と声をかけていたな。と、相手からはボンジョルノ、グッドモーニングなどの言葉が返ってくるのだった。ボクは笑顔を浮かべながら、歩き続けていたのだ。

夕方の五時近くに宿に戻ると、疲れが出て、ボクたち三人は棒のようになった足をソファーに伸ばしたのだ。と、外で鳴いている小鳥たちの声が聞こえ、彼らと一緒に歌ってい

るような気持ちになってくるのだった。

しばらくしてから、ボクとパパはバルコニーに出て、長椅子に体を横たえたのだ。と、パパが、

「沈みかけた朱色の陽が、松の樹間からキラッキラツと射し込んできていいな。ああ、すべてがここにある。わたしのすべてがここに、解放そのものだ」

と、呟くようにして言ったのだ。

パパは若い頃、山小屋の主人となりたかったとママに話したことを、ママから聞いたことがあった。パパとママの新婚旅行は山登りだともママは話してくれたな。

ボクとパパは、目の前で輝くように咲いている赤や黄色の花を、見るではなしに眺めていたのだ。と、ウトウトとなつてしまったな。

ママは、広々としたこの草原が気に入り、ボクたち三人は三日間、澄み切った青空の下、同じようなところを毎日十キロほど歩き回っていたのだ。

そのあとの二日間は雷のともなう雨だったので、ボクたちは部屋の中でゲームをしたり、外に買物に出かけたりして過ごしていた。時々雷が鳴り響くと、ボクはパパの傍に行くのだ。そうすると、パパが言うのだった。

「明日は、晴れるぞ。きつと晴れる。そうしたら、また山歩きだ」と。

翌日、降り続いた雨が止んで、ボクたちが期待していたような青空となつたのだ。ボクたちは車に乗り、しばらく走っていると、高い山々が目の前に見え出してきた。

ママがパパに言ったのだ。

「あのローゼンガルテンを歩くのね。薄ねずみ色をしたいくつもの険しい岩峰が、角を立てたように天に向かって聳え立っているわね。数日前に目にしたお花畑の山域とは、まったく違う景観ね」

「これからが、本格的な山登りだ」

パパがそう言ったあと、ボクたちは車から降り、二人乗りのリフトに揺られて標高二三〇メートルまで行き、岩場の狭い道を南へ向かって登り出したのだ。

少しすると、ママが、

「周囲には樹木はなく、岩だらけね。岩場の間には、薄黒くなつた雪がこびりついているわ」

と言い、手に息を吹きかけていた。そのママに、パパが、

「朝日は反対側の岩壁を照射しているので、こちらは日陰だ。吐く息は白く、立ち止まると、ヤッケを着けていても身震いするほどの寒さだな。このようなときは、歩き続けることがいちばんだ」

と、言ったのだ。

しばらくすると、ボクの体は少しずつ暖かくなり出したのだ。ママが足もとに目を落としながら、パパに言った。

「ピンク色の小さなシレネとアカウリスの花ね。大きな石の上に張りついたように密集して可愛いわね。草原に咲く花もいいけど、このような険しい道を踏みながら、ふと出遭う花もいいわね。花と交差する瞬間、『ああ、美しいわ』と感嘆の声が自然と出てくるわ」

「高山に咲く花は、身丈が低く葉も小さいが、品と気高さを備えがあるね。そして、なによりも清楚さがあって、可憐だ」



少しすると、ママがパパにまた言った。

「陽が次第に高く昇るにつれて、前に立つ岩壁に朝日が照りはじめたわね。ここが、赤い壁と呼ばれる直下ね。大きな岩だわ」

「直立するこの大岩壁に落日の陽があたれば、赤みを帯びるらしい。その残照はさぞ美しいことだろうな」

下り道となると、今までの岩の道が土の道に変わり、何種類もの高山植物がボクたちの目の中に飛び込んでくるのだった。ママは、しばしば歩みを止めては、

「これは、何々よ」

と、花の名前をボクたちに言い続けながら歩いてきたな。

さらに下って行くと、道端に浮いていた小石に。パパは足をとられ、山側の斜面に尻もちをついてしまったのだ。その時、パパが、

「あつ、こんなところに！ 岩石の裂け目にアルプスの星と呼ばれる花が、四つ咲いているではないか。エーデルワイスだ」

と声を発したのだ。

「えっ、本当なの？」

と言って、ママが駆け寄り、

「自生のは初めてだわ。人工栽培で、何回も目にしたことがあつたけれども、ここで出遭うとはね」

と声を出し、二人はしばらくその花に目を注ぎ続けていたな。その二人の姿を見て、ボクはニコニコ顔だ。

ボクたちはさらに下って行くと、ママが、

「松と樅の樹海の中に入ったわ。今までの暑さから、急に涼しくなったわね。樹と土の帯びた大気が肌にとても心地良いわ」

と言い、エーデルワイスの歌を唄い出したのだ。ボクはそれを聞きながら歩き続けているのだった。

翌朝、ボクが寝室のカーテンを引いて外を見ると、昨日と同様に雲一つない青空にうれしくなったな。

ママが宿のおばさんから、「今、アルペンローゼが誇るように咲いているところがあるから、行ってみたら」と言われ、それをパパに伝えると、パパが、「よし、そこへ行こう」と言ったのだ。

パパの運転でしばらく走り続けてから、リフトに乗って高さ二二五〇メートルの地点で降り、ボクたちはすぐに歩き出したのだ。と、パパがママに説明したのだ。

「あの正面の大岩山(二二五二メートル)は、セラ岩峰群で、その右手奥に急峻な岩山ラングゴツヘル(二二三八メートル)が雄々しく聳え立っているね。学生時代、あの周辺の山々をあるいたことがあつたよ」

「そうなの。まるで大巨岩が、突如平たい地盤を突き破って出てきたかのような格好ね。なんて偉容な山なの。現実の世界とは思えないわ」

ボクたち三人はゆるやかな草原の尾根道を歩き出したのだ。

ママが足もとに咲いている花を見ながら、

「黄色い丸いキンバイ草だわ。それに、色鮮やかな青紫色をしたリンドウと小さなアザミ」

が競い誇るかのように咲いているわ」  
と、言ったのだ。

しばらくすると、真っ赤な色をした花々が現れ出たのだ。それを見たパパがママに、  
「つつじ科の花アルペンローゼだ」  
と言うと、ママは、

「赤い帯状が、百メートル以上もなびいているわね。なんて深みのある色なの」

と、大きな声を出したのだ。ボクたちはその花々を眺め続けていたな。

再び歩き出すと、ママが言ったのだ。

「松と縦の樹で覆われた森のなかに入ったわね。今までの強い日差しから解放されて、急に辺りが薄暗くなったわ。爽やかだわ」

少し行くと、パパが、

「あ！ 鹿だ。それも二頭だ」

と、低い声を上げたのだ。うしろにいたママも、

「ええ、わたしも見えたわ」

と、声を低くして言ったのだ。鹿は、ボクたちの行く先を案内するかのように、時々姿を現しては消えていったな。

さらに森の奥へ進んで行くと、無人の小さな丸太小屋が見えた。パパが、ボクとママに、  
「ちょうど、昼食を摂ろうと思っていたところだ」  
と言ったので、ボクたちはそこでおにぎりを食べることになったのだ。

小屋の前は草原が広がっていて、色々な花が咲いているのだった。その奥には、白い雪で覆われた大岩山が堂々と聳え立っていた。

沢の澄んだ水音を聞きながら、ボクたちはかつおぶしと梅干入りのおにぎりを食べ出したのだ。そして、草の上に三人とも体を横たえたのだった。

ボクは目を開けながら、青い空にポツカリと浮かぶ白い雲を見ていたな。ボクの横であお向けになっていたママが、パパに、

「この姿勢から眺める花たちは、今までとは違った姿に見えるわね。蝶たちが花から花へと飛び廻っていて、のどかね」  
と言うと、パパは肯きながら、

「そうだね。風によつて、松ヤニの甘酸っぱい香りが漂い、自分の存在さえも、時の流れさえも忘れてしまうな」  
と、応えたのだった。

昼食を終えてから、再び歩き出すと、こんどは今までとは違った急な下りとなったのだ。パパがママに、

「地図にも記されていない健脚向きの道だから、ミヒヤエルの手を握って下りるから、きみは慎重に足を運んでくれ。とくに、枯れた松葉が地面に一センチほど積み重なっているので、足をとられやすいので、気をつけてくれ！」  
と、声を高くして言ったのだ。ママは、怖がりではなかったが、

「早く、このくだりを終えたいわ」

と声を出しながら、ボクとパパのうしろを歩いていたな。

ボクたちは、一步一步足を確かめながら下ったのだ。しばらく続いた急傾斜の途中、

ママは一回、ボクは二回ほど転んでしまったのだ。でも、ボクはパパと手をつないでいたので、安心して歩いていたな。

やっと緩やかな道に出た時、ボクたち三人とも笑顔で、

「やった！」

「やったね！」

と、声を上げながら握手をしたのだ。

パパは何も起こらなかつたので、ホッとしたような表情だったな。そのパパがママに。「登山者の姿がないこの道で、急に雨に降られたらと思つたら、ゾツとしたよ。恵まれたと感謝しなければならぬね。まして、ミヒヤエルの筋力は弱いほうなので」

と言うと、ママは、

「そうね。でも、毎年の山登りで、足は鍛えられていったわね」

と応えて、ボクを見たのだ。ボクはニッコリ顔したのだ。

宿に戻ると、ママが、

「疲れが急に出てきて、わたしの両足の筋肉が張り出してきたわ。痛みもすこし走りはじめたわ」

と言つたので、夕食を済ませてから、ボクたちはシャワーを浴び、早々にベッドに潜り込んだのだ。

翌朝、起きると、昨日の疲れがまだボクたち三人に残っていたので、一日中、宿でのんびりと過ごすことになったのだ。

最後の夕食となったのだ。ママの案で、宿から歩いて十分ほどの丸太造りの山荘風レストランで摂ることになったのだ。今回の山旅で、初めての夕食だ。

中庭に置いてある分厚い木の丸テーブルを囲んで、ボクたちは座つたのだ。ママがワインを手にしながら、

「夕陽に照らされたシュレーンの大きな岩山、美しいわね。岩壁が時間を追うごとに、オレンジ色から淡い赤に変わり、やがて今は濃い赤色になったわね。なんとという色彩の演出なのでしよう」

と言うと、パパはやはりワイングラスを持って、

「光が醸し出すスペクトルだ」

と、満足そうな顔で言つたのだ。ママとパパがグラスを重ねると、その音色があたり一面に響き渡つたのだ。ママがグラスを手にしながら、

「アルプスの三大花といわれているエンチアン、エーデルワイス、それにアルペンローゼを見たわね」

とパパとボクを見ながらニッコリして言い、陽に焼けた顔にワイングラスを近づけたのだ。パパもグラスを持ちながら、

「明日から、またテュービンゲンでの生活になるな。ミヒヤエルは養護学校へ、きみは職場へ、そして、わたしはハウスマンの活動だ。三人ともここでエネルギーを得て、戻るのだ」

と、応えたのだ。

「そうね。自然の力つてすごいわね」

ママがそう言うのと、パパはお皿に盛つたものを食べながら、

「自然のなかにいると、自分が素直になっていき、謙虚になるな」と声を出し、ママに、

「あるがままの、ミヒヤエルのようになるね」

と、ママに言ったのだ。

ママはボクを見て

「たのしかった？」

と訊いたので、

「ヤアー」

と、答えたのだった。

## 十章 雪の黒い森

夏休みは山登りをして、冬休みも自然の中を歩き廻るのが好きなボクたちだ。

家から、パパの車で一時間半ほど走ったところに『黒い森』と呼ばれている森林地帯があるのだ。雪の上を歩くのが好きなパパに連れられて、僕はそこへしばしば行くな。

厳冬期のある日、ボクたち三人はまたその森へ出かけたのだ。

パパが、助手席に座っているママに、

「あと少して、小さな村サイクに到着するぞ」

と言うと、ママはまわりの景色を見ながら、

「辺り一面、雪が五十センチぐらい積もっているわね。きれいだわ」

と、応えたのだ。

しばらくすると、パパが、

「これから滞在する休暇用住宅が見え出したな。あの坂道百メートルを上げればいいのだ。かなり急だが、行けるだろう」

と自分に言い聞かせながら、ハンドルを強く握り出したのだ。でも、三分の一まで上ると、パパが言ったのだ。

「車輪が空転をはじめ、前へ進もうとするが、タイヤは滑って凍った雪上で空回りするだけだ。バックもできない」

パパは、何度もアクセルを踏んだのだったが、車は一向に動こうとはしなかったのだ。

そこで、ボクとママは車から降りて、二人で押しはじめた。でも、少しも動かなかつたのだ。

ボクたちが途方に暮れてしまった時だった、黒いオーバーコートを身につけた一人の女性がボクたちの前に現われたのだ。そして、ボクたち三人を見ながら、

「この坂は凍っているの、一度下まで降りて、バックで一気に上るしかないでしょう」と、言ったのだ。

「そうしたいのですが、バックもタイヤが空回りするだけで、下にもいけないのです」

「では、わたしが代わりに運転しましょうか」

その言葉に、パパは即「お願いします」と答えたのだった。

その人も一度タイヤを空回りさせたが、二度目に試みた時、車輪が動いて下まで降り、こんどはバックで一気に上ってきたのだ。それもかなりの速さで。

それを見たママが、

「あの人、自動車教習所の先生ではないかしら」

と声を出し、パパも、

「巧いものだ」

と、言ったのだ。ボクたちは圧倒されて眺め続けたのだ。

坂を上り切ったところで、車は停まり、その女性が降りてきたので、パパがお礼をのべうと、その人は、忠告してくれたのだった。

「この車のタイヤは、わたしが今までに走った冬タイヤのなかで一番悪いものだったわ。これで雪のあるところを、走らないほうが賢明だと思うわ」

パパは、再び頭を下げたのだ。

森の入口前に建つ三階建ての大きな家の前に停まった車から、これからの六日間に必要なものを、三人で運びはじめたのだ。もし黒いオーバーを着た女性が現われなかったら、一体、どうなったかとママとパパは話しながら、三階の貸住宅に入ったのだった。

翌朝、ボクはベッドから起き出し、居間のカーテンを開けると、ママが寄ってきて言ったのだ。

「タンネ（樅の木）が、十五メートルほど先に何本も見えるわね。どの先端にも、白と黒色をした尾の長い鳥が身動きもしないで止まっているわ」

ボクは窓の外の白い景色を眺め続けていた。夏と違い、小鳥たちの鳴き声はまったく聞こえないのだ。パパもボクの横に来て、外を見ていたな。

そのパパがママに、

「森閑とした雪景色だ」

と言い、さらに、

「標高千メートルの、それも高台のここからは下に村がよく望めるな。点々と建つ民家の三角形屋根には雪が厚く積もり、レンガ造りのエントツからは煙が立ち昇っている。黒い森地方に住む人たちの村の姿だ」

と、付け加えたのだった。

ボクたちはしばらく、窓に映る景色を見ていたな。と、ママが、

「あら、野生の鹿がピョンピョンと雪を蹴飛ばしながら森のなかへ走って行くわ」

と声を出したので、ボクはそのほうに目をやったのだったが、もうその姿をとらえることが出来なかったな。残念だ。

朝食を済ませてから、ボクたち三人は雪用の装備を身につけ、ストックを持って外に出たのだ。五分も歩けば、もう森の中だ。上を仰ぐと、薄灰色だ。その空を見ながら、パパが、

「雪が今にも降ってきそうだな」

と、ボクとママに言ったのだ。

一時間ほど歩いていると、パパが言ったように、雪がパラつきはじめたのだ。風も吹き出してきたが、ボクたちの歩きには支障はなかったな。パパがママに言ったのだ。

「新雪を踏んでの道は、体が沈むようで気持ちいいな」

「そうね。木と木の間に雪がふつくらとした餅のように積もって、そこに風があたりと、キラキラと輝きながら渦となって宙に舞っていく模様は、雪ならではの光景ね」

ボクたちは、雪が枝からバサバサと落ちる音を耳にしながら、雪道を進んでは、少し休みを取り、サクツ、サクツと歩き続けていたのだ。パパの髭がツララのようになっていたな。

翌日も翌々日も曇り空の下、ボクたちは大体平均して七、八キロメートルの雪道を歩き廻っていたのだ。

十二月三十一日、今までの三日間と違って、青空の広がった天気となったのだ。ボクたちが歩き出すと、ヤツケを脱ぐほどとなったな。

昼食の時間となったので、パパが宿で作ったお弁当をリュックから取り出し、食べはじめたのだ。夏の山でのおにぎりも美味しいが、雪の上での味もなかなかいいなと思いがら、ボクは食べ続けていたのだ。

ママがおにぎりを口に入れていているボクに、小さな声で、

「ほら、あそこをごらん」

と、十メートル先の梢を指差したのだ。すぐにその方を見ると、二匹のリスが目に入ったな。パパは、すぐにリュックからカメラを取り出し、その姿を撮ろうと構えたが、もうリスはもういなかったな。残念がっているパパに、ママが、

「ほら、あそこにも」

と小声で言ったが、その姿をボクもパパも見ることではできなかった。

雪道を一日中歩いたので、ボクたち三人の顔は赤く焼けたようになっていた。その顔で宿に戻り、熱い紅茶にこの地で採れたタンネの蜂蜜を入れて飲むと、甘酸っぱい香りと味が口から胃に伝わり、ボクの体はしだいに温かくなってくるのだった。

ボクたちはソファアの上に足を伸ばし、今日歩いたコースを、三人ともいくらか焼けた赤い顔で話し出したのだ。

暗くなった夕方、ママがパパに、

「今年、最後の礼拝に出席したいわ」

と言うと、パパは肯いたのだ。

ボクたちはストックを持って下の村へ向った。

しばらくして、ママがパパに言ったのだ。

「まわりは薄暗いが、雪面は雪明りでやわらかい青色になっているわね。それに、両側に並んでいる菩提樹と楓の枝には、氷柱が垂れ下がり、裸のままの自分を誇っているかのようだよ」

「そうだね。自分の存在を誇っているのだよ」

「一本、一本の木、個性があるわね」

「どの木も同じ姿でないのが、素晴らしいね」

「そうね」

そう言って、ママはボクのほうを見て、ニッコリしたのだ。

ボクたちが雪道を踏むたびに、サクツ、サクツとした足音がまわりに響きわたっていたな。ボクは、体が浮いたりしての愉快的歩きとなったのだ。そのボクに、パパが何度も言ったのだ。

「凍ってしまった雪の上に、ストックを突きながら慎重に歩くように！」

百メートル先に教会の灯りが見えたのだ。と同時に、教会の鐘がカーンカーンと鳴り出したのだ。その音に誘われるようにして、ボクたちは堂内に入ったのだ。

十五名ぐらいの人たちが椅子に座っていたな。ギターの演奏で式がはじまったのだ。ボクはギターに合わせては、体を動かし続けていた。

式が終り、外に出てから再び雪道を登り出すと、一家族が向こうから歩いて来るのが見えたのだ。家族全員が、手にはいまつを持っていたな。

「良い新年を！」

ボクたちは、お互い声をかけ合いながらすれ違ったのだ。

しばらくして、ママがうしろを振り返りながら、

「五つのたいまつが星月夜に照らされながら消えて行くわ。なんという幻想的な青い美しい光景なのでしょう」

ボクもその方を眺め続けていた。

宿に戻ると、パパとママは遅くなった夕食の支度に取りかかり、一時間後、白菜と椎茸、それに薄い豚肉の入った鍋を囲んでの食事となったのだ。ボクたち三人が大好きな水炊きだ。

家から持ってきた箸でボクは肉などはさみ、レモン入り醤油につけ、ご飯の上のせて食べ出したのだ。と、ボクの体は少しずつ温かくなっていくのだった。

パパが、湯気が昇る白菜を口に入れながらママに言ったのだ。

「今日（大晦日）の夜は、日本にいたときはそばを食べたね」

「そうね。でもこれもお醤油の味よ」

ママは、ニッコリして応えたのだ。

ボクたちは、「おいしい、オイシイ」を言い合いながら、残った汁をスープ替わりにして飲み干したのだ。ボクの額から、汗が滲み出てくるようになったな。

食事を終えてから、パパが、

「夜中の十二時まで起きていよう」

と言ったので、ボクたちはゲームをはじめたのだ。でも、三人とも今日の疲れが出てきたこともあって、欠伸をするようになってしまったな。

しばらくすると、大きな音が外から聞こえ、カーテンの隙間から光が差し込んできたのだ。パパは腕時計をのぞきながら、

「ちょうど夜中の十二時だ。爆竹がはじまったな。村外れに建っているこの家周辺は、大晦日の夜は静かだろうと思ったのだが、ここもドイツだ」

と言いながら、窓際へ行ったのだ。ボクもパパの傍に行った。と、パパがボクに言ったのだ。

「近くに住む人たちが、打ち上げる花火だ」

ママも来て、一緒に眺め出したのだ。三十分ほどで静かになったので、ボクたちはベッドに入ったのだ。

翌朝、目が覚め、ベッドから起き出し、窓から外を眺め続けていると、雲の切れ目にひと筋のオレンジ色の光が見え出したのだ。それがだいに黄色に変わったのだった。

パパとママがボクのところに寄ってきて、ママが、

「新しい年がはじまるわね」

と、言ったのだ。パパは朝日のほうを見ながら、手を数回打ち出したのだ。ボクもパパの真似をして手を打ったな。

ママがパパに訊いたのだった。

「何を願っているの？」

「皆の健康をね。とくに、お義母さんの健康が守られますようにと」

「そうね」

二人の会話を聞き、ボクはもう一回手を打ったのだ。

## 十一章 おばあさんとの別れ

パパとママとボクが下の階にいるおばあさんの部屋に行くと、おばあさんはソファアに座って、いつものように郵便箱から取り出した新聞を読んでいたな。その前で、ボクたち三人は声を合わせて、誕生日の歌を唄ったのだ。

そのあと、ママはおばあさんを抱き、ボクはおばあさんの頬に自分の頬を重ねたのだ。パパもおばあさんの手を握りながら、

「八十七歳の誕生日、おめでとございます」

と、言った。おばあさんは、とてもうれしそうな顔を浮かべたな。

その誕生日から二ヶ月が過ぎた、ある日のことだった。おばあさんの体が急におかしくなって、家から救急車で大学病院に運ばれてしまったのだ。

パパとママは病院の先生から、

「高齢のお母さんは、心臓が極端に弱くなっています。明日、何が起こってもおかしくない容態です」

と、言われたのだった。それを聴いたパパは、  
「お義母さんをどうしても家で介護したい。お義母さんが安心していられるのは家だし、気を許せる子供たちと一緒に過ごさせてあげたい」

と主張して、おばあさんは四週間病院に入院してから、家に戻ってくるようになったのだ。ボクは、おばあさんと毎日会えるのでよろこんだのだった。

家に戻ったおばあさんは何も食べないで、僅かの水分と点滴の毎日だった。ボクは、ママかパパがおばあさんの部屋に入る時だけ、一緒にについていったのだ。ボクが行くと、おばあさんは意識がしっかりしている時は、ボクを見ながら、

「ミヒレエ」

といい、いつもの優しい顔を浮かべるのだった。ボクが、

「おばあさん、おばあさん」

と呼ぶと、おばあさんはボクを見つめてニッコリするのだったが、すぐにまた目を閉じて眠ってしまうのだった。おばあさんと一緒に、ゲームができなくなってしまったのだ。

ママとパパそれにママのお兄さんたちは、おばあさんを毎晩交代で看ているようになったのだ。ボクは何度もおばあさんの手を触れたりして、挨拶を交わしていた。



おばあさんが家に帰ってから一ヶ月して、ママがパパに言ったのだ。

「昨夜、母を看っていた兄は、聞いたらしいの。母が二十五年前に亡くなった父の名前を何度も呼んだのを。今まで父の名前を口に出したことがなかったのに。それに、母のお母さんと亡くなった、わたしの姉の名前も呼んだらしいの。それから、咳も出て熱も上がったと言ったわ」

「また肺炎に罹ったのかな」

「そうかもしれないわ。心配だわ。母はここまでよく生きていると思うわ」

「そうだね。医者も看護師も心臓が弱い、お義母さんがここまで生きてるのが、奇跡だとも言っていたからね。ボクたちのために、お義母さんは頑張って、そして今の今をボクたちと一緒に生きているのだよ」

「そうでしょうね」

「昨日は、ほとんど意識のないなかで、『上を開けて、上を開けて』と希うような声を上げていたな」

「そうなの。私たちも頑張りましたよ」

パパとママがこの会話をした翌日、おばあさんは亡くなってしまったのだ。ボクは寂しくて、寂しくてしょうがないのだ。

パパは、おばあさんが急に倒れ、容態が悪くなったことを知り合いの人に手紙で知らせたり、また亡くなったことをテュービンゲン便りに書いたりしていたな。

そうしたら、日本にいるパパの友人や知人たちから、手紙が届いたのだ。それらの内容を、パパはママとボクに必ず伝えていたのだった。

テュービンゲンに長く住んで、クリスマスの時はいつもボクの家に来て、食事を一緒にした。パパの友人からの手紙には、

『御無沙汰しています。久しぶりのお手紙、拝見いたしました。お義母さんの具合が悪いようで、大変心配しています。そして看病をしていらつしやる皆様も、さぞ心配で辛い毎日だと思います。』

わたしも最近、考えるようになりました。誕生して、学校へ、そして結婚、家庭生活、初老の月日、老年の体調の変化、その中で今までいろいろと心配したり・苦労したり・喜んだり・悲しんだり、その時その時に人間が生きてゆくと云う事は、大事業だと感じて居りました。でも、最後の死と云うことが一番大切で、その大切さをはっきりと身にしみて感じるようになりました。

わたしは信仰も無く、子供も有りません。お義母さんはしっかりした信仰も有り、子供たちにも恵まれて居られるので、羨ましく思います。

神の御心のまし、自然の成りゆきを、お義母さんは感じていらつしやると思います。わたしも遠く日本の空より、一日でも長く生きてくださるようにお祈りして居ります。心残りの無いように、しっかりと看病して上げて下さい。………

誰にも訪れる死の瞬間は、静かで、安らかにしたいものと、考える年令になりました。ゲルトルートをしつかりと慰めて上げて下さいね』

また、ボクの家から日本から三回ほど訪れてきたパパの知人からの手紙には、

『夕暮れと共に秋の虫がうるさい程鳴き、秋を実感しております。』

昨秋は、横井さんには大変お世話になりました。その後、大変ご無沙汰しております。

とは申しますものの、わたしはチュービンゲン便りにて、横井さんとご家族のご様子を伺っているで、とても身近に感じておりました。お母様の具合はいかがでいらっしゃいますでしょうか。案じております。

チュービンゲン便りでの横井さんの人間の真理をついた、しかも哲学的な物の考え方の原点はどこにあるのでしょうか。毎回、文章を読ませて頂くたびに、それを思うのです。奥様でしょうか。それともミヒヤエル君でしょうか。それとも、思考の構築の中に組み込まれていらっしゃるのでしょうか。横井さんが宗教家のような感じさえ致します。

わたしは少し前に「地球交響曲」という映画を、一番から三番まで見る機会がありました。この映画は、人間をひきつけて離さない魅力があり、根強い人気を持っております。わたしも三回見ました。

オムニバス形式なのですが、その中で佐藤初女という日本女性を取り上げられています。彼女は三十年位前から社会的弱者とされている人々に、自宅を開放している人です。ある時、彼女は「あなたにとつて、祈りとは何ですか」と聞かれ、とっさに「生活です」と答えました。生活全てが祈りで、手を合わせるのが静の祈り、動いて働くのが動の祈り、だと言うのです。わたしは日本人の多くがそうであるように、いわゆる無宗教に近いのですが、この言葉は心の中にスーと入ってきました。spirit, body, mind, の三つの調和が、人間本来の姿であるとも解説しておりました」

パパの山仲間で、一年間チュービンゲンに滞在して、よくボクと遊んでくれた人からの手紙には、

『過日、グロースムターが逝去されたことを知りました。心からおくやみを申し上げます。横井さんもまたゲルトルートも悲しまれたことと思っております。』

グロースムターは良きヨーロッパ文化を体現していた方だと思っております。聖書の中に「隣人を愛せよ」という言葉がありますが、常にこの言葉の意味するところを体現されていた方だと思っております。

人生は時として、苦しみや悲しみに出会い、耐え忍ぶしかないという時があると思いません。むしろ人生の実相としては、苦しみや悲しみのほうが多いのかもわかりません。

ただ、わたしは死と生とは断絶ではなく、継続しているものだと思います。生者は死者のためにあり、死者はまた生者のためにあると思います。悲しみの極にあっても、何か見守っていただけ大きな力といったものを信じたいと思います。

ゲルトルートも悲しまれたことでしょう。どうぞ、心からのお悔やみを申し上げます、お伝え下さい。

又、ゲルトルート・ミヒヤエルと共に日本にお越し下さい」

ボクは知らないが、パパが親しくしている人から届いた封書には、

「お義母様のご逝去に心よりお悔やみ申し上げます。  
天寿を全うされたお義母様は、十分に人生を生きられた事と存じます。亡くなられた方には『ありがとう』と『長い人生、おつかれ様でした』の二つの言葉に集約されるような気がいたします。

当分はお忙しい日々が続くと思われませんが、お体をお大切になさって下さいませ」

## 十二章 生まれ育った地へ

おばあさんが亡くなってから、ママは元気がなかった。そこで、パパはボクたち三人で日本を訪れる計画を企てたのだ。ママにとっては、十四年ぶりだ。よろこびながら、その日を待っていたママだった。勿論、ボクもその日が来るのを待っていたのだ。

いよいよ日本へ出発する日となり、二週間の旅に必要なものが入っているリュックをボクたちはそれぞれ背負い、家を出たのだ。

フランクフルトから十一時間半ほど飛行機に揺られて、大阪空港に朝早く降りたあと、ボクたちはリムジンバスに乗り、京都へ向った。ママが、「ぜひ、京都へ訪れたたいわ」と希望したからだだった。

ボクたち三人は桜の花が咲きはじめてのを見ながら、市内に点在するお寺やお城、そして祇園や三千院などを六日間歩き廻っていたのだ。

京都での最後の日、パパが「都おどりを観よう」と言ったので、ボクたちはそこに行ったのだ。

ママもパパもそうだけれど、ボクも感動しながら、舞台上で舞い踊る着物姿に魅せられしまったのだ。それに、笛、小太鼓、三味線から出る音に、ボクの体は自然と動き出したのだ。まわりの人は、体を揺すっているボクを時々見ていたが、そんなにはお構いなくボクはたのしんだのだ。ママがパパに、

「色彩豊かで、なんと美しいの」

と、感動した声で言った。

京都でのたのしい滞在を終えてから、ボクが生まれた浜松へと向ったのだ。ママにとっては、二十年ぶりの訪問だ。ボクは、ママから浜松で過ごした日々のことを何度か聞いたことがあった。懐かしい地、そして人との再会にママはうれしそうな顔をしていた。

ボクたちは駅前からバスに乗り、聖隷三方原で降り、パパが以前勤めていた施設の近くに建っている高齢者ホームへ歩いて行ったのだった。

ホームのゲストルームで、ボクたちがリュックを下ろしていたら、ママがパパに、

「わたしたちが住んでいた家へ、これからすぐに行きたいわ」

と、言ったのだ。ママにとっては、日本に来て初めて暮らした地だ。それに、未熟児すれすれの体重でボクを産み、乳をまったく飲まなかったボクを何とか飲ませようとして一生懸命に尽くしてくれたママだ。日本語も話せずにいたママだった。パパがその時のことを、ママと語る時はいつも、パパの目は潤んでいたのだ。

二人の想い出の詰まった家は、二十年前と同じに建っていて、五十メートル先からは、「モウ、モウ」の音が聞こえ、それを耳にしたママが、「昔と同じね」と呟いたのだった。

ママとパパは小さな平屋建ての前で、言葉を交わさずしばらく立ち尽くしていたあと、ボクを見ながらニッコリとした顔で、

「ここで君は生まれ、一歳まで暮らしていたのだぞ」と、言ったのだ。

ボクたちが土と木の匂いのする家周辺を歩き出すと、ママがパパに、

「あなたの休みの日は、ミヒヤエルを乳母車に乗せてよく三人で散歩したわね。そのミヒ

ヤエル、こんなに大きくなって」

と言い、さらに、

「あなたの給料が出たときに、何度かうなぎを食べに行ったことがあったわね」

と話したのだ。と、パパが、

「そうだったな。当時のことがまざまざと浮かんでくるよ」

と、応えたのだった。

ボクたちがここに来たのを知ってか、ママとパパの知り合いの人たちが会いに来て、優しい目でボクたちを迎えてくれたのだった。その中でも、ママはボクたち三人が暮らしていた家の隣の家族と二時間にわたって話をしていたな。そして、最後にママがその家族の手を握りながら、

「いつか、わたしたちが住んでいるチュービンゲンに遊びに来てください」  
と、言ったのだ。

ボクは日本語がまったくわからないし、思っていることを言葉で表現することがうまくできないので、会話の輪になかなか入ることは難しいのだ。そのことを察したパパはボクとママを連れて、バスと電車で揺られながら浜名湖へ向ったのだ。乗り物が好きなボクは、車窓に映る景色を、目を追うようにして見ていたな。

湖に着いてから、湖畔に今まで咲いていた桜の花が少しずつ散っていくのを目にしたが、ボクたちはゆっくりのんびりと二時間近く歩いてきたのだ。所々で黄オレンジ色の夏みかんが顔を出していたな。

ボクたちがお世話になったホームで最後の朝食を摂ってから、再びバスに乗って浜松駅へ向ったのだ。車内では、信号前で停車する度に一つのメロディーが流れ、それを聞いたママは隣に座っているパパに、

「うさぎ追いし、かの山、……」

と、小さな声で歌ったのだ。

パパは、ママが歌う声に耳を澄ましていたな。三十八年間、日本で暮らしていたパパには、感傷的な響きのある歌に違いない。それに、外では小雨となって今まで咲いていた桜の花が散っているのがパパの目に映っていたのだ。また、「うさぎ追いし、かの山」のメロディーが流れたのだった。

ママとパパの想い出深い浜松を立ち、次はパパのお姉さんが住んでいる茅ヶ崎に行き、そこで親戚の人たちと会い、伯母さんの家で一泊してから、土浦へ向った。

土浦駅改札口を出ると、パパの友人夫妻がボクたちを待っていてくれたのだ。ママにとつては、十四年ぶりの土浦だ。ママはニコニコしながら、その夫妻と握手をして、日本語で言葉を交わし出したのだ。日本に十日間ほどいたせいなのだろうな、ママは日本語を思い出したようだった。

ボクたちは、これから二泊するその夫妻の家に行って大きな間に入ると、この地で親しくしていた十五名ぐらいの人たちがボクたちを待っていたのだ。ボクは六年間、この地に住んでいたが、皆の顔はもう忘れていたな。でも、ママは懐かしそうな顔を浮かべながら、皆と握手を交わしていたのだ。

皆はボクを見て、「こんなに大きくなって」と驚きの声を上げたのだ。ボクは、小さい頃はモヤシのようなひよろりとした体つきだったからだ。ママと違って、ボクは日本語が

口から出なかったが、自然に出る笑顔で皆と握手をしたのだ。

ママとパパの横に座って、ボクは皆と一緒にお鮭を食べ出したのだ。家でパパが作る手巻きすしとは違う味だ。ママはボクの横で、「美味しいわ、おいしいわ」と盛んに声を出しながら食べていた。醤油が好きなボクは、おすしにたっぷり醤油をつけて口に運んだのだ。パパは愉快そうに皆と語り合っていたな。

夕食を終え、しばらくすると、ボクは眠くなり、一人で布団の中に入ったのだ。目を瞑ると、いつも数秒で眠ってしまうボクだ。

翌朝、ボクたち三人は友人夫妻と語り合いながら、朝食を摂りはじめたのだ。昨夜は遅くまで話に花を咲かせていたのだろう、パパとママは寝たりなさそうな顔だ。ボクは久しぶりの朝食のご飯に、三杯お替りをしたのだ。日本にいた時は、朝食はママに合わせてパンを食べていたが、ご飯を食べていた時期があったのだ。というのも、パパのお母さんと二年間一緒に暮らしていたからだだった。

ご飯での朝食を済ませてから、ボクたち三人は、昔住んでいた家へ向ったのだ。

ママがパパに、

「田圃が左右に見え出してきたわね。ほら、あの先にトタン屋根の貸木造住宅が建っているわ」

と、言ったのだ。その家の前に、ボクたちが立つと、ママがその家を見つめながら、「この家に、ドイツから母が来て、一ヶ月滞在していったわね。家周辺の景色はほとんど変わってないわね。家の裏のピーナッツ畑も今もあるわ。母とミヒヤエルとあの辺をよく散歩したわね」

と、話した。と、パパが、

「きみは日本にいた八年間、ミヒヤエルと母とを看っていたので、日本を旅したことがなかったな。きみには感謝しているよ。今回、旅ができて本当によかった」

と、ママの手をとって応えたのだった。

「そうね。ミヒヤエルも一緒だったし、たのしかったわ。それに昔の知人たちとも会えて話してもでき、わたしが日本にいた時のことを確認でき、人との繋がりも感じたわ。ありがとう」

ママは、パパの手を握り返したのだった。ボクは自然とニコニコ顔になったのだ。

## 十三章 笑顔の日々

ボクたちが日本から戻って一ヶ月すると、パパは、おばあさんと暮らした日々のある一つの物語として書きはじめたのだ。おばあさんを記憶の中に留め、生き残っているボクたちがしっかりと生活していくことが、おばあさんへのはなむけになるのだとパパはママに話したのだった。

養護学校を卒業したボクは、こんどはボクと同じような人たちが働く作業所に、小さなマイクロバスに乗って通うようになったのだ。そこには、学校を二十一歳で卒業する一年前から実習に行っていたので、自分が何をするかはわかっていた。

働き出して数カ月してから、パパが作業をしているボクの様子を見に来たのだ。

パパが作業室に入ってきたので、手招きで「こっち、こっち」とパパを呼んだのだ。パパはボクのテーブル台の上に、山のように積まれてある八色の粘土を見て、

「これらを色分けして、小さなプラスチック箱にきちんと入れるのが、きみの仕事か」と訊いたので、肯いたのだ。

パパはボクの横に座って、一緒に作業を手伝いはじめたのだ。と、ボクたちを指導しているトーマスが寄ってきて、

「ミヒヤエルは、よく働きますよ。根気があって」

と、パパに話しかけたのだ。

「そうですか。いつもこの箱詰めをしているのですか」

「いいえ、一週間ごとに作業替えがあつて、この作業室にある七種類の仕事のどれも上手にこなしますよ」

「それはたいしたものだ」

そう言つて、パパは手を休めて、ボクのほうに顔を向けてニッコリしたのだ。

パパは日本にいた時、ボクたちと同じような人たちをお世話していたこともあつて、この室にいる九名の人たち一人ひとりのところに気楽に寄つて話しかけていたな。ママが以前言つたことがあつた。「私たちが日本にいたら、パパはおもちゃ作りの作業所を開きたかつた」と。ボクは、仲間たちに話しかけているパパの姿が好きだ。

ボクもそうだが、ここにいる人たちは皆給料をもらっているのだ。ボクは手取りで一萬三千円だ。ボクたちはそれぞれの能力に応じて、頑張っているのだ。

頑張っているといえば、パパは以前にもまして机に向つて、おばあさんをテーマにした物語に力を入れていた。そして、それをやつと書き上げて、日本のある文学賞に応募したのだ。パパは、その結果を待っていたのだ。

そのようなある日、作業所から帰宅すると、いつものようにパパがボクのために用意したパンとジュースがテーブルの上にはなかったのだ。パパを見たが、パパは窓越しに映る垂れ下がった雲を眺めているだけだつた。いつものパパと違って、何かガツカリした表情の顔だつたな。

そのパパに連れられて、夕食の買物に行ったのだが、どうもボクの右足の裏が痛い。足を引きずりながら歩いていたので。そのボクの様子に、パパは何の表情を示さずにいたな。いつもは、ボクの異常にすぐに気づくパパだったが、今日は違っていたのだ。

家に戻り、パパに連れられてバスルームでシャワーを浴び出したのだが、立っていられずに、バス槽に座ってしまったのだ。と、パパが、

「どうしたと？」

と訊いたのだったが、ボクは答えずに座つたままでもいたのだ。この時、パパは初めてボクの異常に気づき、足裏をのぞいたのだ。

パパは驚いた顔をしながら、バスルームからボクを出して、居間のソファーに横たわらせ、焼いた針でボクの足裏を突つきはじめたのだ。

針が刺さる度に痛みが走つたが、ボクは何の声も出さずにパパの顔を見ていたのだ。

「トゲが深く入つて、なかなか引き出すことができない」

パパはそう言いながら、ボクに、

「痛い、いたい」

と何度も訊いたが、ボクは歪んだ顔でパパを見つめ続けていたのだ。

トゲをなかなか取り出すことができないでいた。パパは、こんどはまわりの皮膚を針で切り裂きはじめ、やっと一センチぐらいの黒いトゲを引き抜いたのだ。と、その時、血の混じった白い膿が、パツと飛び散ったのだ。パパはホツとした顔で、

「出たから、もう痛くないぞ」

と、言ったのだ。そのあと、パパはボクをソファアに横たわらせたのだ。

夕方になって仕事先から帰ってきたママに、パパが、

「日本に応募した作の通知が届いて選外となったよ」

と言い、さらに続けたのだ。

「胸が塞がれ、そのことばかりに心が捕らわれて、ミヒヤエルの足にトゲが刺さっていたことを知らずに彼と買物に出たのだ。そして、家に帰り、シャワーのときに気づいたのだ。数時間も痛みがあったことを知らずに。これは、父親として、ハウスマンとしては失格だな」

そう言うてから、パパはママに以前勤めていた日本の施設で経験したことを語り出したのだ。

「一人の少年がいつもとは違う足取りで歩いていたが、そのことを気づかずにいたのだ。そして、その子を入浴させようとしてズボンを脱がせると、大腿部に切り傷があつて、そこからまだ血がにじみ出ていたのだ。それを三時間以上も気づかずにいた自分は、彼らをお世話する職員として失格だと思ったよ。それをこんどは最も身近にいる息子にやってしまい、情けないよ」

ママは、パパの話すことに耳を傾けていた。

翌朝、パパに言われるままに体温を計ったが、熱はなかった。立つても痛くなかった。

ボクは朝食を摂ってから、パパと一緒に玄関前に停まっていた作業所から迎えにきたマイクロバスのところに行ったのだ。バスに乗ろうとすると、パパが、

「痛くないか」

とボクの顔を見ながら訊いたので、ボクは自分の足先を指差して、

「パパ、パパ」

と、笑顔で答えたのだ。ボクは笑顔を見た。パパは、昨日からの気落ちした顔ではなく、ボクと一緒にいる時にいつも浮かべる顔になって、

「ミヒヤエル、ありがとう」

と、言ったのだ。

今まで学校で過ごした時間と違って、作業所から戻ると、いくらか疲れも感じるようにもなったのだ。作業所からのマイクロバスから降りると、ボクは家にすぐに入らずに、玄関前をゆっくりと走る車を眺めたり、目の前を通る近所の人たちと握手を交わしたりするようになったのだ。ただそれだけでうれしく、疲れが取れるのだ。

もちろん、週末になると、パパとママと一緒に森の中を散歩したり、車で遠出をしたりして、リラックスもするのだ。その他にも、最近では自転車乗りがたのしくなり出したのだ。

家の玄関前で、パパが、

「さあ、ミヒヤエル、走るぞ！」

と声を出して漕ぎ出したので、ボクは、

「ヤアー、パパ」

と応え、ペダルを踏み出すのだ。

走っていると、知り合いの人たちが、「ハロー」と声をかけてくるのだった。そうすると、パパがベルを鳴らすのだ。ボクは走りながら、「あつ、タンデムだ！」の声を何度も聞いたな。

ボクは平衡感覚がよくないので、一人用の自転車は乗れないが、タンデムだったらサドルの上に座り漕ぐことができるのだ。

そのタンデムに乗って、週末は街郊外やネッカー川に沿って設けられている自転車道を三人で走るようになったのだ。

ボクの前で、ハンドルを握りながら、パパが言ったのだ。

「道の両側には麦畑が続いているな。ところどころに大きなヒマワリが咲いて、こちらを歓迎しているみたいだ。さあ、走り続けるぞ」

大人と子供用に作られたタンデムなので、ボクとパパにはピッタリなのだ。パパが前で、「もつと漕げ！」

と言うと、ボクは、

「ヤアー」

と声を上げ、力強くパパと一緒にペダルを踏むのだ。

パパはうしろにいるボクに何かと声をかけてくるので、それに応じるボクだった。

時々マ、マがボクたちの横に寄ってきて、

「まわりに映る景色、三人で共有ができていいわ」

と、笑顔で言うのだった。

タンデムに乗りはじめた頃は、家から少し離れた郊外の平らな道を走り回っていたが、少しずつ慣れてくるにしたがって、遠くにも行くようになったのだ。

ある時は、電車に自転車を乗せ、そこから走り出したこともあったのだ。右と左に赤いリングの実を見ながらの走行だった。ボクはゆったりとした気分になっていたな。

上り坂となると、パパが、

「もつと力を入れて！」

と、背を丸めながら声高に言うのだった。

ボクたちは汗をかきつつ登り続け、その時は周囲の景色をたのしむ余裕はボクにはなかった。でも、パパの息づかいが伝わってきて、それに合わせたりもするのもいいものだったのだ。

下り坂となると、風を切つての走りとなるのだった。その心地良さは、言葉では表現できないほどだ。ボクは、「ヒュー、ヒュー」と声を発してよろこぶのだった。これを体験したら、もう止められなくなってしまうのだ。

ボクはこのタンデムが気に入り、日曜日になると、自分のヘルメットを持ち出して、「さあ、走ろうよ」

と、パパに催促をするのだ。



「漕げ！」

「ヤアー」

うしろから、ママの「気をつけて！」の声が飛んでくるのだった。

パパとたのしさを共有することはいいが、そうでない場合もあるのだ。

最近、ボクはしばしば下痢をするようになったのだ。そこで、パパとママに連れられて家庭医のところを訪れ、下痢の原因を調べてもらったのだ。その結果、ミルクアレルギーとのことわかったのだった。でも、治療方法はなくて、お医者さんから、「食べ物に気をつけるしかないですね」と言われただけだった。

それ以来、パパとママは、ボクがバターやチーズやヨーグルトなどのミルク製品を食べないように気を配るようになったのだ。でも、作業所での昼食は多くの仲間と一緒に摂り、目の前のお皿に盛ったバターやミルクなどで作られた美味しそうな料理を目にすると、何でも口に入れてしまうボクなのだ。ママがボクたちを指導している人に、

「ミヒヤエルはミルクアレルギーなので、気をつけてください」

とお願ひしたが、それを徹底して守ることは難しいのだ。なぜなら、仲間が美味しそうに食べているのを見ているだけなんて、ボクには耐えられないのだ。自分も食べてしまうのだ。と、必ず下痢となってトイレに駆け込むのだ。間に合わない時は、パンツ内ですってしまうのだ。そのような日が月に二、三回はあるのだ。

そのあと、シャワーを浴びるのだった。作業所の人、そしてママやパパは大変に違いない。ママは、汚れたボクのパンツをいつも手で洗うのだ。何も言わずに。

パパもミルクアレルギーで、ボクと同様に二十代半ば頃から、チーズやヨーグルトなどの乳製品を食べると下痢になってしまったのだ。ボクが下痢をするようになったのは、パパからの遺伝なのだ。ママの消化器官を継げば、少しの黴菌でもびくとはしなかったのに。

パパとボクは同じ辛さを共有しているのだ。しかし、パパは自制できるが、ボクは自分でコントロールができない。でも、パパとママはそれを知っているので、ボクは悩みなどしないし、暗い顔にはならないのだ。

食べ物のことでは、このところうれいしことを、パパとするようになったのだ。それはパパと一緒に、いつも夕食を作るようになったことなのだ。

「ミヒヤエル、今日もまずお米を研いでからだ」

とパパに言われ、ボクは掌で米を握るようにして洗い、何回も水を替え、炊飯器にスイツチを入れるのだ。そのあと、パパが、

「冷蔵庫から卵を二つ取り出して、それをわってほしい」

と言ったので、力加減に気をつけながら器に入れるのだ。

「そのなかに、砂糖を入れてかき混ぜてほしい」

「ヤアー、パパ」

「フライパンが熱くなったので、それを入れて」

ボクは溶けた卵を少しずつ落としていくのだ。

「固くなったね。こんどはそれを包丁で細長く切ってほしい」

大きなまな板の上で、切るのだ。

「次はキュウリだ。卵と同じくらい大きさに切って」

「ヤアー」

パパは、ボクの手先を見ながら言ったのだ。

「なかなか手が器用だな。その調子で、次はアボガドとシヤケを切ってほしい」

「ヤアー」

「切り終わったら、今までのものをすべてお皿にのせて」

ボクは丁寧の一つひとつを盛っていくのだ。

「さあ、こんどは炊き上がったご飯に、酢と砂糖と塩を合わせたものを混ぜるよ」

「ヤアー」

「これで、でき上がりだ」

パパはそう言って、ボクと握手をするのだった。

テーブルにでき上がったものが並んだ頃、ママが仕事先から戻ってきて、三人での夕食となるのだった。

ボクは掌に海苔をのせ、その上に酢の香りのするご飯とアボカドと薫製のシヤケ、それにキュウリをそえて包むように巻き、わさびの入った醤油に、それをつけて口の中に入れるのだ。ボクたち三人の好物の手巻き寿司なのだ。

ママがボクの顔を見ながら、

「今日のお鮨は、とくに美味しいわ」

と言ったのを聞いたボクは、パパと目交わしてニッコリだ。

ボクはパパと一緒に夕食作りをしたからといって、ボクの下痢の回数が減りはないが、たのしい時間が増えたことは確かなのだ。ママが言うには、「ボクが食べている時に出る笑顔がいい」と。

## 十四章 仲間の命

ハウスマンをしているパパは、ボクと一緒にいる時間が多い。でも、パパは家のことだけではなく、まわりの出来事や社会にも目を向けているところがあるのだ。ボク、そしてボクの仲間たちの命を通して、社会全体を見つめているのだ。それを、パパと一緒に暮らしているとはよく感じたりするのだ。

たとえば、パパのところ、年に数回日本から障がい福祉に携わっている人たちが訪れてくると、パパはチュービンゲンから車で四十分ほど走ったところにあるマリアベルグという、障がいを持つ人たちが住んでいる大きな施設に必ず訪れるのだ。そこに、ボクはパパとママに連れられて、以前お祭りの時に行ったことがあった。

パパがその施設に行くと、日本から来た人たちに、先ず案内する場所があるのだ。そこに住んでいた六十一名の障がいのある人たちが、殺害されたことが記された石碑のところなのだ。その時、パパはその施設の歴史を日本の人たちに知らせようとして、自分で書いた文をプリントして手渡すのだった。

〈当時多くの障がいのある人たちが、『生きるに値せぬ生命』という名のもとに、殺されてしまった歴史がドイツにはある。その史実を知れば知るほど、これから問題となってくる

生命倫理について、自分は真剣に考えざるを得なくなってしまうのだ。

一九三九年、第二次世界大戦が勃発したと同時に、ヒトラーは、ある秘密命令を出して、精神病患者を中心とした心身障がいの人たちを抹殺する計画を企てた。それによって戦争中に十〜二十万人が殺害されてしまった。

この安楽死作戦は、綿密かつ組織的に実行されてしまった。それを可能にさせた社会的背景には、戦争という非常事態があったとはいえ、ヒトラーが政権を取ってからこの作戦を思いついたわけではなく、ヒトラーの青年期、もつと遡れば、一九世紀の後半から社会のなかで、それが少しずつ芽生えていたのだった。

それは、ダーウィンによる進化論の考えからはじまり、生存競争から自然淘汰が起こり、優生学への考えと進んで行き、有用性と業績能力による人間の価値序列化の考えに浸透していったからだった。

その背景には、第一次世界大戦に敗れたドイツでは、経済的困窮も加わり、多額の費用と労力がかかる障がいのある人たちを、経済的な視点から捉えようとする傾向があったのだ。

その一つの例として、一九二〇年の秋、ある障害者ホームの施設長がホームに住んでいる知的障がいのある子供たちの親たち二百名に、アンケートの手紙を送った。その内容は、次のようなものだった。

『あなたの子供に学ぶ能力がなく、治る見込みがないとわかった場合、その子の生命に痛みのない死（生命短縮）をもたらすことに同意しますか。親のあなたが、もし自分の子供の世話ができなくなった場合、たとえば、あなたが死んだときなど、子供の生命短縮に同意しますか。あなたの子供がかなりの身体的苦痛を伴ったとき、その子どもの生命短縮に同意しますか』

百六十二通の返答のうち、七十二%が生命短縮に同意すると親たちは返答したのだった。この施設長は、まさに反対の数字を期待していたのだったが、結果は生命短縮に同意する親が多かった。

当時の社会では、障がいのある人を、親からの遺伝が主な理由として挙げられていたこともあって、ヒトラーは政権を握った一九三三年、すぐに遺伝病子孫予防法を制定され、翌年から施行され、それによって三十万人以上の障がいのある人たちが、断種（男女の不妊手術）されてしまった。ヒトラーにとっては、有用性と業績能力のある人のみが健康な人間で、それ以外の人は抹殺されるべきものであったのだ。

では、マリアベルグ施設に住む障がいのある人たちが、どのようにして殺害されるに至ったのだろうか。

一九三四年一月に施行された断種法によって、マリアベルグに住む約二百名の人たちの多くが、強制的に不妊手術を受けさせられてしまった。遺伝的要素が強いとみなされた精神的障がいのある人の生殖機能を絶つことが重要だと、ヒトラーは考えたからだった。これを契機に、人工妊娠中絶の法および精神病のある人の結婚を禁止する法へと進んでいったのだ。

一九三九年に戦争がはじまるや、不治の病者には慈悲殺をもたらしてもよいとする安楽死作戦が秘密のうちに行われるようになり、その年の一〇月、早速ベルリンからマリアベルグ施設に、調査用紙が送られてきた。

そこには、障がいのある人の一人ひとりの名前と病状と労働能力達成が、どの程度なのかを詳しく書いて、ベルリンへ返送する旨が記されて、計画経済上の理由でと付け加えられてあったのだ。

それを受け取ったマリアベルグでは、計画経済上の理由で、その調査は必要なのだろうと思ひ、労働業績などをその本人の能力よりも低く記入したのだった。というのも、彼らが戦場、または軍事工場に送られてしまい、その結果、今まで彼らがしてきた施設内の掃除や洗濯や料理などを十分にできなくなってしまうと案じたからだった。これはマリアベルグだけではなく、多くの施設でも同様だった。

その調査用紙を記入し、ベルリンへ返送してから少し経った一九四〇年九月二一日、障がいのある人たちの名前が連記されたリストが、ベルリンからマリアベルグに送られてきた。

そのリストには、九十七名を他の収容所へ移動すると書かれてあり、でも、どこへ移動するかは告げられてはなく、くわえて今着ている服だけでよく、他の衣類は保管するようにも書いてあったのだ。親や家族には、一切知らせてはならないとも。しかし、このときにはすでに、障がいのある人たちが抹殺されているという事実は、各障がい者施設の責任者などには伝わっていたのだ。

マリアベルグの施設長も、リストに載った九十七人が、抹殺収容所へ行く候補者だと知っていた。そこで、彼は数名の人と一緒に、そのリストに連記された障がいのある人たちを救おうと、シュツットガルトの内務省に駆けつけて抗議をしたが、国の態度は硬いことがわかったのだ。

それでも、粘り強い交渉により、わずか三時間のうちに新しいリストが作成され、施設で労働できる者は死のリストから外されることになり、それによって死の候補者九十七名が五十六名になったのだ。

そして、死の抹殺収容所へ連行される一〇月一日、施設側の粘り強い交渉で、さらに十五名の方がリストから外されたのだった。しかし、四十一名はナチ当局の用意した灰色のバスで、抹殺収容所グラーフネックへと連行されてしまったのだ。

このときのマリアベルグで働いていた職員たちや同居していた人たちは、どのような心境に陥ったことだろう。想像を絶する。

わたし自身、重度の知的障がい者施設で働いていたこともあり、今はダウン症の息子ミヒヤエルと一緒に暮らすなかで、このときの場面を想像しただけで、怒りともいえぬ、深いむなしさと悲しさで、地に立っていることはできなかつただろう。

それから二ヶ月経った十二月三日、こんどは一人の医者がマリアベルグを訪れてきたのだ。死のリストから外された障がいのある人たちを、再度調べに来たのだった。

その結果、一二月一二日に再び三十名が連記された死のリストが送られてきた。そこには、明日移送バスが来るとも書かれてあったのだ。こんどはシュツットガルトの内務省に行つて交渉する時間が、施設長にはなかつた。

翌日、灰色のバスがマリアベルグに来た。ここでも職員たちは何とか交渉して、三十名のうち、十名を死のリストから外してもらうことに漕ぎつけることができたのだった。

彼らが連行された特別（抹殺）収容所グラーフネックは、マリアベルグから車で一時間行つたところであり、そこは以前お城でもあったのだ。そのところで、毎日数十名の人が

殺され、煙突からは絶えず煙が出ていたのだった。

殺された人は、名簿でわかっただけでも一〇五六四名にも及び、彼らのほとんどが南ドイツ地方の障がい者施設と病院から灰色に塗られたバスに乗せられ、グラーフネックに運ばれたのだった。

二十五人乗りのそのバスは、窓ガラスがペンキで塗られ、タオルなどで覆われていて、外からは内の様子をうかがうことはできないようになっていた。車内には、大抵運転手二名と二人の介護人、それに女性を移送する場合は看護師が付き添い、介護人たちは反抗をする人を押さえるための手錠を持っていたのだ。

収容所に着くと、彼らはまず長さ六十八メートルの簡単に造られたバラック小屋に入れさせられた。もし騒いだり落ち着きがなかったりしたら、すぐに注射が打たれ、裸にされ、そこで数時間待ったあと、自分の名前が呼ばれたら、バラック小屋内の小さな室に入るのだった。

その室には一人の医師と三、四名の人がいて、一つの机の上には一人ひとりに関する書類が置いてあり、検査されていた。が、検査されたといっても、書類に記されたことを確認する程度だったのだ。

それが済むと、すぐに他の小屋に移され、騒ぐ人にはモルヒネが投入され、真っ裸にされてから、

『シャワーを浴びるように』

と介護人から告げられて、毒ガス室に入るのだった。

ガスをひねる人は医者に限られ、二十分間密閉され、ガス室の隣は解剖室で、脳解剖の場ともなっていたのだ。

死体はすぐに焼却炉に運ばれ、何体も一緒に焼かれ、わずか数時間で灰になってしまったのだ。たしかに、バラック小屋には百のベッドがあったが、それらはほとんど使用されず、それに食事を摂る時間もなかったのだった。

そのようにして、マリアベルグに住む人の二百十名のうち、六十一名が生きるに値せぬ生命の名のもとに殺されてしまったのだ。

彼らが連行されてから数日して、着用していた衣類がマリアベルグに送り返され、家族には通知が届き、そこには適当に書かれた病名、たとえば、肺炎とか脳炎とか風邪、ひどいになると盲腸などで死んだと書かれてあったのだ。しかし、盲腸を以前手術した者が再び盲腸で死んだという例もあって、まったくでたらめに死因を記していたのだった。本当は、毒ガス、モルヒネ、ルミナル、餓死で殺害されていたのだったが。

このときの親の気持ちは、いかなるものだろうか。自分の息子や娘がこの世に生存していなかったように扱われ、死亡通知が突然届き、狂うばかりだっただろう。ある親が、マリアベルグ宛に次のような手紙を書いたのだった。

『愛する神様、一体このようなことが、なぜ可能なのでしょう。いつもにこやかで我慢強い我が子が、たちまちのうちにどこか知らないところへ連れ去られてしまい、私たち親さえも知ることができないなんて。世界が荒れ果ててしまったのでしょうか。わたしは病気になるってしまいました』

親の一部には、彼らが抹殺収容所へ連れ去られたと知っていた人もいたのだ。

この安楽死作戦が一時中止になる一九四一年八月までに、判明している人だけでも、幼

児や子供を除いて、ドイツ国内で七〇二七三名が殺されてしまったのだった。

一時中止になったとはいえ、この作戦はそのあとも継続され、犠牲者は少なくとも十万人以上と推定されたのだった。障がいのある人へのこの安楽死作戦は、六百万人とも言われるユダヤ人大量殺害への前段階だったのだ。

このナチ政権下による、健康的ではなく、価値も有用性もないと見られた障がいのある人の抹殺は、一九八〇年代になってようやく明らかにされはじめ、それ以前はタブー視され、公にされてはいなかったのだ。

一九八五年、ヴァイツゼッカー大統領が演説のなかで、第二次世界大戦中に殺害された精神病者および非人間的不妊手術について触れ、それがきっかけで、翌年の一九八六年に初めて、ナチ当時に断種を受けた人たちに、一時金五千マルクが支払われるようになったのだ。

安楽死作戦から五〇年経った一九九〇年には、多くの施設で、記念碑が建てられて、今まで公にされなかった当時の記録が公表されるようにもなり、人々へ語り継がれるようになっていった。

それによって、市民は、ナチ政権下の障がいのある人たちへの抹殺が、戦争中にだけ起こったことではなく、一九世紀後半からその芽生えがあったことを知ったのだった。

歴史が語っている意味は大きい。

ヒトラーによる安楽死作戦を、戦争を経験していない世代が知ることは大切だ。なぜなら、現代のようにバイオテクノロジー（生命工学）と遺伝子工学が発展するなかで、優生学的な考えである、美しく有用的な新しい人間が作りだされるようになったら、社会が混乱するからだ。それは、ナチ時代の安楽死作戦が示したように、社会が精神的混乱を迎えることになってしまうだろう。

そもそも、いろいろな苦しみ、悩みを各自が持っているからこそ、人間は他の人への思いやりが生じてくるし、そこに真のよこびと生きる意味を見出すことができるのだから。

一九八〇年代後半からドイツにも広がってきた、ある学者が考える生命倫理の思想に危険を感じるのだ。そこには、自己決定意識や他の人へ働きかけるコミュニケーション能力、および理性的能力を持つという『人格（パーソン）』の人だけが、生きるに値する価値を持っているとする考えがあるように見えるからだ。これこそ、ヒトラーのもとで行われた安楽死作戦に共通するように思えてならないのだ。

それは、障がいのある人たちへの敵対行為ともいえる。彼らだけではなく、これは認知症の人や意識がなくなった人間や胎児にも適用されてしまう。

以前、重度の知的障がいの人たちが住んでいた施設で働いていたわたしの経験からして、どんなに重い障がいのある人でも、他の人に働きかける能力を持っていると思っただけだ。それを感じないということは、その人が他の人に働きかける力が足りないからだ。人格ではなく、一人ひとりの命それ自体に、そうした働きかけがどんな人にも潜んでいると、わたしは思うのだ。

パパはプリントされた文を、日本から来た人たちに渡したあと、こんどは話すのだった。「この国で暮らしていると、『歴史が人間を、社会をつくっていく』という考えになるね。テレビなどでは頻りにナチ時代に何が起こったかを市民に詳しく放映し、学校では当時のことを隠蔽することもなく生徒に教え、議論をさせているからね。そのようにしながら、

この国は過去の克服をしてきたのだ。今のドイツの民主主義は、この暗い歴史から学んだところが多いと思うのだ」

さらにパパは続けたのだ。

「我が子のミヒヤエルと歩いていると、子供たちがよく彼を見つめるね。ダウン症特有な顔付きをしているからだろう。しかし、彼はそれにおかまいなく歩いて行くのだ。そればかりでなく、音楽好きな彼は、時々逢うストリート・ミュージシャンが奏でるメロディに合わせて、気持ち良さそうに身体を動かして踊りだすときもあるね。そうすると、まわりの人そしてミュージシャンも彼を見て、ニコニコするのだ。彼が自分の感情を素直に出し、まわりの人に安らぎを与えたと言えるだろう。」

しかし反対に、その情景を嫌う人もいるかも知れない。そのような人は、障がいのある人を身近に見慣れてないこともあつて、社会のなかにいる彼らの存在に気づいていないからだろう。

自分など彼らの存在に気づけば気づく程、関わり合えばあう程、そのことを通して社会のなかで、自分がどのように生きるべきか、との生きる意味を自分に問うことが多くあるね。とくに、障がいの重い人は自らの語りかけが少ないこともあつて、問いかけるこちら側の真摯な心が大切となってくるからね。

障がいのある人を見ると、とかくその人の全体があたかも障がいを持っているかのように捉えられがちだが、決してそうではないのを、わたしは彼らからよく学んでいるね。とくに、彼らの生きる力強さに畏敬の念を抱くときがしばしばあるね。

それは障がいを持つなかで、自分に出来得る限りの可能性を積極的に追及して、よろこび、幸せ、生きがいを見つけ、そこに生きる意味を見出している姿なのだ。わたしの友人で、脳性マヒの彼が、

『障害が、自分の生きる源泉だ』

と語ったことを、聞いたことがあつたよ。

その姿から、成績、能力、競争などの目に見える『価値』に重きを置く現代社会のなかで、目に見えないその人固有の生きる『意味』を、自分のこととして考えさせられてしまったよ。

とくに、現代は、自己の欲望を果てしなく無限に追い求め、他者との交わりのなかで、自分を制するコントロール力が弱くなってきているとも言えるだろう。そのようななかで、障がいを持つ人との出会いは大きな意味があるね。

先日、私が住むテュービンゲン駅で、次のような光景に出遭つたのだ。

車椅子に乗った両足のない人が電車から降りようとしていた。幾人かの人が援助していた。それを見て、思ったのだ。

彼は足の障害と共存して、自分のありのままの姿で、己をコントロールして生きている。彼からすると、非障害者といわれている人(私たち)こそ、障害を持っていると映っているのではないだろうか。何故なら、自分の欲望・自己中心的な己を強く持つ私たちは、それに振り回されているからだ。

毎日ミヒヤエルと暮らしている、彼を通して色々と自分を省みることが多くあるね」

このような考えを持つパパが傍にいて、ボクはうれいのだ。それに、ママが同じようなことをパパに語ったこともあつたのだ。

「わたしの姉は、あなたと知り合う二年前に三十八歳で生涯を閉じたわ。それはあなたにも話したことがあったわね。その姉は、七歳までは普通の子供のように成長していたけれど、それ以後急に筋肉の発達が止まり、こんどは反対に筋肉が縮まって不自由な身になって、車イスの移動となってしまったわ。でも、頭の働きは一般の人と同じだったので、学校を卒業したあとは本屋に勤めるようになったわね。しかし、体の痛みと車イスに乗っての仕事だったので、長く続けることはできなかったわ。姉はユーモアに長じ、チェンバロに似たスピネットを弾き、きょうだい仲はよかったわ。その姉と暮らすなかで、わたしは命の輝きと尊さを学んだわ」

パパは肯きながら聴いたあと、ママに言ったのだ。

「自分の場合も、障がいを持った人との出会いから、一人ひとりの命の尊厳を知ったね」その二人の会話から、ふとパパとママと一緒に行ったことのあるところがあった、やはりボクと同じような人たちが働いている作業所に訪れた時のことが浮かんだのだ。

チュービンゲンから、パパの車で三十分ほど走ったところに建っている大きな建物内に入ると、受付でひとりの人がボクたちを待っていてくれたのだ。その人から、パパとママはその建物についての簡単な説明を聞いたあと、三百席近くはありそうな椅子にボクたちは座り、これからはじまろうとする時間を待ったのだ。パパたちとここに来た目的は、この催しを見るためだったのだから。

今日の仕事を終らせた約二百五十名の人たちと一緒に、ボクたちは舞台上に視線を向け続けていると、幕が上がったと同時に、勢いのある音が流れ出したのだ。

それが一分も続いていると、ボクと同じ仲間の人たちが椅子から立ち上がって、体を前後に横に動かしたり、飛び上がったたり、手を強くたたいたり、音に合わせて自分の体を動かし出したのだ。二曲、三曲とテンポの速いポピュラーソングが流れ続けると、大半の人が椅子に座ってはいない。皆個性あるアクションで自分を表現し出したのだ。もちろん、ボクも手を上下に動かしてテンポに合わせてたな。

ママがパパに言ったのだ。

「舞台では、ドラムやキーボード、アコーディオン、エレキギター、バグパイプなどの楽器をもった十三名の人たちが力強い音を出して演奏をしているわね」

「マイクからは、張りのある歌声も聞こえるね」

その二人の会話を聞いていた、ボクらを案内してくれた人がパパとママに話したのだ。

「彼ら十三名のうち、十名は知的障がいのある人たちで、そのなかにはダウン症の青年も二名いますよ。あとのジーパンをはいた三名は、牧師と高等学校の校長、それに養護学校の先生なのです」

演奏をしている人も、聞いているボクたちも皆笑顔だ。ボクたちは、皆ありのままの自分を出しているのだ。常に、ホンネのままに生きているボクらだ。

以前、知的障がいのある人たちが住む施設で働いていたパパは、過去の経験が一気に蘇ってきたようで、目を潤ませながら横に座っているママに、

「ここには真の触れ合いがある。真の触れ合いがある」

と言い、ボクと同様に立ち上がって、ビートの利いた音に合わせて、両手をたたき出したのだ。



まわりの人たちは、リズムに合わせて手足を動かしたり、カップルでダンスをしたりしはじめたのだ。ボクもそうだが、皆体でよろこびを表現しているのだ。

「アンコール、アンコール」の声に押され、一時間半の予定を超過して何曲も演奏されていった。

パパは皆の様子を見ながら、足で地面を鳴らしていた。そのパパが、横に立っているママに言ったのだ。

「時間は昔に戻らないが、以前経験したことが新たな感動をもたらしてくれるね。これが自分の原点だ。過去から今に至る命のリアリーを体で感じるよ。ありがたい時間だ」

ママも、皆に合わせて両手をうち合わせ続けていたな。

## 十五章 グループホームへ

作業所から戻ったボクは、パパに連れられて買物に出かけ、そしてパパと一緒にキッチンに立つ日々となった。ただ、前と違うのは、おばあさんがいた頃になっていた夕食後のゲーム遊びが少なくなったことだ。

夕食を摂ったあと、ボクは後片付けをしてから、自分の部屋に行き、ボクの好きな日本とドイツの童謡、それにモーツアルトの曲を聞くのがたのしみとなっていた。

そのようなある日、パパとママ宛に一通の封書が届いたのだ。ボクが日曜日になると、時々行っていた障がい者センターからで、ボクたち仲間が自立を目指すことができるようなグループホームをチュービンゲン市内につくる計画があるので、関心があるようなら連絡してほしいとの知らせだった。

それを読んだママは非常に積極的だったが、パパはボクがまだその年齢に達していないと思ったようで、そう乗る気ではなかった。そのパパに、ママが、

「ミヒヤエルの行動を見ていると、これは一つのチャンスかも」と、言ったのだ。

この手紙が家に届く半年前、二十七歳になったボクは、障がい者センターが企画した一つのプログラムに参加したのだ。

それは、ボクたち仲間が夏休みで大学生のいない学生寮で、一ヶ月間住み、親から離れて、自立するための生活訓練だった。

それから三週間してから、ボクたちを指導してくれた人がパパとママに、「ミヒヤエルは、結構たのしんでいましたよ」と言い、さらに、

「ただ、髭剃りが出来ない、トイレのマナーが十分ではない、自由時間に何をしたらよいかがわからないなどの問題点はありましたが、親から離れての初めての経験にしては上出来でした」

と、話したのだった。

ママはそう乗り気でなかった。パパを説得して、二人揃ってその説明会に行くことになっ

たのだ。ボクも一緒だ。

センターまでの途中、助手席のママがパパに、「この説明会に、どのくらいの人たちが来るかしら」

と訊いたのだったが、パパはそれには答えずにハンドルを握り続けていたな。

夕方の八時前にセンターに着き、ボクたちは小ホールに入ると、七十名の人たちがすでに座っていた。ボクたちが椅子に腰かけると同時に、説明会がはじまったのだ。

先ずこのプロジェクトを推し進めているセンター長が、今までの経過を話し出したあと、「来年の秋にはグループホームをオープンするので、それまで親と専門指導者がよく話し合って、より良いものをつくって行きたい」

と、抱負を語ったのだ。

センター側と親との質疑応答となった。もちろん、ボクの知っている人やママはいくつかの要望を出した。特に、ママは、

「地域の人たちと共に仲よく暮らしていけるような、そんなグループホームにしてほしい」と、述べたのだった。

二時間の話し合いのなかで、パパが特に耳を澄ましたことがあった。それは、七十歳のある母親が三十八歳の娘について語った内容だった。

「わたしの娘は五年前に、隣の街のグループホームで月曜日から金曜日まで暮らすようになりました。最初の一年間は、土曜に自宅に帰り、日曜の夕方にホームに戻るのを娘は嫌がっていました。しかし、父親が病身なのを見て、自分はホームで暮らさねばならないとわかったのです」

さらに、その母親は語ったのだ。

「娘は今ではホームに戻るときは、『また来るね』と私たち親に笑顔で言うようになりました。これも娘の自立の一つなのです。三十八歳の娘が『ミニロックをはきたい』と希望すれば、以前のように、そんなものを着てとは言わずに、それを受け入れる親に、今はなっています。娘の思いを尊重し、認めています。娘が自立するようになれば、親も自立します」

これを聴いたパパは、その母親から勇氣と希望をもらったようになり、ボクがママとパパから離れて、そろそろ自立する方向へ進んでいるのを感じ出したようだった。

センターを出て家へ帰る途中、ママが車の中でパパに、

「障がいを持った人とその家族が何組も来て、討論に熱が入ったわね。それに、街の議員と行政官も出席していたわね。いい時間だったわ」

と言うと、パパは、

「そうだったな。皆の話しを聞きながら、ミヒヤエルの自立とは何なのかを、考えさせられたよ。でも」

と応えてから、続けたのだ。

「ミヒヤエルと二十七年間いつも一緒に暮らし、その彼が家にいなくなったら、風船に針が刺さって空気が次第に抜けていくような気持ちになるかも知れないな」

「それは、わたしも同じよ。でも、週末は家に戻ってくるし、彼はいつまでもあなたの子供なのよ」

それを聴いたパパは、ボクのほうに顔を向けてニッコリしたのだ。それに応じて、ボク

も笑顔で返したのだ。

それから半年して、ボクは家から歩いて十五分ほど行ったところにある、三階建てのグループホームに入居したのだ。

一般向きの三十世帯が暮らすアパートの一角にボクたち九名が住み、ボクは一階で、同居人は五十七歳と二十四歳だ。二階には女性仲間三人、三階には男性仲間三人。それぞれ階を違えてのホームなのだ。

ボクの部屋は十五平米の広さ。そのなかにベッド、ソファ、ダンス、机、椅子が置いてあるのだ。それらは、パパとママとボクとで家具屋で選んだものばかりだ。赤色系統が好きなボクなので、ソファとかけ布団の色は赤、カーテンも淡い赤なのだ。同居している二人とも、自分好みの家具を部屋に持ち込んでいるのだ。

トイレは二つあって、広い居間とキッチンがついていて、庭にはママや他のママたちが植えた花々が咲いているのだ。垣根の向こうには、ゆつくりと車が走っていて、どんな乗り物でも好きなボクは、それらの車を飽きもせずに見たりすることができるとのことだ。

街の中心地にあるホームなので、近くにはパン屋、肉屋、花屋、ピザ店、中華料理店、それに歩いて二分したところにスーパーマーケット、薬局、銀行などもあって、日常の生活に必要なものは何でも揃うのだ。

ボクがここで月曜から金曜日まで暮らしはじめた頃、パパとママと二十七年間一緒に住んでいたの、ここでの生活になかなか慣れ親しむことができなかったのだ。

ボクは自分の意思を言葉でなかなか表現できないので、移り住んだ最初の数ヶ月間、時々真夜中に起きては自分の部屋の電灯を、朝まで点けっぱなしにしたこともあったし、居間の椅子をひっくり返したりもしたことがあった。それに、日曜の夕方にグループホームへ戻る時、ホームの手前百メートルまで来ると、ボクの足は自然と止まって動かなかったのだ。

そのような時、ボクと一緒に歩いていたママが、パパに、「待つよ」

と、言うのだった。ボクと同様にパパも、ボクが週日は家にいないので一緒に夕食の料理ができず、また一緒に食事が摂れないので、フォークとナイフが止まり、涙がポロツとお皿に落ちる日が続いたようだった。

それを見たママが、パパに言うのだった。

「ミヒヤエルの自立のためよ。あなたがそのような気持ちでいると、彼にそれが伝わって自立していかないわよ」

「それはわかるけど、寂しいものはさびしい」  
そう声を絞り出して、パパはまた一つ涙を落とすのだった。

そのような日々から数ヶ月が経った頃、ボク自身に新しい変化が生じてきたのだ。それは、土曜日に家に戻ると、ボクと同居人とボクたちをお世話してくれる人たちの名前を、よく口に出して言うようになったのだ。その時は、ボクは上機嫌なのだ。今までそのようなことはなかったのに。

それに、グループホームに戻る際も、以前のようにボクの足は止まることもなく、テンポがより速くなってホームへ行くようになったのだ。ホームでの暮らしがたのしくなってきたからだった。

ボクたちを世話してくれる人たちに親しみを覚え出したし、六時半に朝食をして、作業所から戻る四時半からは、スポーツなどをしてくれる人と一緒に余暇時間を過ごし、木曜日の午後にはいつもパパが来てくれて、一緒に買物に出かけるし。それに、八人の仲間たちの誕生日には皆が集まり、一緒にテーブルを囲んでケーキやジュースを飲んだりもするのだ。年に二回、近くに住んでいる人を呼んでのパーティもあるし。学生ボランティアもよく来てくれるし。何しろたのしいのだ。

それからしばらくして、ボクの三十歳の誕生日となったのだ。

グループホームで暮らしている仲間八名とボクたちをお世話してくれる八名、それにボクのおじさん、おばさん家族を招くことになったのだ。そうになると、家に全員を呼ぶことは難しいとママは考え、もつと広いところであることを考えたのだ。

その場所は、街のマルクト広場に面した教会のゲマイデハウス（教区信徒会館）の小ホールだった。

パパとママとボクは準備に取りかかり、招待した人たちが集まって来たのは、日が暮れかけた六時過ぎだった。

夕食の支度は、ママが二日前からこの地方の郷土料理であるマウルタアシュを家で作っていたので、それを暖めるだけでよく、サラダと食後のケーキは、参加者が持つてくることになっていたのだ。

三十七名の人たちが集まったところで、ママが、ボクのおじさんやおばさんや従兄弟、それにグループホームの一人ひとり、それにボクたちをお世話している人たちを紹介したのだ。

少しして、パパが、壁に映し出されたスライドの画像を見ながら、ボクが生まれた浜松や六年間暮らした土浦の日々、そしてボクが十八歳の時に、パパと二人だけでリュックを背負って十八日間日本を旅したことや、毎夏アルプスの山々に登っていることなどを皆に語ったのだ。ボクが山道を一日十キロメートルは歩き、それを一週間も続けていたと話すと、皆驚きの声を上げたのだ。ボクは自慢気に肯いたな。

夕食の時間となり、ママが作った料理と何人かが持ってきたサラダを食べながら、グループホームで世話をしている人がビデオで撮った、ここ一年間のボクの生活ぶりを皆で観たのだ。

それが終わると、こんどは皆で歌を唄ったり、ゲームをしたりしたりの時間となったのだ。ボクは絶えずニコニコ顔だ。そして、各テーブルを回り、誇らし気に、皆からももらった贈り物を披露したのだ。

九時過ぎ、ボクと仲間たちがホームに戻る時刻になったので、最後は全員でボクのために歌を唄い、それもアンコールとなったのだ。ボクはうれしくてうれしくて、両手を上げて「やった！」とのポーズをしたな。

それを見たパパとママは微笑みながら、両手を打ち合わせ、皆も同様に拍手してくれたのだ。ボクは皆に見守られて、うれしかった。

ママが横にいた。パパに言ったのだ。

「ミヒヤエルは大分ホームに慣れてきたわね」

「そうだね」

「すこしずつ自立してきているわね」

「彼の自立か？」  
パパは思案顔で言ったのだった。

## 十六章 ボクの自立

誕生日から一年経って、ボクに一つの事件が起きたのだった。それは、パパが日本に行っている時に生じたのだ。

夜の十時過ぎ、ボクがグループホームの自室で眠っていると、作業所で見たことのある人がボクの部屋にノックもしないで入ってきて、眠っているボクを起こし、急にボクの顔を殴ったり、爪でボクの顔を何ヶ所も引っ掻いたりしたのだ。それに右手小指を骨折する暴力を受けたりもした。ボクは何がなんだかわからず、少しは抵抗したが、なされるままにしていたのだ。

彼はボクのグループホームの三階に住む友だちを訪れ、遅くなったから、学生アルバイトの人からすぐに家に帰るように言われ、カッとなって友だちの部屋を出て、一階のボクの部屋に来て、意味もなく暴力をふるったのだ。

ボクたちのグループホームには、夜の九時以後は専門の職員はいないし、当直者もない。ただ、アルバイトの学生二名が当アパートの独自の部屋に住み、夜中ボクたちを二度見回っているだけなのだ。そのうちの一人が、救急車を呼んだのだった。

ボクは大学病院に運ばれ、少ししてからママが家から駆けつけてくれて、ボクの左目周辺が青く腫れ上がったのを見て、びっくりしてボクを抱きしめてくれたのだ。

ママに連れられて、眼科やレントゲン科を廻ったのだ。ママは、警察官と学生アルバイトの人から、その時の状況に耳を傾けていたな。

そのあと、ママと一緒にグループホームではなく、家に四時過ぎに戻り、朝を迎えたのだ。

ママは日本にいるパパに、ボクに何が起こったかを話したのだ。そしたら、パパはあと二週間の日本滞在を取りやめて、急遽テュービンゲンに戻ってきたのだった。

パパは家に帰るやいなや、ボクの骨折した指と腫れ上がった顔を優しく撫でてくれたのだ。ボクはニッコリしたな。傍にいたママが、

「三週間ほど、グループホームではなく、家にいることになったわよ」とパパに言い、パパは大きく肯いたのだった。

翌日、パパはホームの職員であるフェーシングから詳しい事情を聴いていたが、なぜ二十三歳の人がこのような暴力をしたのかを知ることができなかったのだ。

それから二週間が経ったが、その人からも彼の親からも何の謝りの言葉がなかったのだ。パパはフェーシングに、

「その青年と親と話がしたい」と、申し入れたのだった。

四日後、パパ、ママ、その人と彼の両親、それにボクの世話をしてくれているフェーシングの六名で話し合いがあったのだ。ボクは再び彼と会いたくなかったのだ。一

緒ではなかった。

一時間半の懇談を終え、パパとママが家に戻ってきたのだった。

パパがママに言ったのだ。

「彼に、なぜミヒヤエルに行つて暴力をしたかを訊いたが、自分ではわからないと言つたな」

「そうね。父親が息子は精神病の薬を飲んでいて、高血圧でよくカツとなると話してくれたけれど」

「それにしても、彼は数回警察沙汰になる暴力をしたことがあるので、注意人物だと警察官にも知られているらしいね」

「そうね。親も大変だと思つたわ」

「父親は赤ら顔をして、アル中らしい話し方だったな。母親は一言二言のべたあとは、ずっと黙り続けていたね。病身のように見えたよ」

「かもしれないわ」

「彼はミヒヤエルに今まで謝っていないと言つたね。そのあと、きみが、『謝つたほうがいいわよ』と勧めたけれど、彼は黙っていたね。でも、すこしして父親が、『謝つたほうがいいぞ』と言つたら、彼は、『お詫びします』と私たちに言つたわね」

「そのほうがミヒヤエルにとつても、彼にとつてもいいわよ。これから、作業所で会つたりするのだから」

「最後に、きみが、『半年したら、また会いましょうよ』と言つたら、彼は背いていたね。フェーシングさんも、それはいい案だと賛成したし」

「あなたは、彼にセラピーを勧めたが、フェーシングさんが、『知的障がいを持ち、なお且つ精神病に罹っている人の場合、セラピーは難しいところもある』と話したわね。とにかく、彼は一年間ミヒヤエルが暮らしているグループホームに来てはいけないことになつたわ」

「そうだね」

そう言つたあと、パパは続けたのだ。

「ミヒヤエルは、何ごとも引きずらない性格なので助かるよ」

「でも、気持ちの切り替えが難しい一面もあるので、気をつけて彼を見ていきましよう」

この事件のことは、一ヶ月もすると忘れてしまった。とにかく、ボクはボクなりに、グループホームと家で頑張つて暮らしているのだ。

ボクがホームで生活すようになって、四年が過ぎた頃だった。パパが以前働いていた土浦にある施設の理事長から、

「横井さん、息子さんが暮らしているグループホームについて、職員の前で話してくれませんか」

と頼まれて、パパはよろこんで日本へ行つたのだ。

そして、十日間の日本滞在を終え、パパはチュービンゲンに戻ってきたのだ。もちろん、ママはパパがその施設で何を話したのかを訊いた。パパは、ママにその時に話した内容を語つた。

施設職員前で、パパはマイクロホンを持ちながら言ったのだ。

「息子のミヒヤエルは、グループホームで月曜から金曜日まで暮らし、土曜日の昼に家に帰り、日曜の夕方になると、家から歩いて十五分のホームに戻る日々となったのです。

グループホームで暮らしはじめたころの半年間は、日曜の夕方になってホームが近くになると、彼の足は止まり、前へ進まないことが何度もあったのです。しかし、しばらくすると、足取りも軽く、テンポも速くなってニコニコしながら、うれしそうに行くようになったのです。

その姿を目にして、グループホームでたのしく暮らしているのがわかったのです。一体、何がそうさせるようになったのだろうかと考えました。

彼は、はじめの半年間一緒に住む同僚の名前と、世話をしている人の名前をめったに口に出さなかったのですが、しばらくすると言うようになったのです。そのときの彼の顔は、いかにもうれしそうなのです。それを見て、またひとつ学んだようになりました。

一般に自立というと、身辺自立、経済的自立、職業的自立となりますが、それだけではない自立もあることに気づいたのです。

彼の住居には、あと二人の同居人がいます。三人の知的能力はさまざまで、年齢も六十二歳、三十四歳、二十五歳と異なっています。その三人が一緒に暮らす姿に、共生という語が当てはまると思ったのです。

障がい程度が違う三人が共に暮らすには、寛容を必要とするでしょう。そのようなかで、彼は同居人と世話をしている人に積極的に働きかけて、関係を築いていたのです。

仲間との繋がりのなかでたのしく暮らしている息子の姿から、人は社会的存在のなかで、よろこびを味わえるのだと思ったのです。他者との関係を持つことが彼の自立だと知ったのです。

彼の場合、身辺自立や目に見える自立は未だできていません。しかし、他者との関係を持つことで心が安定し、今では家よりもグループホームでの暮らしに、彼はよろこびを得るようになったのです」

パパは、職員の前でさらに話し続けたのだ。

「障がいを持つ親は、自分が亡くなったら、我が子の将来のことが心配で、死んでも死にきれないという考えが日本にはあるように思えるのですが、わたしがドイツに住み、また息子の同居人たちの親と話して知ることがあるのです。

ドイツでは、我が子にはその子の独自の個という生があり、それはどんな子にも見え、それを認め、尊重しているので、親が死んだあとは、日本ほどに心配してないように見えるのです。

そのように映ったのも、この国では障がいのある人には、経済的支援が整っているからのように、わたしには思えたのです。

日本でもドイツでも介護保険があります。ドイツでは介護を要するなら、高齢者だけに限らず、障がい者にも介護保険は適用され、介護をしている人には、年金をもらう年になつたら、わずかですが年金が出ます。つまり、介護が仕事と見なされているのです。その恩恵をわたしは享受しています。

それに、息子が暮らしているグループホームにかかる費用約三十数万円は、すべて公から出ていて親の負担はまったくありません。

また、ホームの財源がすべてガラス張りとなっていて、息子本人の口座手帳に支払われる額は、親が管理しているのです。ですから、親の責任と役割は、以前と同様に大きいものがあります。でも、それがプラスとなっているのです」

パパが語った内容を聴いたママは、パパに言ったのだ。

「ええ、確かにそうね。わたしの国では、社会が子供を育て、それは障がいを持つ子供にもいえるわ。と当時に、親は彼らを一人の個として見て、彼らは彼らなりに頑張って暮らしているし、それを見守ることがわたしたち親とまわりの人の役割よ」

それを聴いたパパは、再び施設の職員前で語った内容に戻ったのだ。

「とにかく、ドイツに住んでいると、家族を軸にして、社会が成り立っているのを感じるのです。それを支えているのが、ドイツの整った社会保障制度です。

最後になりましたが、今も常に思っている自分なりの思いがあるのです。それは、短い言葉で言えば、

『小さなよろこび、大きな幸せ』

です。そのことを自分の心に刻み、息子を通して、確かめている毎日です」

パパがママに語った翌日、パパは自分で発行しているチュービンゲン便りに、今回の日本滞在中で思ったことを綴っていた。ボクはこの便りの発行の際、切手を貼ったり、スタンプを押したりすることをいつも手伝っているのだ。

パパは書いた。

## 『個』を自覚してこそ

「何が違う。このままでいたら、生き生きとした暮らしが心底感じ取れないのではないだろうか」

日本に二週間半の滞在中、わたしは二回ほどマイクを持って、若者から高齢者までの人たちの前で、ドイツの福祉事情、特にミヒヤエルが暮らしているグループホームについての話をしました。また、毎日様々な人たちと語り合う機会も多くなりました。その時に思ったのが、左記のようなことでした。

そのような思いになったのも、長い間ドイツ社会にいて、『個』ということに深く意識を持ちながら、生活を送っていたからに違いありません。

妻はドイツ人なこともあってか、わたし自身多くのドイツ人とコンタクトを持っています。そのような状況にいますと、この『個』についてよく考えさせられるのです。

わたしは思うのです。

「どのような人にもその人独自の存在があつて、それは他の人が決して代わることのできないもの。そのことを自覚すればするほど、毎日の日常生活のなかで自然とよろこびが湧いてくるもの。よろこびは、自分自身に近づけば近づくほど大きくなる」と。

今のドイツの民主主義の礎になっているのは、人権を『個の権利』として尊重しているからのように映るのです。そこには、『自立』という「自己実現へ向けて、主体的に生き、実践をする」との考えが軸にあります。

また、実践をするからには、いくつかの選択肢から自分で判断し、責任も引き受け、多少の冒険も伴う中で行動することになります。それだからこそ、身も震えるようなよろこびを肌で感じ取ることもできます。今の状況の中で、尻込みをしないで生きて



いくことが大切なを知ります。

わたし自身は今もハウスマン(主夫)しながら、それを体験しているとも言えます。それに、自分の個を大切にしながら暮らしていくと、他の人の『個の尊厳』をも大切にしようになってくるのです。

更に、日本で考えたことがありました。それは、日本では至るところモノと情報が溢れ、過剰気味だったことです。そのような中で、自分で選択し、自分にあつたものを判断するのは大変なことだと。人の不幸は欠乏から生じるのではなく、過剰によって起こるのではないかとの思いになりました。それに、携帯、スマホを歩きながらも、また電車の中でも操作しているのを目にしていると、

「これで果たしていいのだろうか。人との真の触れ合いができるのだろうか。人間は社会的存在だし、これで触れ合いのある社会となっていくのだろうか。人との関係を浅く広くとはなっても深くはなれずに、自分の心の内をこの触れ合いのなかで表現していけるのだろうか」

と、疑問視したのです。わたしの家族は携帯もスマホもない暮らしをしているから、そのような考えに至ったのかも知れませんが。

もう一つ、考えを巡らせられたことがありました。それは、若者たちが何となくクリスタルのように映ったことでした。自分独自の『個』を表現してないように思えたのです。ドイツに住んでいる青年とは違うように見えたのです。いつもまわりを、そして見られる自分を気にしているように映ったのです。

そのような青年に言えることは、生育する過程で、家庭での父親の存在意義を感じ取っていなかったからではないでしょうか。日本の父親は、家庭の中で自分の存在意味をしっかりと捉え、それにパートナーシップをしっかりと築き上げる必要があるのではないかとの思いになったのです。

親同士が仲良くハッピーなら、子供もしあわせを感じ、自分の将来に肯定的なものを見出すのではないのでしょうか。女性と子供が、伸びやかに穏やかに暮らしていくためにも、父親の意識が大切だと思つたのです。

それに日本では地域創生、少子化問題、女性の地位向上との問題などが問われていますが、そのどれにも関係しているのが男性の意識変革だと思つたのです。

男性そして父親が家庭生活及び地域生活の中で、居心地良い場を創っていけば、女性と子供が暮らし易い社会となるのではないのでしょうか。

働いてお金と地位を得ても、それがその人の幸せになっているのか。それよりも、その人の独自の存在が「在る」ということに生きる意義があると考えます。一人ひとりが生きる中で共感し合うためにも、『個の尊厳』を自覚することが大切に思えてなりません。

そのような考えを持つ男性が多くなっていくためにも、国や政治家は長時間働かせないシステムや社会保障制度を充実させてほしいものです。

三十七年間日本で暮らしていたわたしなので、祖国にいと、その社会が気になるのです。

## 十七章 ママの願い

ボクは家の中にいる時は、パパと一緒にいる時間が多いのだ。と同様に、外の社会へ向けてもパパと共に活動するときがあるのだ。その日が近づいてきたのだ。

パパがボクと一緒に作ったカレーライスを食べながら、ママに、

「外では雨が降っているけれど、明日はぜひ晴れてほしいな」

と言うと、ママもスプーンを口に運びながら、

「そうね。天気予報では、明日は一日中曇りらしいわよ」

と、応えたのだ。その二人の会話をボクは聴きながら、大好きなカレーライスを食べていたのだ。

それも終り、ボクはママと一緒にキッチンで後片付けをはじめたのだ。それが済んで居間に入ると、パパが何か作業をしていたな。ママは、パパの傍でその作業に手伝い出したので、その二人の様子を見ていたのだ。

パパとママは日本の藍染の布地からいくつかの文字を切り取り、それを長さ三メートル幅一メートルの白い布に縫いはじめたのだ。ボクには難しい作業なので手伝いはしなかったが、二人の手の動きなどをしばらく眺めていたな。そのボクに、ママが言ったのだ。

「もう十時になったから、ベッドに入りなさい」

翌朝、起き出し、カーテンを引くと、雨は止んでいたが、灰色の空だった。

昨夜は遅くベッドに入ったのだろう、ママとパパは眠たそうな顔で朝食を摂り、ボクたち三人は八時半に家を出たのだ。パパとママは、手押しワゴンの上にガスボンベ、風船、折り紙、それに印刷物などを乗せ、教会前広場へ向かい、ボクも押すのを手伝いながら広場へ行ったのだ。

毎年の八月六日、ボクはパパとママといつもこの広場に来るのだ。日本からドイツに移り住んでから、それはずっと続いているのだ。パパはこの八月六日には、思い入れが深くあるのだ。ドイツから広島原爆記念館に三回ほど訪れているパパだ。

これからチュービンゲンで平和運動をしているドイツ人のグループの人たちと日本人数名が一緒になって、教会前広場で鶴を折り、それを道行く人に手渡したり、また一緒に折ったりしながらの、平和を訴える活動だ。

それに加えて、今年はママの案で、色とりどりの風船の下に、

《広島・長崎を再び繰り返してはならない》

《戦争が終わって市民の苦しみがはじまる》

《核の無い世界を求めて》

などの平和の願いを書いた小片をつけたり、また風船を飛ばそうとする人が、自分独自の平和への願いを書いたりして、それを空へ放そうとしたのだ。

手伝いに来てくれた二組の日本人家族と数名のドイツ人、それにボクたち三人は、机や椅子それにパネルなどを教会堂から広場の中央へ運び出したのだ。

それが終わると、ちょうど十時を知らせる鐘の音が教会の塔から鳴り響いたのだ。と、警察官二人がパパとママのところへ寄ってきて、催し物の許可書を見せてほしいと言われ、パパとママが一週間前に市役所に提出した集会の証明書を提示したのだ。それを見た、警

察官は去っていった。そのあと、パパは皆に、

「さあ、これから一時まで、道行く人たちに平和を訴えるのだ」と、声を上げたのだ。

パネルには、パパが広島市の平和記念館啓発担当室で手に入れた大きなポスター八枚が貼ってあり、パパとママが作った長さ三メートルほどの横断幕が垂れ下がっていた。そこには、『広島に原爆が投下された日』と記されてあったのだ。その前で、パパとママは日本人家族とドイツ人数名とで椅子に座り、鶴を折り出したのだ。

ボクは、パパが作成したビラを道行く人たちに手渡すことをはじめた。

そのビラには、被害者意識だけでなく、なぜ原爆が落とされるに至ったかなども書かれていて、加害者意識を過去の歴史のなかでしっかりと見つけて行くことが、未来に戦争のない平和な世界を創り出すことにもなるのだと、パパはママに話していた。

また、地元の平和グループの人たちが書いた『ドイツは世界のなかで、アメリカ、ロシアについて第三番目の武器輸出国なので、それをストップしなければならぬ』とのビラを手にとって、道行く人たちに配ったのだ。

前日の新聞に、パパたちのことが記事に載り、それを読んだ多くの人たちがママたちに話しかけ、また街の中心地にあるマルクト広場では朝市が立っていたので、ボクたちの前を横切る人も大勢いたのだ。それに、夏休みなので子供を連れた家族がカラフルな風船を見て、寄ってくるのだった。

パパやママたちはドイツ人に鶴の折り方を教えたりしていたので、ボクたちのまわりはとても賑やかだった。それに、戦争体験を語りたりするドイツ人や、さりげなく寄付をする人もいたのだ。

十一時と十二時には、皆が椅子から立ち上げて、平和を願う黙祷をしたのだ。ボクも皆と同じように目を瞑ったのだ。日本人とドイツ人、それにアメリカ人も一緒だ。ちょうど教会の鐘が数分間鳴り響いたのに合わせての祈りだった。

最後に、参加した人たちが十二名が手に風船を持って、一斉にそれを空へ向けて放すと、風船は空に吸い込まれるようにして飛んだのだ。それを見ながら、パパたちは、

「響け、私たちの願い！」  
と、声を上げたのだ。

ボクたちは後片付けをしてから、歩いて三分もしない家まで行き、先ほどまで一緒に活動をしていた九名と、ボクたち家族三人はテーブルを囲んでの昼食となったのだ。そのなかには、机や椅子を運んだり、片づけをしたり、風船にガスを注入していた日本人の中学生もいたのだ。

皆でテーブルの上ののったサラダ、チーズ、ソーセージ、それにピザを食べながら、戦争のない平和を創って行くにはとの話し合いになったのだ。

パパが言ったのだ。

「一九六七年、日本政府が公表した非核三原則、『核兵器をもたず、つくらず、もちこませず』を今も国是としている私たち日本人だ。戦争を避けるためにも、広島と長崎に落ちた原爆のことを、さらに世界に伝えていかねばならないのだ。それと同様に、加害者体験もしっかりと伝えていかねばならない。そうしないと、お互い真の信頼関係が構築できないからだ」

話し合いの終り頃、ボクは皆から、

「ビラを歩いている人たちに百枚以上手渡ししてくれて、ごくろうさん」

との褒美の言葉をもらったのだ。ボクはニコニコ顔で、自分でも手をたたいたのだった。

「雨が降らずによかった」

と、何人かが言っていた。

二時間の昼食を終え、皆それぞれの家に戻ったのだった。

そのあと、パパとママは居間のソファーに腰掛け、ボクはテーブルの上で好きなパズル合わせの時間となったのだ。

パパがコーヒーを飲んでいるママに話しかけたのだ。

「今回、日本の中学生がいてよくやってくれたな。若い人に、このような活動をしながら世界平和を伝えることができたと思うと、それがとてもうれしいよ。若い世代に、この広島・長崎に投下された原爆をどうしても語り継いで行きたいな。世界に核戦争を起させないためにも。世界に戦争の恐ろしさを知らせるためにも」

「そうよね。それは大切なことだね」

そう言って、ママはまたコーヒーを一口飲んだのだ。パパは一人でパズル合わせをしているボクのほうに顔を向けたあと、ママに言ったのだ。

「今年も、ミヒヤエルはニコニコしながら一緒に行動してくれたな」

「彼はどこまで理解しているかわからないけれど、笑顔でビラを多くの人たちに手渡していたわね」

「ミヒヤエルのような笑顔をすべての人がもてれば、世界が平和になるだろうに」

そう言ってから、パパはママの目を見ながら話し出したのだ。

「今まで広島に三回行き、その度に人間一人ひとりの尊厳と命の重さをひしひしと感じたのだよ。亡くなった人たちのことを思い、また障がいのある人たちと出会い、我が子と暮らしていると、そう思わざるをえないのだ」

それを聴いたママは、

「それは、わたしも同じよ」

と言い、ボクのほうを見てニッコリしたのだった。二人ともソファーから立ち上がり、ボクの傍に寄ってきて、ボクがなかなかできないところを手助けしてくれて、六十片のパズル合わせが完成したのだ。

翌朝、パパは新聞を読み終えたあと、ママに言ったのだ。

「昨日の私たちの活動が、カラー写真入りで新聞に載っていたよ」

その記事を、ママは読み出した。それを見た時、パパが初めて広島に行き、家に戻るや、広島と長崎で経験したことをママに熱い言葉で詳しく語ったことが浮かんできたのだ。

パパはママに、その時のことを語ったのだ。

「広島に住んでいる知人宅で荷を降ろしてから、すぐに平和公園平和公園へ路面電車で揺られて行ったのだ。電車から降りて少し歩くと、無残な姿の原爆ドームが見えたね。そこでしばらく立ち尽くしてから、原爆死没者慰霊碑へ向ったのだ。

碑には、

『安らかに眠って下さい 過ちは繰り返しませんから』

と刻まれてあったよ。その前で手を合わせ、今年から開館した平和祈念館に行ったのだ。

館内に入ると、壁にかかっているパネルに『：国の誤った政策により：』と記されているのを読み、深い溜め息が出たね。

一九四五年八月六日午前八時一五分に落とされた一つの原子爆弾によって、その年だけで約十四万人が亡くなったのだ。そのことを思いながら、館内を歩き出したのだ。

死没者一人ひとりの名前と遺影が映っているコーナーに足を踏み入れると、大きな画面に、被爆した幼児からお年寄り一人ひとりの顔と姿が、絶えまなく映し出されるのを目にしていると、十四万という数では計れない一人ひとりの命の重さを感じ、胸が締めつけられそうになったよ。ひたすら映像に目を注ぎ続けたね。

次は、被爆した人の体験が集められているコーナーに入ったのだ。ノートに書かれた文章に目を落していると、鼻をかまざるをえなくなったね。一瞬にして廃墟となってしまうた広島市。半世紀が過ぎた今も、被爆者は健康に不安を抱えているのだよ。まわりを見回すと、中学生と高校生の団体が多いのに気づいたね。皆、真剣に被爆記を読んでいるのだ。彼らも、文字が重なっているに違いないと思ったね。

平和記念館を出てから、長方形型の平和記念資料館に行ったのだ。入口前では、中学生らしい生徒たちが整然と並んでいたね。五十円を払い、館内に入ったのだ。

当時の生々しい惨状の写真と解説を目にしていると、胸が痺れてきたよ。こんな惨いことがなぜ許せるのだ。これを再びどのようなどころでも起こしてはならない、これは戦争で勝った負けたをとおりに越した、私たち人類への挑戦だと思ったね。

外国の人たちもいたね。彼らもこの惨状を見て驚いたに違いない。原爆の惨慄を知った彼らに、

『国に帰ったら、一人でも多くの人にこの惨状を伝えてほしい』

と、切に願ったよ。そのことが、平和運動の源となると信じたからね。

館を出て平和公園に架かっている橋を渡っていると、先ほど見た被爆者の絵が浮かんできたね。

『水を下さい。水を下さい。助けてください…』

下から叫ぶような声が、聞こえてくるのだよ。立ち尽くしながら、流れ行く水を眺め続けたね。私たちの代わりに亡くなった人たちの声だ。「すみません」と言葉が口から洩れたね。

翌朝ベッドのなかで一筋の涙がツーンと耳の方へ流れ落ちたのだ。悲しみとも怒りともいえぬ、人間が生んだ愚かな行為への涙だったね。

広島に三日間滞在してから、こんどは長崎へ向かったのだ。長崎駅近くのビジネスホテルで荷を下ろしてから、早速原爆資料館に行ったのだ。

館内に入ると、広島と同様に中学生と高校生の姿が多かったな。外国の人たちの姿を見かけないと思っていたら、前にいる生徒たちは韓国の人たちだったよ。長崎でも、多くの朝鮮半島の人たちが被爆していたのを知ったね。しばらく館内を歩いていると、鼻で呼吸するのが難しくなってきたよ。

出口前に置いてあった感想ノートには、

『戦争は恐ろしい。戦争をする人はバカだ。平和をつくっていかねば』

と、生徒たちが綴っていたな。誰でもこの被爆の惨禍を目にすれば、平和を求める気持ち有一段と高まるのは確かだよ。

二時間ほど館内にいてから、平和公園内を巡ろうとしたのだが、日が傾きかけてきたので、ホテルに戻ることにしたのだ。

次の日、朝食を摂ってから、路面電車に乗って平和公園へ向ったのだ。

電車を降り、花で囲まれた石段を上り切ると、高さ七メートルの噴水が目の前で飛沫を上げていたね。そこを通り過ぎると、長崎の鐘が目に留まったのだ。この鐘が地球上の至るところへ、平和の音として響き渡るようにと両手を合わせたよ。

さらに行くくと、高さ約十メートルの男性が座っている平和祈念像前に出たのだ。像の右手は上方を指して原爆の脅威を、左手は水平に伸ばして平和を意味しているという。目を閉じると、昨日資料館で見た様々な惨状を撮った写真が浮かんできたね。

一九四五年八月九日十一時二分、ここであつという間に七万以上の人が倒れたのだ。戦争を早く終わらせたい、ソ連よりも有利に立ちたいとアメリカは考え、原爆を落としたのだよ。この時は、もうドイツとイタリアは降伏していたのに。でも、これによって、日本の領土が分断されずに済んだのかもしれないな。日本は、なぜ戦争に走ったのだと考え続けたよ。

臉を開けると、四、五羽の鳩が像の左手の上に止まっているのが見えたね。それを眺めながら、あの鳩たちも当時被爆した鳩の子孫かもしれないと思つたよ。被爆した人の子孫のなかには、親や祖父母が原爆に遭つたことを話すのを控えている人もいると言われているのだよ。次の世代に影響が出るかもしれないという不安が残っているからだろうな。その心の内は計り知れないのだ。戦争が終わってから、市民の心の苦しみがはじまるのだと思つたよ。

再び歩き出すと、原爆落下中心標に立っていた大きな母子像前に出たのだ。

母が死んだようになっていいる子を、腕のなかに抱えている慰霊碑のような像だったな。その子が心の奥から、

『お母さん、お母さん』

と、呼びかけているように映つたね。母はわが子の声を聴き、何もすることができずにいる姿なのだ。母ほど優しく、信頼できる人はこの世にはいないというのに。しばらく眺めていると、涙が出たきたね。

翌日、長崎を発つた列車の車窓に映る佐賀平野の広々した景色を眺めていると、人と人とが殺し合う戦争が、この世界から消えてほしいとつくづく思つたよ。そのためにも、広島と長崎の被爆の惨状を世界の人に、語り伝えなければならぬと決心したね。亡くなった人たちの命が、自分の心に入り込んでいる今、それをしなければならぬと意を強くしたよ。

毎年八月六日、テュービンゲンの教会前広場前に立たねばと思つたのだ。戦争のない世界を創っていくためにもね」

ママはパパの語ることに耳を傾け続けたあと、

「わたしも立つわよ。ミヒヤエルも一緒よ」

と、パパに言った。さらに、ママは続けたのだ。

「いつか、わたしも広島へ訪れてみたいわ」

そのママの望みを、パパは未だ叶えさせてあげていない。ママの夢が実現となるように、パパ、頑張つてほしい。

## 付章 あるがままの、パパの日本旅

パパは二年に一回の割で、日本に行き、親戚の人たちや友人、知人に会ったりしているのだ。そして、時間をつくっては、日本の各地を歩き廻ったりもしているのだ。その旅模様をノートに書き、帰ってきたら、パパが発行しているテュービンゲン便りに、その内容を載せたり、ママに伝えたりもしているのだ。パパの綴った、その紀行文。

### 草津温泉

「ドイツに帰るまでにはまだ数日ある。よし、旅に出よう」

高崎駅から二両の普通電車に乗った。四十分ほど揺られていると、広い平野にポツンポツンとかわらぶき農家が見え出してくる。その庭先には、赤オレンジ色をした柿が実っている。懐かしい風景だ。遠方には秋の色となった山々が望め、その素朴な光景に、心は緩んでくるのだった。

自然と人間が共存する場を里山というが、まさにそれだ。時々車窓に映る自分の顔と、ゆっくり過ぎ去っていく景色が重なり、和となるような気持ちになってくる。

電車が人気のない駅にガタンと停まるたびに、中・高校生が一人二人と降りていく。旅行者が数名座っているだけとなった。陽は山の端に傾き、空がいくらか赤みを帯びはじめた。

暗くなり出したころ、電車を降りてバスに乗った。いくつかの山村を走り抜け、二十分ほどで目的地に到着。これから二泊する宿を探せねばならない。ドイツから背負ってきたリュックを担ぎ、歩き出した。

外は暗くなっていたが、街灯の明るさで歩くには不自由はない。が、標高一二〇〇メートルの地なので、いくらか寒さを感じながら歩いていった。と、路地に民宿と書かれた看板を見つける。

玄関戸をガラガラと開けると、おかみさんらしき人が現れた。

「二泊したいのですが、空いた部屋はありますか」

「ええ」

「温泉風呂もあるのですよね」

「もちろんです。掛け湯ですよ」

「それはいい。いくらですか」

「素泊まりで四千円です」

それを聞き、迷わずここに決めた。

おかみさんに案内され、幾つかの部屋を通り過ぎ、「あさま」と記された部屋に入った。八畳の間には、小さなコタツと小さなテレビがあるだけ。おかみさんが、

「お客は一人だけ。いつでもお風呂に入れますよ」

と言つて、部屋から出ていった。

荷を降ろしてから、少し冷えた体を暖めようとして、早速風呂場へ向つた。

十人は入れそうな湯船に一人浸かっていると、額から汗がにじみ出てくる。身も心も解れ、口から歌が出てくるのだつた。

「草津よいとこ 一度はおいで どっこいショ……」

湯治場でも知られ、日本一の湧出量の多い草津温泉。四十二度の湯船を出たり入ったりしてから、部屋に戻つた。

蒲団は敷かれてあつた。湯治の宿なので、トイレ・洗面所は共同である。建物全体が木造りなので、山小屋をふと想い出した。また、灯油の暖房なので、部屋内は石油臭かつたが、これも懐かしさと呼んだ。でも、コタツ一つでも十分に暖かいと思い、石油ストーブを切つて、寝る仕度に入つた。

夜中、綿の詰つた重いかけ蒲団だったので、目が覚めてしまう。押入れにあつた軽い蒲団を二つ重ね、夜を明かすことになつた。

早朝、起き出してから洗面所の冷たい水で顔を洗い、朝の散歩に出かけた。

黄色のイチヨウの葉、虹色のもみじが路地の上に横たわっている。朝の爽やかな風にそよぐ葉ずれの音が聞こえてくる。街はまだ眠っているのか、人影はない。心身ともよろこび合っているのがわかる。

一時間半ほど人気のないところを歩いてから、街の真ん中にある湯畑へ向つた。

次第に温泉の湯独特の匂いがしてくる。と同時に、湯煙が見え出した。人の数も多くなつて、中国語をしばしば耳にするようになった。彼らは盛んに写真を撮つて、満足そうな顔を浮かべている。

九時すこし前、近くで湯もみと踊りの実演があるとのことを知り、その館に向つた。

女性たち九名が、入場料を払つた二百名近くの見学者の前で、湯もみの動作をしながら「草津よいとこ……」を歌い出した。それに目を瞠るものをそう感じなかつたが、そのあとに簡素な和服姿での踊りには、「やはり、いいな」と思いつつ、魅入つていった。

朝食を摂ろうとして、湯畑の近くにあつたコンビニで一パックの炊き上がった冷えたご飯と納豆だけを買ひ、ご飯をレンジで暖めてもらひ、湯畑のところに戻つた。そして、木の椅子に腰かけて、湯気が立ち昇る白いご飯に、納豆二箱をかけて食べ出した。

これが旨いのだ。一流のホテルでのレストランで食べるよりも、何と美味しいことか。口の中で、ご飯と納豆の糸が微妙に混ざり合う味。納豆を食べて、日本人を知りたいと思つた。

前を通る観光客のなかには中国人もいて、こちらにシャターを向けている。そんなことにお構いもなく、この贅沢な味を堪能続けた。納豆三昧だ。

宿に戻り、コタツのスイッチをつけてからすこし横になると、足全体がホカホカし出してウトウトとなつた。

目が覚めると、三十分が過ぎていた。こんどは日本の情緒を誘う露天風呂へ行くことにした。おかみさんから場所を聞き、そこへ向つた。途中、至るところで観光客の姿を多く見かけようになつた。その中には、浴衣姿の男女もいた。

目指す大滝乃湯に行き、九百円を払つて内に入つた。



広い湯船の大浴場ですこし体を沈めてから、木造づくりの外にあった露天風呂に入った。前に映る木々の秋の葉を見ながら、溢れ落ちてくる湯の中で身を委ねていると、心の弛緩を感じ出す。只管浸っていた。

そのあと、建物内にあった合わせ湯というところで、三十八度から四十六度の異なる熱さを順に巡っていく入浴法で四十五分ほど過ごしていた。まさに温泉三昧だ。日本人でいるよろこびだ。

この館を出ると、お腹が減っているのがわかる。そこで、先ほどご飯と納豆を買ったゼブンイレブンで見かけた、大好物である助六寿司を食べようとして、そこへ行った。

さいわい、その寿司は棚に一つ残っていた。それを大事そうに抱え、店を出た。

十分もすると、至るところ紅葉した木々が並ぶ西の河原公園である。ベンチに腰かけ、先ほど買った助六寿司を食べはじめた。酔の効いたイナリ鮎、それに太巻きに入っている卵焼き、味のついた椎茸、かまぼこなど、口に入れるたびに胃がよろこびあっている。贅沢な時間だ。これがぜいたくと思えるような、今の自分の生活様式に感謝だ。

食べ終え、また歩き出すと、露天風呂へ至る小道となった。傍を流れる小川からは、湯気を立てながら温泉が湧き出ている。二時間前に他の露天風呂の湯に浸っていたので、体が意外と疲れている。近くの山道をゆっくり歩くことにした。

晴れて抜けるような青空の下、人影がほとんどない土道をゆっくりと登りはじめた。秋風に揺れながら、紅葉した葉が時々ひるがえっている。若いころによく見かけた秋の素朴な風景だ。アツ、赤い葉がまた風に舞った。

サクサクの音を耳にしながら歩を進めていると、忘却していた日本への回帰が心に溢れてくるのだった。歩き続けた。

陽が山の奥に没しはじめたので、帰ることにした。

再び公園に戻り、近くにあったそば処で、あたたかい山菜ソバを食べようと入った。

さすが手作りだけあって、麺に腰があって旨い。最後の一滴まで汁を飲み干してから、店を出た。

宿に向う途中、スーパーマーケットの看板を目にする。何かを買う積もりはなかったが、足が自然とそちらへ向った。

サンマ一尾百八十円だ。それを眺めていると、熱く焼いたサンマに醤油をかけた時にジーツと発する音が耳元に聞こえてくるのである。溜め息が漏れた。

みかん六つ、それに温泉饅頭二つを買い、スーパー店を出ると、外は夕闇に閉ざされていた。

宿の玄関戸を開けると、おかみさんが奥から出てきて、

「主人もいます。掘りコタツに入りませんか」

と、誘われたので、

「ええ、それはいいですね」

と答えて、ご夫妻と話すことになった。

六畳の間にはコタツがあった。そこに足を投げ出した。と、体全体が暖まってくる。

「この宿をどのくらい前から営んでいるのですか」

「以前、わたしたち夫婦はスキーの板と靴を貸し出していたのです。もう二十年前のことね。今はこの民宿を主人と二人で経営しています」

ここでの今と昔の暮らしについて、同じ団塊世代のおかみさんが生き生きとした声で語り出した。隣には優しくそんな旦那さんがニコニコした顔でいる。今もこの歴史を引き継いでいる二人の話に、耳を傾け続けた。草津温泉街の歴史の声だと思った。

笑いの入った会話は実にいい。旅のたのしさは、自分と違う文化や風土に接しているなかで、様々な人の人生観や価値観に出合うことだ。それによって、自分の感性が磨かれて謙虚になり、自分が忘れかけていたものを再び思い起こさせてくれて、感動したりするのだ。

ご夫妻と二時間ほど談話してから、冷えきった部屋に戻り、コタツに入りながら、先ほど買ったミカンと饅頭を食べ出した。コタツに足を投げながら思った。

「明日の朝、この宿の風呂に再び入り、掛け湯をかぶろう」と。

## 宮沢賢治の地

朝九時、東北新幹線の新花巻駅に到着。早速歩き出した。

人と車の姿はない。水を張った田圃には、青みがかった数センチほどの苗が縦横に規則正しく並び、あぜ道には、枯れたタンポポと菜の花が太陽の光を浴びている。二階建ての農家の屋根が所々に見え、どの家々も大きい。庭はきれいに手入れされて、様々な花が咲き、それがあたりの自然と調和しているのである。このような風景に出会いたかったのだと思いつつ、歩き続けた。

二十分しても、目的の建物が見えてこない。道を間違えたと思い、畑で野良仕事をしている人に声をかけた。

「宮沢賢治記念館へ行きたいのですが、この道を歩いて行けば、いいですよ」

「違いますよ。反対の方向ですよ。新幹線の向こう側に記念館が建っていますよ」

今来た道を引き返すことになった。回り道となったが、朝の新鮮な大気を吸いながらこの爽やかな気分。足どりは軽い。通りで見かける小さな白い花をつけたハナミズキの木が、とても愛らしく映る。

駅に戻って、反対側の出口に立つと、宮沢賢治記念館と記された標識が目に入った。十分も平坦な道を歩いて行くと、坂道になった。

樹木の茂った道を一步一步進み、登り切ったところに記念館が建っていた。今回の旅で、最も訪れたかったところだ。というのも、宮沢賢治のいくつかの童話作品を読むと、仏教とキリスト教から、彼は自分の生きていく方向性を掴みとっていたように映り、その生き方と考え方もっと知りたくなったからだった。

そう広くない館内を二回ほど廻って感じたことは、彼は多くの分野に関心を示し、好奇心の強かった人だったのだと知った。それに、彼の生活様式は宗教、それも法華経とキリスト教から力を得ていたと同時に、それだけ悩みも多く抱えた人だったのだとも思った。

それは彼の童話作品「注文の多い料理店」「セロ弾きのゴーシュ」に、深く読み取ることができる。日本の長い歴史を持つ仏教と、西洋のキリスト教の教えのなかに主人公は身を置き、最後は日本の伝統文化に感謝する内容である。主人公が作者のように見えた。

本音と建前の社会のなかで暮らしていた宮沢賢治が、そこで心の平安を得ていたのかについて心をめぐらせた。それを探ろうとして、あるところへ行くことにした。そこへ向かう前に、歩いて十分したところにある賢治童話村に寄ることにした。

童話村に入り、小高くなっている広場に腰を下ろすと、野球場の面積ほどの芝生の上で二組の家族が座って、お弁当を食べているのが目に入った。その横では、五歳ぐらいの男の子が父親とバットとボールで遊んでいる。すこし離れたところでは、仰向けになって本を読んでいる人もいる。まわりは、木々の萌えるような緑の葉に囲まれ、人が木と花と草に添っているのである。驚くほど静かだ。快いメロディーが微かに聞こえてくる。空気がおいしく、春光が心地良い。おとぎの国にいるような気持だ。前に広がる光景を眺め続けた。

立ち上がり、次の目的地へ向かって歩き出した。お昼はどうに過ぎている。空腹を覚えながら歩いていると、そば処の暖簾が見えた。入ることにしよう。

トロロそばを食べてから、再び歩き出した。すこし行くと、新渡戸稲造記念館へ五百メートルと記された文字が目にとまった。そこへ足を延ばすことにした。

日本の土壌で生まれ、「武士道」なる本を英語で著し、国際場裏で日本と外国との橋渡しをした新渡戸稲造。五千円札の肖像画ともなっており、国際的に活動をし、キリスト教に篤いアメリカ女性と結婚した人だ。

その彼は、日本ではなく、異国の地で妻に看取られながら、どのような思いで七十一歳の生を閉じたのだろうか。

富裕な質屋の長男として生まれ、結婚をしなかった宮沢賢治。もし彼が異国の女性と結婚していたら、と想像しながら館を出た。

田圃が続く道をゆつくりと歩いていると、風がいくらか吹き出してくる。ドイツから被ってきた麦わら帽子が飛ばされそうになったので、手で押さえた。

四十五分が過ぎた。そろそろ着くころだろうと思っていると、賢治詩碑の矢印が目に入った。あとすこしだ。

花巻市街の家々が見え出した。丹精した庭の木々や花たちが、目と心をたのしませてくれる。雪の多いこの地方で、こんなにも多くの花を見るとは想像もしなかった。雪に閉ざされているからこそ、春になって大地から咲く花を待ち、それをたのしむ心がこの人たちには人一倍あるのかもしれない。自然が生活のなかに入っているのを感じながら歩き続けた。

やつと、こんもりした樹木の立ち並ぶところに到着。高村光太郎の筆による、

「東ニ病氣ノコドモアレバ行ッテ看病シテヤリ……。ミンナニデクノボートヨバレ……。サウイフモノニワタシハナリタイ」の碑の前に立った。

宮沢賢治が三十七歳で逝く前に、ノートに書き綴ったこの「雨ニモマケズ……」の文章の内容をもっと知りたいと思った。

デクノボーを幼い心を持った人、純粹な人のようにも読み取れるが、そのような人はいないだろう。自分を知れば知るほど、それができないことを人は知っているからだ。彼の心のうちを察することはできるが、実践となるとほとんど不可能だ。

そして、最後に「サウイフモノニワタシハナリタイ」と動詞で結んでいる。死を直前に意識した人が、なぜそのようなことを書いたのだろうかと考えた。

しばらくその碑の前で立ち尽くしてから、数歩行くと、彼の言葉がいくつも並べてある掲示板のようなものを目にする。そこに、

「わが求むるは まことのこゝば」とあった。それも「まことのこゝば」が、二重に綴られてあった。それを目にして、ハッとさせられた。まわりの、すべての人たちの幸せを願う、彼の心を読んだ気がした。その文字を見続けた。

一時間近くこの碑のところをいいてから、花巻駅へ向かった。

庭に咲いている花を至るところで目にする。庭がない家では、鉢に花を植え、玄関先に出している。花の世話は、愛情がないとなかなかできないもの。家の外に置いてある鉢を見るたびに、ここに住んでいる人は温かい心を持っているのだろうかと思った。

今立っているこの道を、この街で生まれ育った宮沢賢治はシンブルで、より純粋な心で、すべての人たちが平安であるようにと願いつつ、歩いてきたに違いない。

夜ベッドに入るが、なかなか寝つかれないでいた。彼のことを浮かんでくるのだった。

「ケンジさん、人間の声になる前の音を、あなたは作品のなかで擬声や風の音などとしてよく書いていましたね。それらは、人のこゝば声として果たして表現可能なのでしょうか。でも、真実の声は、わたしたちが正直になることによって表現できますよね」

「ケンジさん、あなたは農民の姿になろうとしましたね。当時の農民の厳しい生活苦を、あなたは体で聴き取ったのでしょうか。と同時に、彼らは苦しみのなかにあっても、小さなよこびがあつたと思うのです。それを、あなたは肌で感じ取ることができましたか」

「ケンジさん、あなたは悩みも多かったことでしょう。でも、あなたが逝つたあとで、地元の人たちがあのような記念館を建て、わたしたち一人ひとりに現実とファンタジーの世界を示し、わたしたちの生をより豊かにさせてくれています。そこにこそデクノボー、いや純粋な幼心が湧き出てくるのです。それこそが、ケンジさんの求めた『まことのこゝば』のように思うのです。それを気づかせてくれて、ありがとうございます」

「ケンジさん、あなたのまごころをもっと知りたく、あなたの書いた文を再び読んでみます。この地にいると、そんな気持ちにさせてくれるのです。ありがとうございます。こゝばを大切に心がけながら、生きてゆきます」

## 佐渡

寺泊の宿を出て、再びリュックを背負い、霧雨が降るなかを新潟湾のカーフェリー乗り場へ向かった。

九時五十分、『佐渡おけさ』のメロディーが流れはじめた。と同時に、汽笛が鳴り響き、巨船が動き出した。と、三十四年前、横浜港から欧米へ向けて一年間の旅にひとり出発したことが浮かんでくるのだった。あの時はテープが舞い、『ほたるのひかり』を聞き、胸が震えたものだった。

船の旅は心を揺るものだ。でも、旅なら再び戻って来ることができるが、島流しになった人たちは、もう帰れぬふるさとを思いつつ、ここから佐渡へ向つたのだ。

船内からデッキに出ると、今まで灰色に垂れ下がっていた雲が割れて、青空が広がりはじめていた。寺泊が遠のき、佐渡の島影が肉眼で見えはじめた。あとすこしで、赤泊港だ。

フェリーから降りてから、小型バスに乗り、島の南に位置する小木に到着。そのユ-

スホステルへ向って歩き出した。

ひっそりした商店街には、子供のころに目にした、駄菓子店や玩具店や雑貨店などが軒を密にして並んでいる。それらをのぞくようにして歩いて行くと、二十分ほどでユースと書かれた標識が見えた。もうじきだ。

玄関の戸をガラガラと開けると、魚の匂いがしてくる。漁師の家をユースにあてているのだろうと思っていると、潮の香りがするような顔をしたおかみさんが奥から現れた。そのおかみさんにドイツのユース会員証を見せ、手続きをしてから二階の畳部屋に入った。そして、リュックを置き、一休みをしてから宿根木へ向った。

竹林や田圃や畑、それに農家などを目にしながらの歩きである。道端には、枯れてしまった夏の花を覆い隠すように、薄むらさき色のコスモスがさりげなく咲いている。こちらも、さりげなく通り過ぎよう。

三十分ほどすると、大正九年に建てられた木造校舎が展示場となっている小木民族博物館前に出た。

この地方の歴史を知ろうと思っただけでなかに入ると、ここに住んでいた人たちの生活必需品、それに江戸時代の巻物やら人形などが、ところ狭しと棚や机の上に並んでいる。それらのなかには貴重なものがいくつもあって、ほこりを被って積み重ねてある。それを見ていると、これでよいのだろうかと思っただけ。

もしここが自分のふるさとなら、これらの歴史ある品々をきちんと整理し、説明書も付けて展示したいと思っただけ。いや、もしそのようにしたら、画一的な単調なものになってしまい、訪問者の心に真に響かないかも知れない。ほこりを被り、無造作に置いてあるからこそ、見る者の目を驚かせ、小木の歴史を深く知らせることができるのかもしれない。現に、ここにいると、この村に住んでいた人たちの生活の様子が伝わってくるのだから。

博物館内には、約百五十年前に運搬用として活動していた千石船が、そのままの大きさを復元されていた。その船内を一巡してから、館外に出た。

しばらく行くと、千石船と船大工の里である宿根木が見えてくる。

入江の狭い地形に木造建築、それも船型をした家屋が密集し、納屋や土蔵も林立する家並みは独特だ。小さい女の子が小路で縄跳びをしている。その姿に、この地方の風土と情緒を見る思いとなった。

宿根木で三十分ほどぶらついてから、小木へ戻ることにした。

目の前には、断崖と入り込んだ海岸線が続いている。それらを眺めながら、ゆっくりと一時間ほど歩き続けた。

こんどは、小木のシンボルとされている「たらい船」に乗った。明治初期から岩礁の多いところで、女性たちが直径一・五メートルのたらいに乗り、サザエとアワビ漁をしたという。実際乗ってみると、漕ぐ時に振幅する揺れがなかなかいい。ただ、民族衣装に膝から下は、茶のストッキングを身につけている女性が目の前で櫓を操るので、彼女のうしろ姿だけが映り、それに笠を被った顔が見えない会話は、そう弾まない。その彼女に、訊ねた。

「このたらい船で向こう岸まで渡るとは、可能なのですか」

「以前、寺泊方面までの約五十キロを、十八時間半かけて渡った記録があります」

抑揚のない声が返ってきた。

ユースへの帰り道、今晚八時半から佐渡おけさの踊りが市民センターで催されるとの看板が目にとまった。これはぜひ見学に行かねばと思い、早足で部屋に戻り、先ほど買った餡パンとクリームパン、それにウーロン茶とで夕食を済ませてから、そこへ向った。

小ホールに八時十分に入ると、約二百席には誰も座っていない。二十分が過ぎても、見物客はひとりだけである。と、ステージの幕が上がった。

舞台には、笛と三味線、それにつづみを持った人と歌い手の計六名が着物姿で立っていた。そのなかのつづみを持った人が、マイクを取った。

「これから四十分間、佐渡おけさを含めて四つの民謡踊りを披露します」

こちらに向って、話しかけるように言った。

二人の男性が歌を唄い出すと、三角形の笠をかぶり、着物姿の女性が五名現われ、踊り出した。哀調を帯びた節に、洗練された優雅な佐渡おけさの踊り。そのあとは小木おけさ、これは南国から伝わってきたようでテンポが早く、情熱的だ。

それらの踊りを食い入るように観ていた。特に、一番背が低く、おそらく五十歳ぐらいだろうと思われる人の動きに魅せられていた。彼女の動き一つひとつが、絵になるような線なのである。体と心でたのしく踊っているのが窺えた。特に、肩から腰にかけての線は動きのない流れで、片足を上げて半身をひねる姿は、見ていてぐっと引き込まれるものがあった。

この女性、おそらく日常生活では服を着て目立たない存在だろうが、着物を身につけると、凛としたものが体中に走って、人の目を惹きつけるのではないだろうか。日本女性の容姿には着物がピツタリだ。笠で顔立ちはわからないが、全体が美しいのだ。優美なのである。

五百円払った一人のために、計十一名の正装した人たちが歌い舞ってくれたのである。終わった時、拍手した音がホールに響き渡った。申し訳ないようなうれいような気持ちで交錯した気持ちになった。

ホールを出る際、出口に立っていた係員に声をかけた。

「こんな素晴らしい踊り、他に見物客がいなくて残念に思います」

「ありがとうございます。今日は、どこも宴会があるようで、お客さまはそちらに行っているのでしょうか」

ユースに戻ってから、おかみさんに、客は一人だけだったことを伝えると、

「そうかえ、そのようなこともあるうて」と、笑いながら言った。

「あの人たちは、皆、地元の人たちなのでしょうね」

「そうやえ」

「踊っていた五人のうち、背が低く、五十歳ぐらいの女性の動きに、とくに、魅せられていました。歩いたり足を上げたりしても、着物と白足袋の間に映る素肌を決して見せず、腰から下がピタッと止まっているのです」

「ああ、中村さんのことやね。あの人は、もう六十五才を越えているだえ」

それを聞き、着物姿は老いて艶やかさが増すのではないだろうかと心のなかで思い、そして唸った。

昨晚の素泊まり料金二千八百円を払ってから、ユースを出て、バス停へ向った。

日曜日の午前の今は、小木の町はまだ眠っている。人の姿を見かけない。どの家にも、黄色い牛乳箱が玄関の柱にかかっている、それが懐かしさを呼ぶのだった。子供のころに飲んだ、あの匂いのする味が口のなかで広がった。

一時間ほどバスに揺られ佐和田に着き、島の中央に位置している国仲平野行きバスを待っていると、一枚のポスターが目にとまった。そこには、佐渡文弥人形芝居が毎日四回上演されていると記されていた。それもここから歩いて数分のところだ。もちろん、見学に行くことにした。

三百年ぐらい前に大阪の岡本文弥によって語りはじめられた古浄瑠璃から伝わった人形芝居だ。海外でも上演されているらしい。出しものは、あんじゅと厨子王である。

二人の女性が人形を操り、哀愁を帯びた節まわしに、時には速いテンポとなつての動きだ。見物客は四十名ぐらいである。人情劇なことあつて、皆、終わるころには、ハンカチとティッシュを持って観ていた。

芝居が終わってから、人形を操った女性に話しかけた。

「ドイツで演じたことが、あるのですか」

「わたしたちの座は二人だけで、海外へ行ったことはありません。佐渡に十四ある座のうち、一座は最近ドイツでも演じましたよ」

「二人で大変でしょう」

「片方が病気などで休んだ際は、仕事を持っている人のだれかをお願いして、代わりにやってもらっています。わたしたちは、この会社の社員なのです。観光客がこのおみやげ店やレストランに来るように、この人形芝居が客寄せとなつていのです」

彼女は自分がこの会社員であることを盛んに強調し、他の芝居劇も上演したいのだが、それがなかなかできないのだとこぼした。公の援助金はないとも語った。それを聞き、このような伝統芸能を保護しないと、この文化は廃れてしまうのではないだろうかと思つた。

別れ際に、「ありがとうございました」と彼女に言うのと、「退屈で、眠たくなつたのでありませんか」と訊いたので、「そんなことは、決してありませんでした。次がどのような展開になっていくのか、興味津々でした」と答えると、今まで深刻だった彼女の顔が優しい表情に変わった。

再びバスに乗って、佐渡中央に位置する新穂村のユースホステルに四時過ぎに到着。洋式風の家に入ると、感じのよい居間と食堂、それに部屋にはベッドが置いてある。いい一夜になると思いながら、リュックを置いた。

風呂に入ってから洗濯を済ませ、夕食前ソファで一休みしていると、この女主人が話しかけてきた。

彼女の娘はドイツに二年間滞在していたことがあり、その期間、二回ほどドイツへ行ったことがあると言い、再びドイツ旅行をすると語った。その際は、チュービンゲンにも友達三人で寄りたいたいと言った。

「ご主人と、一緒に行かないのですか」

そう訊ねると、すぐに手を横に振って、

「夫とは趣味が違うので」

と、答えた。どうも日本の女性は、女同士で旅行をするのがたのしいようだ。特に、中

高年の女性から、このような言葉をしばしば耳にした。それを聞くたびに、残された夫はとの思いになった。

もし自分がそのパートナーだったら、耐えられないような気がする。今回気持よく承諾してくれた妻を、ありがたいたいと思った。「あなたが育った国の文化、自然をたのしんでくれば」と言ってくれた彼女だった。

この女主人、ドイツが気に入っているようで、夕食後もドイツの話となった。その彼女から、明日は自転車を借りて、この地域一帯を走り回ることになっている。いつもより早めにベッドに潜り込んだ。

朝食を済ませてから、ペダルを漕ぎ出した。青空には。白い雲が浮いている。サイクリングには最適な天気だ。田舎道を走っていると、道端に白く、黄色く咲いているコスモスが目に入ってくる。蝶々が愉快そうに飛んでいる。道の左右には、緑濃い大きな杉の木が立ち並び、その間を縫うようにしての走行だ。

遠くに、低山が連なっているのが望め、かわら葺屋根の農家の周辺には、田圃が広がり、稲穂が今か今かと、刈ってほしいように垂れている。ここが島なのを忘れてしまうほどの風景だ。

走り続けていると、トキの森に入った。飼育されている朱鷺を、備え付けられてある望遠鏡でのぞいてから、再びペダルを踏み出した。

素朴な佇まいの農村地帯を走っていると、こんなぜいたくな眺めがあるのだろうかと思ってしまう。ゆつくりと漕ぎ続け、数キロほどで加茂湖に出た。

カキの養殖で知られるだけあって、湖畔にはカキの空貝殻が二、三メートルの高さで、いくつも小山のように並んであった。潮の薫りが、肌に快い。走っている道は農道のせいだろう、車の行き来はない。静かだ。

自転車を止め、波のない湖面をのぞくと、七センチほどの白透明のクラゲが揺れながら泳いでいるのが見えた。

再びペダルを漕いでいると、一人のお年寄りが釣りをしているのを目にする。近寄った。

「何が釣れるのですか」

「いや、遊びに釣っているので」

「あの飛び跳ねているのは、何という魚ですか」

「ボラだよ。昔は三十センチのキスやらアジが釣れたが、今はのう……」

しばらく話をしてしていると、浮きがピクツと動いた。お年寄りは手早く竿を上げた。キスがかかっていた。

「やっと一匹獲れたか」

そう言って、ニコツとした。しわが深く刻まれ、濃く色焼けした顔である。この島で暮らしている地元の人だ。

自転車に乗り、再び走り出した。二キロほど行くと、能楽館と記された標識が見えた。上演もしているらしい。興味を覚え、その館に入ることにした。

八百円払うと、一人の女性係員が近寄ってきて、能についての説明をはじめた。そのあと、能舞台での観賞となった。約百五十の席に、見物客は一人だけである。見せものは道成寺で、演じるのは等身大に作られたハイテクロボットたちだ。

それらの動きを見ると、能の雰囲気的なものはいくらか伝わってはくるが、人（演



者」と人（客）との直接的な出会いではないので、心のなかに生じてくる驚くような感動はない。それでも、謡い舞いの十二分間が終ってから、いつか本物を観たいと思った。

人口八万人を割った佐渡では、能楽は昔から今日まで伝えられ、プロでない三百名が演じ、能舞台は約三十もあって、盛んであると彼女は言い、また能の大成者であった世阿弥が、ここに七十二歳の時に流され、それが今も生き続けているとも語った。彼女も、演者の一人である。能面をつけた瞬間、それに舞台で最初に一步踏み出す際の心境を熱い声で語った。

しばらくすると、観光バスから降りた百名近くの人たちが館内に入って来た。彼女は、「ガイドの仕事がはじまるわ」と言っただけで、そちらへ向った。

再び走り出すと、うっそうとした林へ続く木段の道が目に入った。自転車から降りて、その木段の道を歩いて登り出すと、草むしりをしていた小柄な女性がいたので声をかけた。「こんにちは」

「こんにちは」  
彼女は屈んだままの姿勢で、こちらに顔を向けて応えた。さらに登って行くと、神社の前に出た。

周囲には、大きな杉が林立している。そのうちの一本の幹は、特に太く、大人七名の手をつないだ長さにはなるだろう。その横に建っている拝殿に魅せられて眺めていると、先ほど挨拶を交わした女性が傍を通ったので話しかけた。

「草取りは大変ですね」  
「慣れると、そう大変でもありませんよ。わたしはこの宮司で、これも役割の一つなのです」

彼女は長い手袋をとり、顔から噴き出ていた汗を、タオルで拭きとりながら言った。「あそこに見える建物は、能舞台ですか」  
「そうです。六月にはここで上演されます。そのころ、佐渡に來ると、至るところで演能が観られますよ」

この神社の歴史と能楽について訊ねると、快く答えてくれる。明るい顔をした、目のなんと澄んだ女性なのだろうと思い、耳を傾け続けた。最後に、「ごくろう様です」とお礼を述べると、「ありがとうございます」と深くおじぎを返してくれる。

竹と杉が立ち並ぶ百メートルの木段を降りながら、あのような女性が人口の減りつつある佐渡で、島の歴史を守っているのだろうと思った。

朝九時から夕方五時半まで、新穂村とその周辺を自転車で行き廻った。一日だった。日本の山間の風景を目にしたがらのサイクリングが、こんなにもたのしく、心が広がっていくとは思ってはいなかった。新しい発見だ。

## 白川郷

名古屋駅で乗り換えて、特急列車の飛騨ワイドビュー号にひとり乗った。しばらくすると、深い溪谷の下に、青く澄んだ水が所々に見え出し、険しい山々が目に

飛び込みはじめてくる。

単線上を走る列車は、濃い緑に包まれながら建ち並ぶ民家を縫うように進み、ゴトンゴトンと音を鳴らしながら、飛騨川に架かっている小さな鉄橋を渡り、いくつものトンネルを走り抜ける。と、新たな景色が展開してくるのだった。久しぶりの日本の溪谷風景に、懐かしさを覚えながら眺めていた。あとすこしで、高山駅に到着だ。

駅舎を出て、宿探しとなった。リュックを背負って二分ほど歩いていると、シングル二千五百円の看板が目にとまった。あまりに安いので、そこへ行くかどうか迷ったが、足はもうその宿のカウンターに立っていた。

あどけない丸顔をした女性に、

「泊まりたいと思うのですが、部屋を見せてくれませんか」

と訊くと、彼女はこちらを上から下までのぞき込むようにしてから、

「お一人さんですか。いいでしょう。これを持って部屋に行ってください」

と答え、鍵を渡してくれる。それを手にして五階の部屋に入った。トイレと洗面所は付いていないが、清潔そうなベッドが置いてある。これで十分だ。投宿することにした。

リュックを置き、宿を出てから、古い町並みが残っているところへ向って歩き出した。

黒く塗られた出格子が並ぶ通りには、今も江戸時代の城下町の面影を窺えるような町家造りの商家、民家、郷土料理店、それに土産物店が軒を連ねていた。五月下旬のこの時期、観光客の姿を多く見かける。通りで耳にすることは、中国語と韓国語が多い。三分の二以上は、中国や台湾や韓国の人たちだろう。

一時間近く足に任せて歩いていると、疲れを感じはじめたので、どこかで休むことにした。と、ちょうど宮川に架かっている朱色をした中橋の横に、長椅子があったので、そこに腰かけた。

座りながら、目の前を歩いている人の姿を目で追った。

二人連れは六十代のリタイヤーした夫婦たち。三人連れは若い日本の女性。四人以上になると、中国と韓国の人が多い。一人で歩いている人はプラスチックの買い物袋を手に持った地元の人だ。このようなことをしてられるのも、ひとり旅だからこそできるのだろうと思いつつ眺めていた。

日が傾きはじめていたので、腰を上げて、古いさんまちを再び歩き出した。

観光客の姿は消え、店を閉じているところもある。格子窓の奥に明かりが灯り、通りは先ほどとは違う静かな佇まいに変わっていた。落ち着いた風情が漂うなかを、ゆっくりと周囲の古い建物などに目をやりながら、ぶらついていった。

宮川に架かる橋から下をのぞくと、鯉がエサを探している姿が薄暗やみでもはつきりと見える。それに、川に沿って立ち並ぶ家々などを目にしていると、ここが飛騨の小京都なのが納得できた。

翌朝、宿泊代を払ってから、リュックを担いで駅近くのバス停まで行き、朝一番のバスに乗った。

曇り空の下、バスは山峡の村をいくつか通り抜けて、奥へ奥へ走り続けた。新緑を終えた葉が、濃い緑色に変わり、山肌を密に埋めつくしているのが見える。

一時間ほどで、白川郷に到着。早速、観光案内所に行って今夜泊まる宿を斡旋してもらうと、茅葺き屋根の民宿を紹介してくれたので、そこへ向った。

宿に着き、リュックを玄関に置いてから外に出ると、雲の間から太陽が顔を見せはじめた。集落内に建っているいくつかの合掌造りの家屋前で、立ち止まっては、それらの建築様式を眺めていた。

土曜日なせいか、観光客が多い。しばらくして、こんどは緩い勾配を登って白川郷を一望できる高台に立つと、急峻な山々に囲まれた集落が見えた。自然と融和している姿だ。ここですこし立ち尽くしてから、今来た道をゆつくりと下った。小鳥の鳴き声が聞こえ、蟬の声が一段と高くなってくる。五月下旬に蟬の声を耳にすると、思いも寄らぬこと。耳を澄ました。

下の集落に着き、再びどっしりとした大きな合掌造りの家々を見ながらの歩きとなった。所々稲を植えた田の水面が陽を浴びながら青色に輝いている。紫と白の色をした花シヨウブが民家の庭先で誇ったように咲いている。水が至るところで流れているのを目にして、ここが水で育まれている豊かな山里なのがわかるのだった。

遅くなった昼食を摂ってから、こんどは合掌造りの建物内を見学したくなり、野外博物館の民家園に訪れることにした。

園内の九棟の一軒一軒を見て回ったのち、六十度の急勾配はあるだろう大きな茅葺き屋根のある家のなかに入った。ここで、四十数名の大家族が暮らしていたのである。便は数人一緒にできるように、板の間から落とす造りである。木材の組み立ては、風や雪の重みに耐えられるように、釘とカスガイは一切使用していない。すべて荒縄でしばっている。二階は養蚕ができるようになっていた。生活の場と生業の場が一つになったのが、合掌造りのようだ。

家のなかの柱は、どれもススで真っ黒である。囲炉裏のある一階の広々とした空間は、夏は風で涼しいだろうが、冬は豪雪地帯の暮らした。さぞ厳しいに違いない。

二時間以上、博物館の園内についてから外に出て、視線を山に向けると、自生しているダケカンバやブナの緑が山肌を被っているのが望める。目の前のトチノキの横で、田植えをしている人を見かける。ここで暮らしている約二千人のなかには、大勢の観光客が来るのを訝しげにとらえる人もいるだろう。ふと、足元に目を落とすと、一メートルほどの青大将がゆつくりと這っていた。こちらを威嚇しているかのようだ。

夕暮れとなった五時過ぎ、今晚泊まる合掌造りの民宿に戻り、四畳の部屋で、番茶を飲んで一休みしてから、五百メートル先の温泉に行った。そして、大きな湯船に浸かつては出て、それを何度も繰り返していた。

庄川の川瀬の水音が耳に届いてくる。そちらに目をやると、澄んだ水が川底で青色となつて揺れているのが見える。岩魚が泳いでいそうなどころだ。

一時間ほどして銭湯から出ると、陽は山かげに没し、あたりは夕闇に閉ざされていた。通りには、観光客の姿はまったくない。昔からの里山の静かな佇まいだ。温泉で温まった体で、宿に戻った。

部屋に入ると、夕食の膳がテーブルの上に置いてあった。早速、それを食べ出した。この周辺で採れたものばかりである。飛騨肉も盛ってあったが、肉をそう好まないの、勿体ないと思いつつ食べ残した。

部屋は襖四枚で区切れているので、隣室の灯りがふすまの間から漏れてくる。今晚は夫婦連れの会話、それに寝返りする音も聞こえてくるだろう。外では、カエルが盛んに鳴い

ている。

係りの人が布団を持って部屋に入ってきて、それを敷こうとしたので、「こちらで済す」と言ってから、自分で布団を伸ばした。と、一センチ弱ほどの棒状の虫が這っていた。これも、山麓でよく目にする日常的なことだ。

夜中に目が覚め、腕時計をのぞくと、まだ二時過ぎである。カエルの大合唱の声を耳にしながら、再び眠りについた。

六時を打つ鐘の音が、近くの明善寺から響き渡ってくる。

朝食を摂ったあと、リュックを再び背負い、バス停まで歩いて行った。灰色の雲が空を覆い、今にも雨が降りそうな気配だ。

バスは数軒の農家が寄り添っているところを、縫うように走り続け、岐阜県から富山県に入った。と、針葉樹が多くなり、山が一層深くなり出した。

小一時間で相倉口の停留所に到着。リュックを再び担ぎ、五箇山の合掌造りの集落に足を踏み入れた。

日曜日なのに、観光客はほとんどいない。天気が悪いせいだろう。土産店で二、三人を見かけるだけである。白川郷と較べると、二十三棟の茅葺屋根はどれも小さい造りだ。人口がわずか六十名のこの村も、四方を山々に囲まれている。

棚田などを目にしながらぶらぶらしていると、古くから伝わる歴史を背景にしながら、この人たちは暮らしていることを感じ出す。

十メートル先に、地元らしき人がいたので話しかけた。

「ここは静かですね。昨日は白川郷にいたのですが、人の数が多かったです」

「あそこは観光地になってしまった。将来も世界遺産に値するかどうかな」

六十歳ぐらいの男性は、にがにがしい顔で言い、さらに、

「あそこの町役人は、自分の職を辞めて、民宿を運営するようになってしまった。そのほうが儲かるのだから」

と、つけ加えた。

「ここも世界遺産に登録されていますが、年間どのくらいの人が訪れるのですか。白川郷では、百八十万人と聞きましたが」

「まあ三十万人ぐらいだろう。ほら、あそこに三つの茅葺の屋根が見えるだろう。あれらは、今売りに出しているが、なかなか買手がない。家主の子供たちは、大きな街へ行っ てしまい、親は年をとり、長男の家で暮らすようになったりするからな」

「失礼ですが、どのくらいの額なのですか」

「四百万円ぐらいだろう。売る際は、百万円ぐらいだろうが。ただ、ここに長く住むことが必要だ。若い家族が入居してくれればいいのだが」

この人と話しをしていると、ここで誇らしく暮らし、この村の歴史を引き継ぎ、未来にそれを遺していこうとしているのを感じのだった。自然を敬う心が、この人にはあるからだろう。

世界遺産は過去の遺産だけではなく、未来へ続けてこそ、その名に値するだろう。その未来には、自然と共に暮らす人の姿があると思う。目の前にいる方が、まさにそのような人なのだ。

この相倉合掌造り集落に立ち、物静かな佇まいに耳を澄ましていると、気持ちたちが落ち着

き、時間がゆつたりと流れているのを覚えるのだった。このようなところが、日本の原風景なのだ。

## 育った地

受付で宿泊代を払い、ベッドシートを手にして一階の部屋に入ると、ベッドと小さな机、それに三畳ぐらいの広さを掃除するための箒とちりとりが置いてあった。いくら狭い空間だが、一泊三千円と安いのがいい。

一メートル四方の窓から外を眺めると、薄暗やみのなかに松の木が立ち並んでいるが見える。先ほどまで、大学時代の山の仲間たちと、丹沢付近の山々を久しぶりに歩いてきたので、身体は疲れ切っていた。早速、掛け布団にシートを取り付けてから、ベッドに潜り込んだ。

六時半、起き出してカーテンを引くと、四月下旬のやわらかい朝日が松葉の間から輝くように入ってくる。窓を開けると、小鳥たちの鳴き声の替わりに、カラスの声が聞こえる。それも二羽や三羽ではない。カラスの大合唱だ。

外を眺めていると、中学生たちが朝のジョギングをしている姿を見かける。ここは、一九六四年の東京オリンピックの際に、選手たちが寝泊りしていたところである。今はユースホテルになっていた。

さあ、東京での一日のはじまりだ。

共同の洗面所で顔を洗い、自室に戻り、昨晚コンビニで購入した食パンにドイツから持ってきた蜂蜜をぬつての朝食である。窓から入ってくる爽やかな朝の風に、蜂蜜の香りが溶けあい、ゆつたりとした気持ちで食事を摂った。

八時過ぎ、代々木のオリンピック記念青少年総合センター内にあるユースを出て、幼児期から大学を卒業するまで、暮らしたところへ向かった。

小田急線に乗って、新宿駅で降りてから、山手線に乗り換えようとホームを歩いていると、人、人、人の群れである。その流れに入ると、群れから外れるのがひと苦労だ。今も、当時と変わらない。

電車に乗ると、身動きができないほどである。左右に揺れるたびに、体が隣の人に触れる。まわりを見回すと、携帯電話の画面をのぞいている人が多い。それも、若い女性たちばかりだ。

日本の女性たちよ、手元の画面で今日の職場についての情報を得ているのかもしれないが、遠くに近くに視線を向けてはと思ってしまう。一人ひとり、しゃれた服を身に着けているのに、目の輝きを見ることができないのはさみしいかぎりだ。

つり革につかまっていた手が、前にいた女性の茶髪に一瞬触れた。女性は振り返り、こちらを一瞥した。怖いものだ。

四つ目の目黒駅で降りて改札口を出ると、駅前広場である。四十数年前と広さは同じだが、周囲の建物は当時のままではない。とんかつを食べた豚喜店は、今はない。あのやわらかい肉とシャキッとしたキャベツの食感は、特別だった。当時は贅沢な味だった。

ビルの谷間を歩いて行くと、自然教育園前に出た。

さらに進むと、歩道に白い花のハナミズキや赤いツツジの花、それに夏みかんの木に実がなっているのを目にする。当時住んでいたころは、通りに緑の木々がそうなかったのだが、今は違っていた。

五分もすると、結婚式などが催される八芳園が見えた。その門の前を通ると、あのことが浮かんでくるのだった。

夕方の五時過ぎになると、毎日、東京新聞の夕刊百部を肩から背負って、その一部を八芳園に届けていたことがあった。小学五年から中学二年までのことだった。それで得た毎月千五百円の賃金で、時代劇が好きだったので、東映の映画をよく観にいったものだ。今、目を閉じて、美空ひばり、中村錦之助、大川橋蔵、それに片岡千恵蔵などの姿が浮かび上がってくる。ラーメンが四十円の時代だった。

それに、八芳園の前を通ると、小学校から下校中の好きな女の子としばしば出逢ったものだ。あの時は恥ずかしいやら、複雑な気持ちだった。

仲の良かった、クラスメートの一人が、言ったことを今も想い出す。

「よこい、初恋って知っているかよ」  
「初めて恋したことだよ」

懐かしい会話だ。

さらに進むと、白金小学校前に出た。学校から一分もしないとところに住んでいたので、授業がはじまるチャイムが鳴るのを耳にしながら、登校していたものだった。

当時、学校の横に並んでいた牛乳屋、肉屋、豆腐屋、それにパン屋は、今はない。コッペパンに熱く揚げあがったハムフライを挟み、ソースをたっぷりかけてのあの味と匂いを、今でも想い出すことができる。

すこし行くと、住んでいた中二階建ての家はもうなくなって、時間貸しの駐車場となっていた。隣の八百屋と写真館も跡形もない。今は車が十台ほど置かれてあった。変わってしまったものだと思いつながら、その駐車場の一角にしばらく立ち尽くしていた。と、当時ここで、親そして三人のきょうだいたちと一緒に暮らしていた時分のことだ。想い出され、とくに、母の姿が鮮明に浮かんでくるのだった。六十代で逝ってしまった両親。早過ぎた二人の生だった。目を瞑った。

当時住んでいた家の周辺の建物はなくなっていたが、通りはそのままあった。ここで近所の仲間たちと、メンコやビー玉や釘さしをしたものだ。皆、今はどのような暮らしをしているのだろうか。

百メートル進んで行くと、若い学生たちの姿を見かけるようになった。明治学院大学の学生たちだ。女学生たちはいろいろな服を着て、おしゃれを感じる。チュービンゲンの学生たちは、男も女もほとんどジーンズと簡単なシャツを身に着けているが、日本の女子学生は違う。バッグまでも様々で、ファッションショウを見ているようだ。

明治学院大学の正門前を通って、十分ほど行くと、昔通っていた港区立高松中学校の校舎が見えてくる。校門の前に立った。あまりの違いに、目が丸くなった。古びた木造二階の校舎が、今は鉄骨コンクリートの五階建てになっていたからだ。

門の横に立っている掲示板を読んでいると、今は一学年三クラスあって、一クラス三十数名となっている。昭和の団塊世代の時代は、一学年十クラスの編成で、一クラスの人は六十名だった。集団の力動性のなかで、様々な体験をしたものだった。

校舎前の花壇には、いろいろな花が色鮮やかに咲いている。あの当時、花などを校舎内で目にするとはなかった。誰が世話をしているのだろうかと思いつながら、花壇を眺めていた。

鍵のかかった鉄柵の校門前でしばらく立ち続けてから、道幅二メートルの狭い坂道を下った。この道を歩いて学校に通ったのだ。

数分もしないうちに、高いビルディングのみやこホテルが見え出し始める。再びビルの谷間を縫うようにして進んだ。

ふと、腕時計をのぞくと、十二時が過ぎている。すこし先にコンビニがあったので、そこに入り、おにぎり四つとりんごジュースを手にして店を出た。と、通りの向こう側のビルディングが目に入った。

あそこは、当時は小学校のクラスメートの家だった。毎週一回、夜の八時になると、彼の家に行ったことがあった。目的は、白黒のテレビジョンに映る力道山のプロレスを観るためだった。画面の前には、いつも近所の遊び仲間が十名ぐらい畳の上に座っていた。テレビが出はじめたころのことだ。

笛吹童子、赤胴鈴の助、それに月光仮面などの名前が浮かんだ。それに、胸を弾ませながら、漫画の本を借りに貸し本屋にもよく通ったものだ。遠い過去の記憶に存在するものが、途切れることもなくふつふつと湧き出てくるのだった。

五分ほど行くと、緑の木々に囲まれた広い公園が見え出した。そのなかに入り、木のベンチに腰かけて、おにぎりを食べ出した。雲一つない青空の下、爽やかな風を肌と感じながらの時間である。

数十メートル先では、小さな子供たちを連れた若いお母さんたち七、九名が、木の下のビニールシートを敷いて昼食を摂っている。赤ちゃんと乳を飲ませているお母さんもいる。多分、広い道路を挟んで建っているマンションに住んでいる人たちなのだろう。皆の笑い声が軽やかな風に乗って、こちらまで響いてくる。

数えると、四つの小グループが芝生の上で輪になっている。毎日ここに来て、どんな会話を交わしているのだろう。

昔はこのような光景を目にすることはなかった。そのような余裕はなかった。子育ての彼女たちの姿が眩しく映った。妻も若いころ、このような輪のなかに入っていたら、たのしかっただろうに。障がいのあるミヒヤエルに毎日追われていた日々の彼女だった。

昼食を済ませてからも、目の前に映る光景を眺めていた。と、金髪のお母さんとおそらくハーフの幼児二名が公園内に入ってきて、ビニールシートを広げ、その上に腰かけた。

しばらくしてもその親子は、三人のままである。近くにいる日本のお母さんたちも、子供たちも、彼らのところには近寄らない。三人とも寂しいのではないだろうか。複雑な気持ちで、その情景を眺めていた。

ベンチから立ち上がり、ユースホステルに戻ろうと目黒駅へ向かって再び歩き出した。頭のなかでは、当時経験したことが、今の自分とどのように繋がっているのだろうかと思いつけたが、なかなか答えが見つからなかった。

再び山手線の電車に乗って、原宿で降りてから歩き出すと、都内で一番広いといわれる代々木公園の入り口前に出た。

園内に入ると、緑の木々と芝生が、春の陽を浴びながら広がっている。このような優し

い風景が都内にあるのを、二十数年間東京で暮らして知らなかった。

土の道を歩いていると、ジョギングをしている人や、若い男女のカップルや、グループで輪になって芝生の上に座りながら歓談している人たちを見かける。それに、自転車に乗っている中年の女性や、小さな池の側で横笛を吹いている男性、それに親子連れの家族や、視覚障がいのある人と手を結んで駆けている伴走者なども目にする。皆生き生きしている姿ばかりだ。

人ばかりだけではない。犬たちも自由に駆け回ることが出来るランという柵のなかで、他の犬を追い追い駆けたりして、たのしそうに走り回っている。

ふと、立ち止まると、体長十五センチぐらいの亀がのそりのそりと歩いているではないか。そばに女性がいたので話しかけた。

「あなたの亀なのですか」

「ええ、そうですよ」

「毎日ここに来るのですか」

「週に二回ぐらいの割りで、ユウちゃんと散歩しますよ。このユウちゃん、わたしが仕事から帰ると、真っ先にわたしの足の甲にのるのですよ」

中年女性は、ユウちゃんが自分の子供のようだとニコニコした顔で言った。

時々、カラスの鳴き声を耳にしながら足に任せていた。生き物たちは、ここでよろこびを見出しているのだ。自分もそうだ。先ほどまで考えていた、過去の経験と今の自分との繋がりがどのようなものかということが再び浮かんでくる。当時の様々な経験があったからこそ、今の自分がいるし、今をたのしんでいられるのだ。それを、ただ素直にあるがままに受けとるだけだ。

五時過ぎにユースに戻り、一休みしてから青少年センター内にある大きなレストランに行った。一日中歩き廻っていたので、お腹が空いていた。

レストランの入り口で、六百七十円の食券を買い、中華、和食、麺類などの十種類ほどの品々から、自分で選んだものを持ってテーブルに着いた。

あたりを見回すと、皆のお盆にはサラダとデザートがのっている。ここは飲料水とサラダとデザート、それにご飯と味噌汁のお代わりは自由なようだ。そこで二杯目のご飯と味噌汁、それと旅で欠けていたサラダを心ゆくまで食べた。

ここのおかずは、昔親しんだ日本の味だ。それに、大勢の中学生たちと引率の先生たちと一緒に食事である。若い人たちを見ながら日本食を味わっていると、自分の若いころのことが想い出されてくるのだった。このままずっと座っていたくなかった。

よろこびで満ちた胃と心で自室に帰り、五、六人が入れる風呂場に行った。

五月の連休前なので、宿泊客はあまり見かけない。湯船には、一人だけである。しばらく浸かっていると、近所の遊び仲間と銭湯に入り、その帰り道、駄菓子屋で時々ラムネを飲んだことが想い浮かんでくるのだった。あの味は今も覚えている。湯につかり続けた。